

河津館址

— 近畿自動車道舞鶴線に伴う
埋蔵文化財調査報告書(VI) —

1987.4

財団法人兵庫県文化協会

序 文

兵庫県は、南は瀬戸内海、北は日本海に面しており、摂津・播磨・淡路・丹波・但馬にまたがる広大な面積を有しています。

私達の祖先はその生活の足跡を数々残して来ており、県下でも数々の文化財が発見されています。近年開発の増加に伴って、文化財包蔵地を調査する機会が増え、その成果は、祖先の生活や社会を知るための貴重な資料となっています。

このたび近畿自動車道舞鶴線の建設が計画され、兵庫県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて路線内の調査を行いました。その結果、旧石器時代から中世・近世までの遺跡が各地で存在する事が判明しました。本書は、近畿自動車道の建設に先立って、昭和58・59年度に行われた、氷上郡春日町に所在する「河津館址」の発掘調査の成果をまとめたものです。

この報告書が、学問的にはもちろん、文化財保護の普及・啓蒙に少しでも役立てば幸いです。

最後に、発掘調査・整理・報告書刊行にあたり、御指導・御協力頂きました多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月

兵庫県教育長 井 野 辰 男

例　　言

- 1) 本書は近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴い、兵庫県内で実施された埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和58・59年度に実施された兵庫県氷上郡春日町東中字佐中に所在する河津館址発掘調査報告書である。
- 2) 発掘調査は日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
- 3) 調査地域は、近畿自動車道舞鶴線路線内にあたる河津館址の南堀およびその周辺のうち、橋脚基礎部分1,222 m²の範囲である。
- 4) 調査は昭和59年2月に実施した確認調査を輔老拓治・村上賢治の両名が担当し、昭和59年4~6月に実施した全面調査を輔老・村上泰樹が担当した。
- 5) 調査で使用した座標値および標高値は、日本道路公団が設定した STA200 (X = -95,670.1621・Y = +73,827.2573)・B.M.を使用した。本書で用いた方位は座標北である。真北は座標北からN 0°27'50"W、磁北はN 6°50'Wである。
- 6) 本書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1「福知山」・「篠山」である。
- 7) 遺物写真はすべて森 昭氏にお願いした。遺構写真は輔老・村上(賢)・村上(泰)が分担して行った。
- 8) 整理・報告書作業は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（兵庫県神戸市兵庫区荒田町2-1-5）で行った。遺物の実測は村上(泰)・森岡みゆき・嶺村昌美・池田紀子・阿部一二が行い、遺構・遺物のトレースは村上(泰)指導のもと森岡・沼田千里・岡崎輝子が行った。
- 9) 本書の編集は、村上(泰)、村上(賢)の両名が中心となって行った。
- 10) 本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章………輔老

第2章

　　第1節………青木哲哉（立命館大学大学院研究生）

　　第2節………村上(賢)

第3章………村上(賢)

第4章………村上(泰)・森岡

第5章………安田裕司（氷上郡教育委員会）

第6章………輔老

とくに河津館址の地理的背景について執筆をお願いした青木哲哉氏、および河津館址内郭部の調査概要について執筆をお願いした安田裕司氏の両氏には深く感謝するものである。

凡 例

- 1) 遺物実測図は、すべて $\frac{1}{3}$ に統一した。
- 2) 土器残存状況によっては、土器の中心を算出し、180度回転して作図した。この場合中心線を一点鎖線で示した。
- 3) 遺物実測図の断面は、土師質土器・輸入陶磁器は白抜。須恵器・須恵質土器は黒く塗りつぶし、瓦器はスクリーントーンを貼った。石製品・金属製品は斜線で表現した。
- 4) 出土遺物観察表
遺物挿図図版中の番号と遺物写真図版中の番号は一致させている。
また表中の「法量」はすべてcm単位で推定の場合は（ ）をつけた。

本文目次

第1章 調査に至る経緯.....	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 河津館址付近の地形.....	3
第2節 歴史的環境.....	6
第3章 確認調査	
第1節 調査に至る経過.....	11
第2節 調査の方法.....	11
第3節 確認調査の結果.....	15
第4章 調査の成果	
第1節 調査の経過.....	17
第2節 河津館址南堀・土壘の調査（I～III区）.....	17
第3節 近世遺構の調査（IV区）.....	26
第4節 出土遺物.....	39
第5章 東中池改修事業に伴う	
伝「河津氏館址」の調査について.....	59
第6章 結語	65

挿図目次

第1図 河津館址周辺の字限図.....	2
第2図 遺跡周辺の地形分類図.....	4
第3図 東中付近の1m等高線図.....	5
第4図 周辺の遺跡分布図.....	8
第5図 河津館址の位置.....	10
第6図 第4トレンチ西壁 土層断面図.....	12
第7図 調査区設定図 （確認・全面調査）.....	13
第8図 確認調査出土遺物.....	16
第9図 I～III区表土中出土遺物.....	18
第10図 I～III区平面図.....	19
第11図 第7トレンチ1区 北壁土層断面図.....	21
第12図 I～III区堀土層断面図.....	22
第13図 I～III区堀横断面図.....	23
第14図 III区堀内段状掘り込み断面.....	23
第15図 堀内出土遺物.....	24
第16図 土壘内出土遺物.....	25
第17図 堀・土壘法量計測位置.....	25
第18図 I区土壘断ち割り図.....	26
第19図 IV区遺構配置図.....	28
第20図 IV区表土中出土遺物.....	29
第21図 井戸実測図.....	30
第22図 土坑実測図.....	31
第23図 土坑内出土遺物.....	31
第24図 窯状遺構実測図.....	32
第25図 窯状遺構出土遺物.....	33

第26図	石垣出土遺物	33	第34図	瓦器小皿法量分布図	43
第27図	旧道肩部出土遺物（1）	34	第35図	河津館址調査区位置図	59
第28図	旧道肩部出土遺物（2）	35	第36図	河津館址遺構平面図	61
第29図	石垣実測図	35	第37図	堀土層断面図	62
第30図	石垣・整地面 断ち割り土層断面図	36	第38図	内郭部溝状遺構 出土遺物（1）	63
第31図	整地層出土遺物	37	第39図	内郭部溝状遺構 出土遺物（2）	64
第32図	IV区出土の銅錢	38			
第33図	土師質皿法量分布図	40			

図 版 目 次

図版一	遺構 a)調査区全景(西から) b) I～III区土壘・堀遺存状況(東から)	
図版二	遺構 a) I 区館址北東隅土壘・堀遺存状況(南から) b) IV区全景(東から)	
図版三	遺構 a) 2 Tr 西壁土層(北東から) b) 4 Tr (2) 堀内西壁土層(南東から)	
図版四	遺構 a) 5 Tr (2) 堀内西壁土層(東から) b) 6 Tr (1) 西壁土層(北東から)	
図版五	遺構 a) 6 Tr (2) 堀内西壁土層(南東から) b) 7 Tr (2) 堀内北壁土層(南東から)	
図版六	遺構 a) 8 Tr (5) 東壁土層(西から) b) 8 Tr (5) 石垣検出状況(北西から)	
図版七	遺構 a) I 区堀・土壘検出状況(東から) b) I 区土壘検出状況(南から)	
図版八	遺構 a) I 区土壘断ち割り A-A'土層(南から) b) I 区西側土壘断ち割り土層(東から)	
図版九	遺構 a) II 区堀・土壘検出状況(南西から) b) II 区堀・土壘検出状況(西から)	
図版一〇	遺構 a) II 区西側段状掘り込み検出状況(南から) b) III 区堀検出状況(南から)	
図版一一	遺構 a) III 区西側段状掘り込み検出状況(南西から) b) IV 区全景(南東から)	
図版一二	遺構 a) IV 区全景(西から) b) IV 区井戸検出状況	
図版一三	遺構 a) IV 区井戸検出状況(西から) b) IV 区土坑検出状況(東から)	
図版一四	遺構 a) 窯状遺構と石垣検出状況(北東から) b) 窯状遺構検出状況(西から)	
図版一五	遺構 a) 石垣検出状況(東から) b) 石垣検出状況(北東から)	
図版一六	遺構 a) IV 区旧道検出状況(北から) b) VI 区断ち割り状況(西から)	
図版一七	遺構 a) 調査終了後全景(西から) b) 調査後航空写真(北西から)	
図版一八	遺物 確認調査・I 区出土遺物	
図版一九	遺物 IV 区出土遺物	
図版二〇	遺物 IV 区出土遺物	
図版二一	遺物 IV 区出土遺物	
図版二二	遺物 IV 区出土遺物	
図版二三	遺物 鉄製品・銅錢	

表 目 次

出土遺物観察表	50
---------	----

第1章 調査に至る経緯

近畿自動車道舞鶴線は日本道路公団により計画された高速自動車道で、京都府舞鶴市を起点とし、兵庫県美嚢郡吉川町に至り中国自動車道に接続する。

この自動車道は、県内では氷上郡市島町・春日町・多紀郡西紀町・丹南町・三田市を経て吉川町に至る。

昭和43年度、国庫補助事業にもとづく兵庫県埋蔵文化財遺跡分布地図を作成するにあたり、豊岡市・出石郡・朝来郡・氷上郡・多紀郡・三田市等の各市町において分布調査を実施した。河津館址も春日町七日市遺跡他とともに分布地図に登載された。

昭和53年度、近畿自動車道舞鶴線の建設計画が具体化されるにあたり、日本道路公団は兵庫県教育委員会へ文化財保護法にもとづく遺跡所在地の確認を依頼した。

この依頼にもとづいて兵庫県教育委員会では遺跡詳細分布調査を実施し、この結果にもとづいて設計協議を行った。その後、昭和56年度に入って第2回目の遺跡分布調査を実施した。この結果、自動車道建設予定地内では遺跡又は包蔵地として約53ヵ所が確認され、そのなかには当館址の一部が含まれていた。

しかし昭和54年度実施された国庫補助事業の中世城館・莊園遺跡緊急調査では、当館址はその資料から遺漏している。

昭和59年1月、当該地区において県営は場整備事業が実施されるに至った。この事業地区内では河津館址に接する東中池の改修・拡張工事が先行することになった。

この事業、即ち東中池拡張工事について概略を記せば館址の $\frac{2}{3}$ 以上が消滅する内容であった。兵庫県教育委員会では当館址の取り扱いについて兵庫県農林部篠山土地改良事務所柏原出張所・春日町・氷上郡教育委員会と協議を重ねた結果、工法変更により保存することが決められた。

この協議にもとづき、氷上郡教育委員会では工法変更の基礎資料を得るために確認調査を実施した。

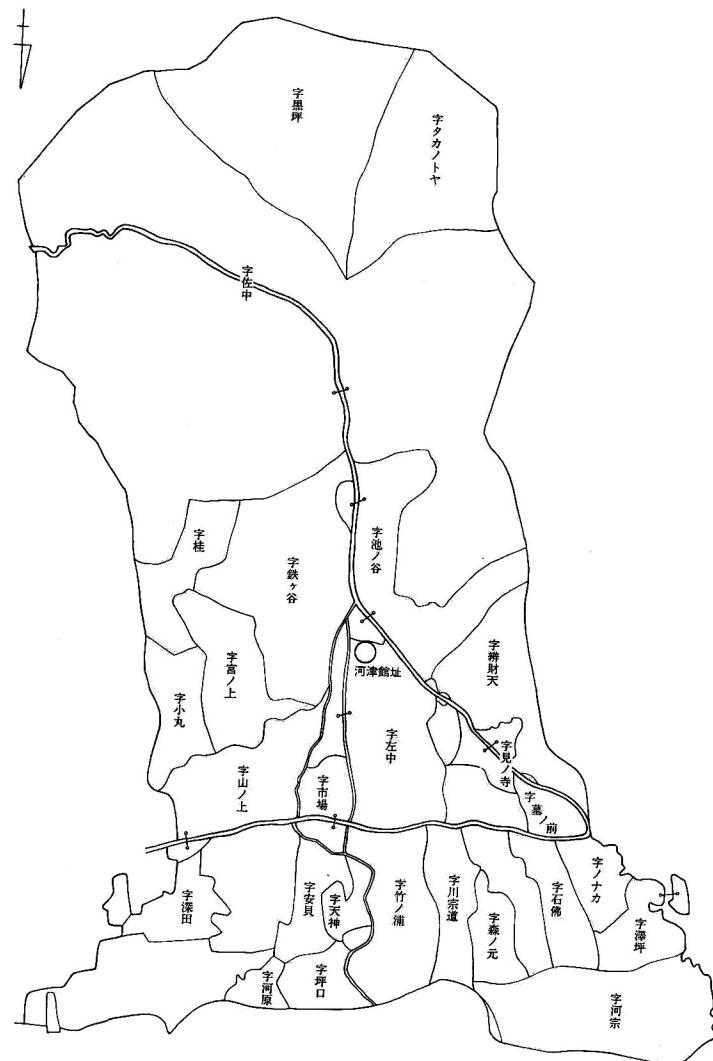
調査の結果、掘立柱群（建物址）・堀・土壘等の諸遺構が検出され、遺物においては鉄製品を始め中国陶磁器・土師器が多数出土した。遺構・遺物とも良好な状態で出土した。時期は16世紀代が中心とみられる。兵庫県教育委員会はこの結果にもとづいて、河津館址を工法変更により現地保存することを協議のうえ決定した。

昭和59年2月、兵庫県教育委員会では近畿自動車道舞鶴線にかかる河津館址の確認調査を実施した。

調査は現地踏査から始めた。最良の調査方法を採用するため、郭の内外を詳細に観察した。

その結果、堀・土塁部については確認調査の必要性がないと断言できる程良好な状態で遺存していた。郭外及び西側平坦地に遺構・遺物の存在を確認する必要からトレンチ23本を設定し、時期の決定及び他の遺構の存在をみきわめる調査を実施した。調査内容等については第3章を参照されたい。

昭和59年4月、確認調査結果にもとづき、当館址の取り扱いについて兵庫県教育委員会と日本道路公団との協議の結果、破壊やむなしとの統一見解を打ち出したため、橋脚基礎部にあたる工事対象地区の全面発掘調査を実施するに至った。当該地区の面積は1,222m²である。



第1図 河津館址周辺の字限図

第 2 章 遺 跡 の 環 境

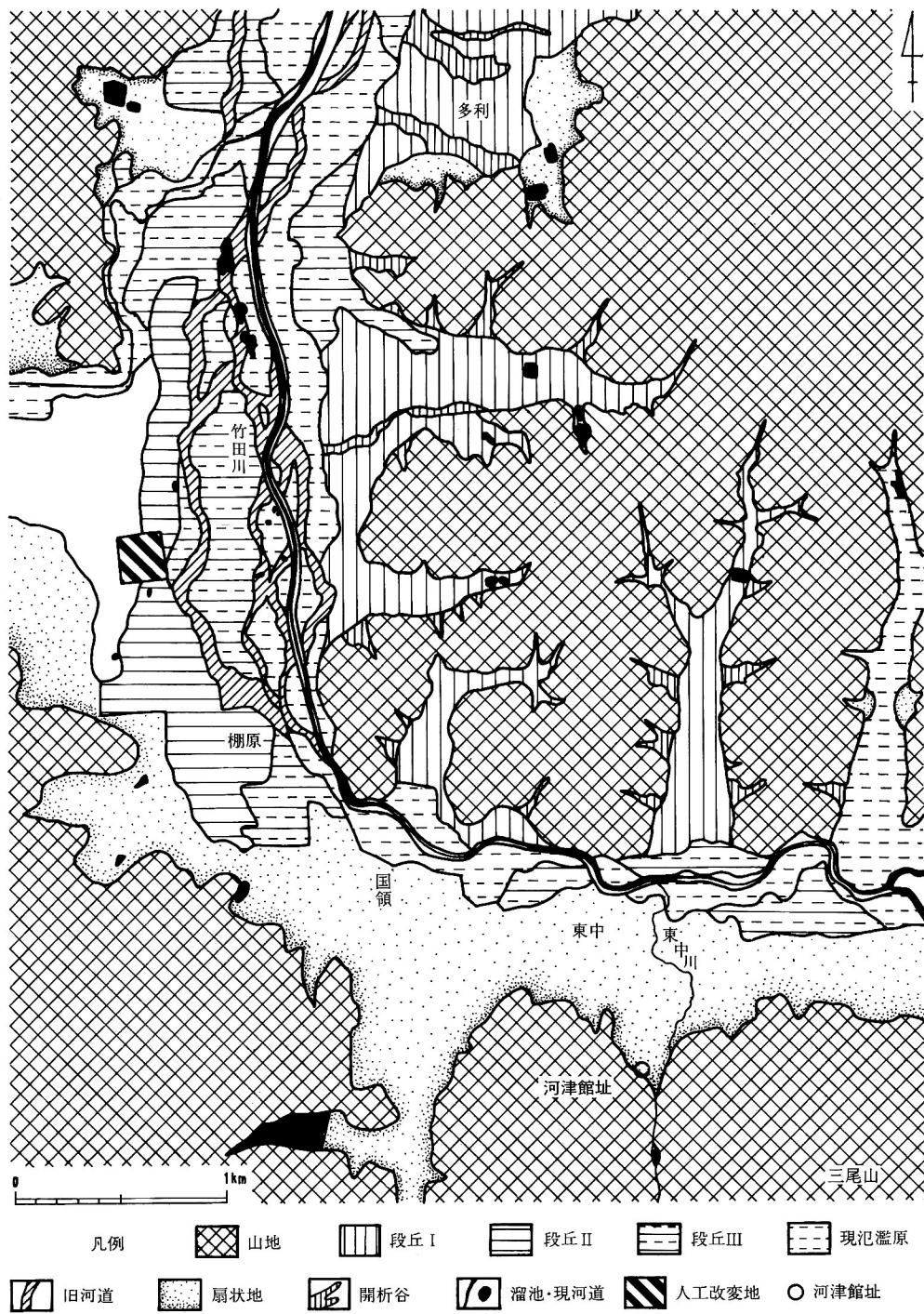
第 1 節 河津館址付近の地形

河津館址は、由良川の支流である竹田川の上流に位置している。遺跡の周辺は、栗柄峠から国領に至る東西に細長い谷にあたり、周囲には標高300~600mの山々が連なっている。竹田川は、小規模な河川を合わせながらこの谷中の北部にやや偏って西流した後、国領付近で北方へその流路を変える。

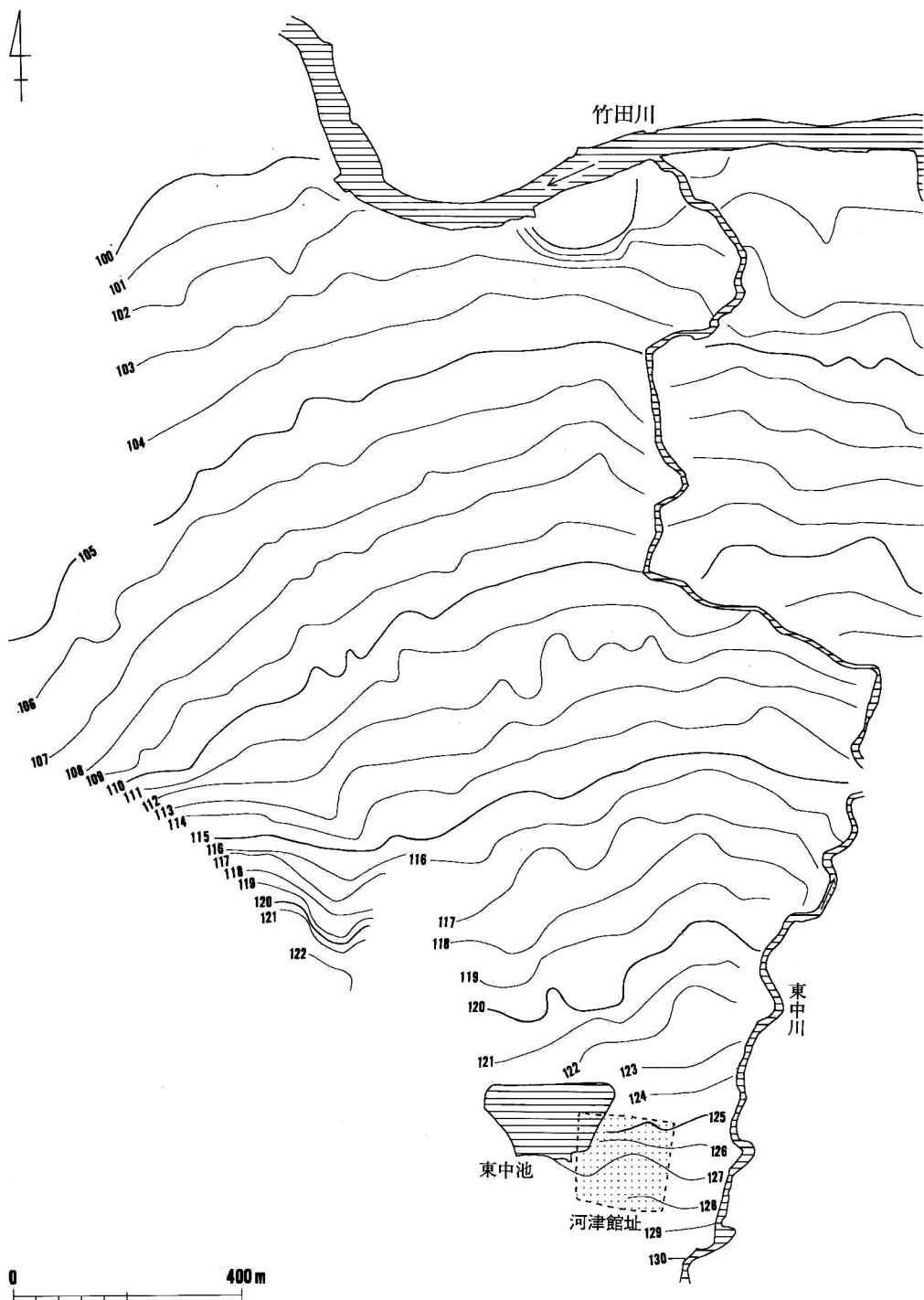
この谷中には段丘、扇状地および現氾濫原などの地形が認められる（第2図）。段丘は、多利付近より上流において上位のものから段丘I、IIおよびIIIの3面に区分されるが、これらのうちこの谷中には段丘IとIIIが分布している。段丘Iは、竹田川の右岸に発達し、最も低い現氾濫原とおよそ2mの比高をもつ。これに対して、段丘IIIは現氾濫原より1~1.5m高く、竹田川に沿ってその両岸で断片的に認められる。谷の南側を画する山地の麓には、扇状地が数多く分布している。^{注)}これらは、山地側から北方へ徐々に高度を下げており、国領付近のものを除いて傾斜が比較的大きい。河津館址は、これらのうち東中付近に発達している扇状地の扇頂付近に位置している。

遺跡が位置する扇状地は、東西が約1km、南北がおよそ900mにわたって広がる小規模なものである。扇頂付近は標高およそ300mであり、そこから約30.3%の傾斜で北方へ高度を減じる。この扇状地の南側には標高586mの三尾山があり、その山腹に源を発する東中川が扇状地の中央付近を流下した後、竹田川と合流している。東中川は、小規模ではあるものの過去この扇状地を下刻したため、現在東中川の河床と扇状地の地表面との間にはおよそ2mの比高がみられる。他方、この扇状地の扇端は、段丘IIIと傾斜変換線によって、現氾濫原と竹田川の侵食のために形成された崖によって境されている。すなわち、東中川はこの崖の形成による侵食基準面の低下に伴って扇状地を下刻したと考えられ、またこの時期以降竹田川ならびに東中川の洪水は、この扇状地にほとんど及ばなくなつたと推定できる。

この扇状地における1m間隔の等高線図（第3図）によると、いくつかの微高地が認められ、これらは特に扇頂から扇央にかけて明瞭に分布している。これらの微高地は、扇頂一扇端方向に細長く、最大およそ240mの長さに達する。周辺との比高は30~50cm程度で、扇頂に近い側では緩やかに高くなっているのに対し、扇端方向へは比較的急傾斜でその高度を減じている。このような微高地は、扇頂付近にも不明瞭ながらみられ、河津館址はこの微高地上に立地しているのである。



第2図 遺跡周辺の地形分類図



第3図 東中付近の1 m 等高線図（数字は標高(m)）

注)

田中・野村・井上（1986）は、この扇状地の山地側における地形をさらに細分し、それらを麓層面として報告した。

第2節 歴史的環境

河津館址のある氷上郡春日町にも数多くの遺跡が存在するが、最近になるまで発掘調査はあまり行われなかった。近年、ほ場整備や道路建設などの大規模開発が行われるようになり、従来知られていなかった遺跡が、次々と知られるようになった。特に近畿自動車道舞鶴線の建設に伴って、氷上郡でも昭和57年度から兵庫県教育委員会が調査を行っている。その結果、春日町内では、松ノ本古墳群、多利遺跡（前田・岡中・小向・寺ノ下遺跡）、春日・七日市遺跡、山垣遺跡、国領遺跡、そして河津館址が発掘調査された。河津館址周辺の遺跡について、概略を述べる事とする。

まず旧石器時代の遺跡についてみると、県教育委員会が昭和59・60年度に調査した春日・七日市遺跡（12）がある。姶良Tn火山灰層の下層から、ナイフ形石器・搔器等の石器、石核、剝片、破片など5,000点以上が約20ヵ所の集中地点にわかつて出土した。また遺構として3ヵ所の礫群が検出されており、近畿でも最も古く、しかも最大規模の旧石器時代の遺跡である。

縄文時代の遺跡としては、仮称カナツキ遺跡（8）があるが、細片が表採されているのみで、詳細は明らかでない。

弥生時代の遺跡としては、前述の春日・七日市遺跡が注目される。県教委の調査で、竪穴住居跡数十棟以上、墓（土塚墓・木棺墓）、溝、柱穴多数が検出された。また昭和56年にはほ場整備に伴い春日七日市遺跡調査団（団長 大阪経済法科大学村川行弘氏）によって調査が行われ、竪穴住居跡・方形周溝墓群が検出されている。野々間遺跡（16）では、銅鐸2口が出土した。しかも2号鐸は、1号鐸の調査中に埋納塙に収められた状態で検出されており、学術上貴重な調査例となっている。国領遺跡（21）でも竪穴住居跡等、弥生時代人の居住地が調査されている。野村石剣出土地（15）では、完形の銅剣型石剣が一振出土している。なお春日・七日市遺跡でも、銅剣型・鉄剣型あわせて数点が出土している。

古墳時代の遺跡としては、春日町に現存する唯一の前方後円墳が、全長34mの二間塚古墳（9）である。石室があったと伝えられる。また、現在の多利の集落の東と南に位置する尾根及び山麓に、松ノ本古墳群（7）、多利向山古墳群（5）、芝ヶ西古墳群（4）などが築造されている。松ノ本古墳群は、円墳9基と箱式石棺1基が調査されており、5世紀末～6世紀前半に築造されている。多利向山古墳群は、尾根ごとにA・B・Cの3支群にわけられて

いる。最も東方にあるC支群は4基の円墳から構成されるが、そのうちの1基は、方形プランの両袖式横穴式石室を埋葬施設としている。この古墳も6世紀中葉頃に築造されたものであり、多利地区に後期後半以降の群集墳は現在のところ見つかっていない。集落遺跡では、春日・七日市遺跡で竪穴住居跡が数十棟検出されている。春日・七日市遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期まで集落が営まれ、拠点的集落であったと考えられている。古墳時代中・後期の集落遺跡は、現在のところ発見されていない。

その後の時代の遺跡としては、「苻春部里長等」という木簡の出土した山垣遺跡（13）が注目される。堀をめぐらした奈良時代の建物跡1棟が調査され、堀内からは土器（墨書き土器を含む）のほかに木簡21点、木製品500数点が出土している。この遺跡は、里長に関する公的施設の性格を有するものと推測されている。春日・七日市遺跡でも、やや時代が新しくなるが、掘立柱建物が数十棟検出されており、一辺が1m以上の方形掘方を持つ3間×5間の掘立柱建物も見つかっている。多利・前田遺跡（6）では、鎌倉時代初期の掘立柱建物11棟と雨落ち溝を調査している。和鏡、白磁小皿、青白磁の蓋付壺と合子の身などを副葬した土塙墓が検出されている。11棟の掘立柱建物は、館址的な性格をもつものと考えられている。

中世の山城も数多く遺存している。中でも黒井城（保月城・保筑城）は保存状態も良く、昭和48年に県下の山城としては初めて、兵庫県重要文化財史跡に指定されている。城のある黒井は、春日町の中央部に位置しており、西・北・東南の三方からの交通の要所に当たる。西から北へは、現在国道175号線がとおり、東南へは、県道栗柄線が走っている。城は、国道と県道の交点の北側に位置し、春日町内中心部のほとんどを望むことができる城山（猪ノ口山、標高356m）の山頂に立地している。建武2（1335）年、赤松貞範が猪ノ口山に城を築いたのが始まりで、その後天正年間赤井悪右衛門直正の時代に、大改修が行われている。天正7（1579）年明智光秀の丹波攻めに合い落城しているが、落城後は人の手が加えられることなく、今日に至っている。遺構としては、石垣・石段・空堀などをとどめるにすぎないが、本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・帶曲輪など本城の縄張りはもちろん、千丈寺・竜ヶ鼻・百間馬場・的場などの砦跡も遺存している。また南側山麓には興禅寺があるが、ここは下館と考えられている。

三尾城（26）は、黒井城の南東約8kmの所にある山城で、南は佐仲峠をへて多紀郡へつながり、山裾には栗柄峠へつながる道（現県道栗柄線）がはしり、多紀郡の諸城と連絡をとる為の交通の要衝に立地している。永禄年間に築城され、赤井幸家が城主であったが、天正6（1578）年、光秀の攻撃によって落城している。

上記の両城のほかに、周辺には野上野城址、野村城址、長谷城址、慰ヶ腰城址、柚津城址、東中城址、大路城址といった城がつくられているが、多くのものについては詳細は不明である。野村城址については、水濠、土塁が北・東・南の一部にめぐった平城であることが遺存



- | | | | |
|-----------|--------------|------------|--------------------|
| 1 兵主古墳 | 2 黒井城址(保月城址) | 3 多田散布地 | 4 芝ヶ西古墳群 |
| 5 多利向山古墳群 | 6 多利前田遺跡 | 7 松ノ本古墳群 | 8 (仮称)カナツキ遺跡カナツキ古墳 |
| 9 二間塚古墳 | 10 野上野窯跡 | 11 野上野城址 | 12 春日・七日市遺跡 |
| 13 山垣遺跡 | 14 野村城址 | 15 野村石剣出土地 | 16 野々間遺跡 |
| 17 塩ヶ谷古墳 | 18 塩ヶ谷岡田古墳 | 19 塩ヶ谷山王古墳 | 20 棚原散布地 |
| 21 国領遺跡 | 22 高尾城址 | 23 柚津城址 | 24 東中城址 |
| 25 河津館址 | 26 三尾城址 | 27 下三井庄塚古墳 | 28 中山古墳(?) |

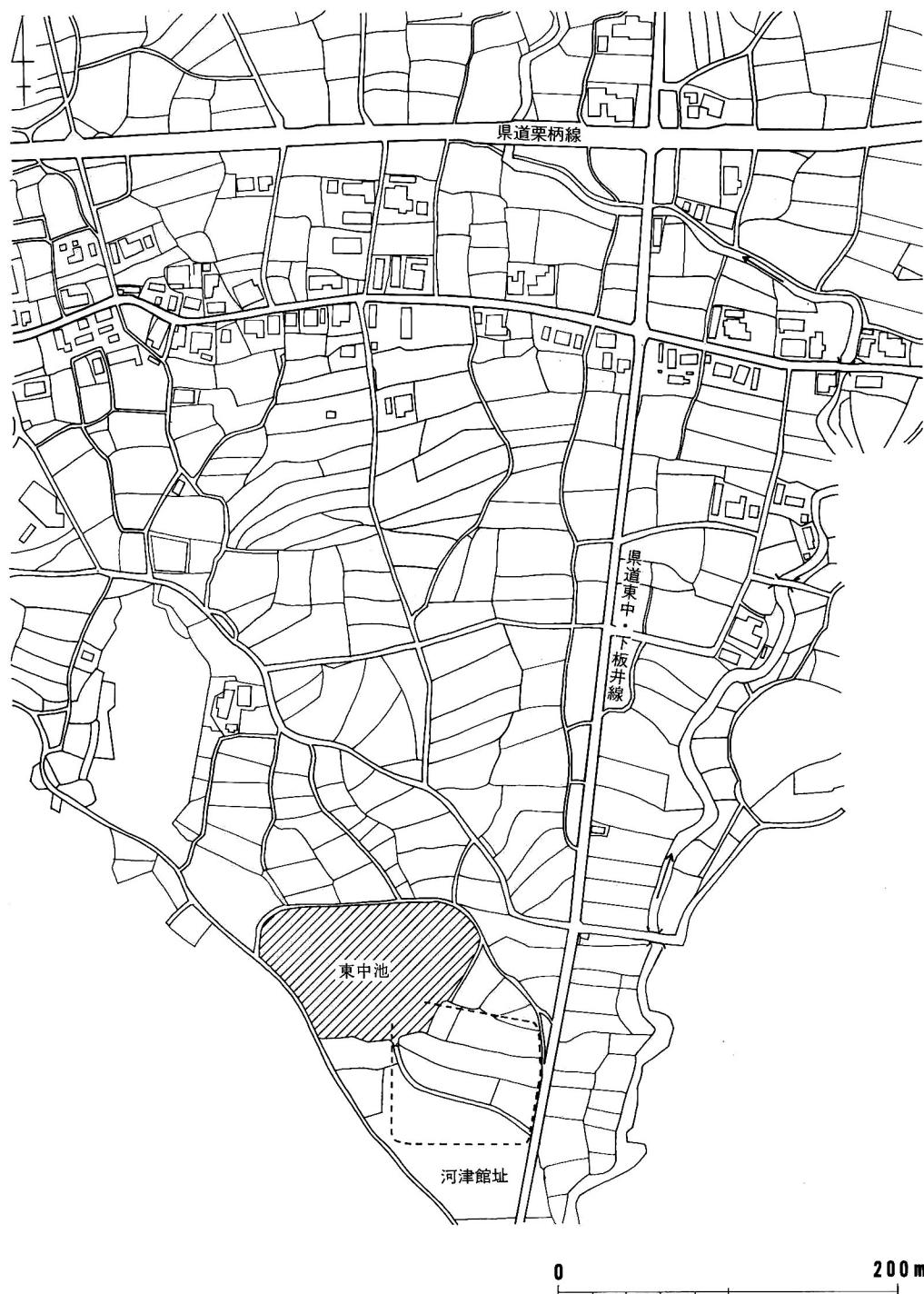
第4図 周辺の遺跡分布図(1:50,000)

する遺構から判明している。

以上、河津館址をとりまく遺跡について若干述べて来た。当然このほかにも現在知られていない遺跡が今後発見されるであろうがその際には、破壊を前提としない調査・保存が望まれる。

参考文献

- 兵庫県教育委員会 「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」 昭和57年
- 兵庫県「兵庫県史 第3巻」 昭和53年
- 丹波史談会 「丹波水上郡志 上巻」 (復刻版) 昭和60年
- 細見末雄 「丹波の莊園」 昭和55年
- 田代克己、渡辺武、石田善人編 「日本城郭大系 第12巻」
- 兵庫県教育委員会 「兵庫県文化財調査報告書 第26冊 松ノ本古墳群」 昭和60年
- 兵庫県教育委員会 「春日・七日市遺跡現地説明会資料1~3」 昭和59年
- 兵庫県教育委員会 「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度」 昭和59年
- 兵庫県教育委員会 「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」 昭和60年
- 兵庫県教育委員会 「近畿自動車道関係埋蔵文化財調査概報 山垣遺跡」 昭和59年
- 春日七日市遺跡発掘調査団 「春日七日市遺跡確認調査報告書」 昭和59年
- 樋本誠一、瀬戸谷啓 「日本の古代遺跡2 兵庫北部」 昭和57年
- 財團法人国土地理協会 「全国遺跡地図28 兵庫県」 昭和57年



第5図 河津館址の位置

第 3 章 確 認 調 査

第 1 節 調査に至る経過

近畿自動車道の建設が計画された後、兵庫県教育委員会は路線予定地内の遺跡分布調査を行った。その際多くの遺跡が存在する事が判明したが、氷上郡春日町東中でも、土壘及び堀と思われる遺構が発見された。これらの遺構の存在する地点は、『丹波志』にいう「河津館址」に相当するものと思われたため、遺跡名も「河津館址」とされた。

昭和58年度に、「河津館址」の確認調査は、昭和59年1月17日から3月30日まで行われた。調査の目的は、館址をめぐると思われる土壘及び堀の範囲を確認する事と、その他の遺構の有無とを確認する事であった。

遺存する土壘と堀は、東中集落から佐中峠に至る県道東中・下板井線の西側に位置しており、春日町と西紀町の境に位置する黒頭峰から北へ延びた2本の尾根（東側の尾根の先端は三尾城址が立地する三尾山となる）に挟まれた谷の出口付近に立地していた。周囲の地形から、この両尾根に挟まれた範囲について確認調査を行った。

第 2 節 調 査 の 方 法

確認調査のトレント設定に先立って、日本道路公団が伐採した木を片づけたところ、土壘状の高まりと堀状の落ちが、路線予定地の北側ラインと重なるように存在した。土壘状の高まりは県道東中・下板井線と接する付近で東端となり、西へ直線的に延びていた。そして約85m西で直角に北へ折曲し、路線外へ延びていた。また、堀状の落ちも土壘状高まりの南側に沿うよう巡っていた。

以上のような地形を考慮してトレントを設定したが、設定にあたっては日本道路公団が設定した道路センター杭 STA200と STA201を結ぶラインを基準線とし、STA200を基準点とした。

トレントは、第1トレントから第9トレントまで設定したが、第1第2トレント以外は、複数の短いトレントから成っている。便宜上それらを「第3トレント1区」「第3トレント2区」というような呼称をしている。以下、本文中では、第3トレント1区を「3Tr1区」というように呼ぶものとする。

1・2Tr

県道東中・下板井線と東中川の間に作られた水田に設定したトレントで、現状では土壘上の

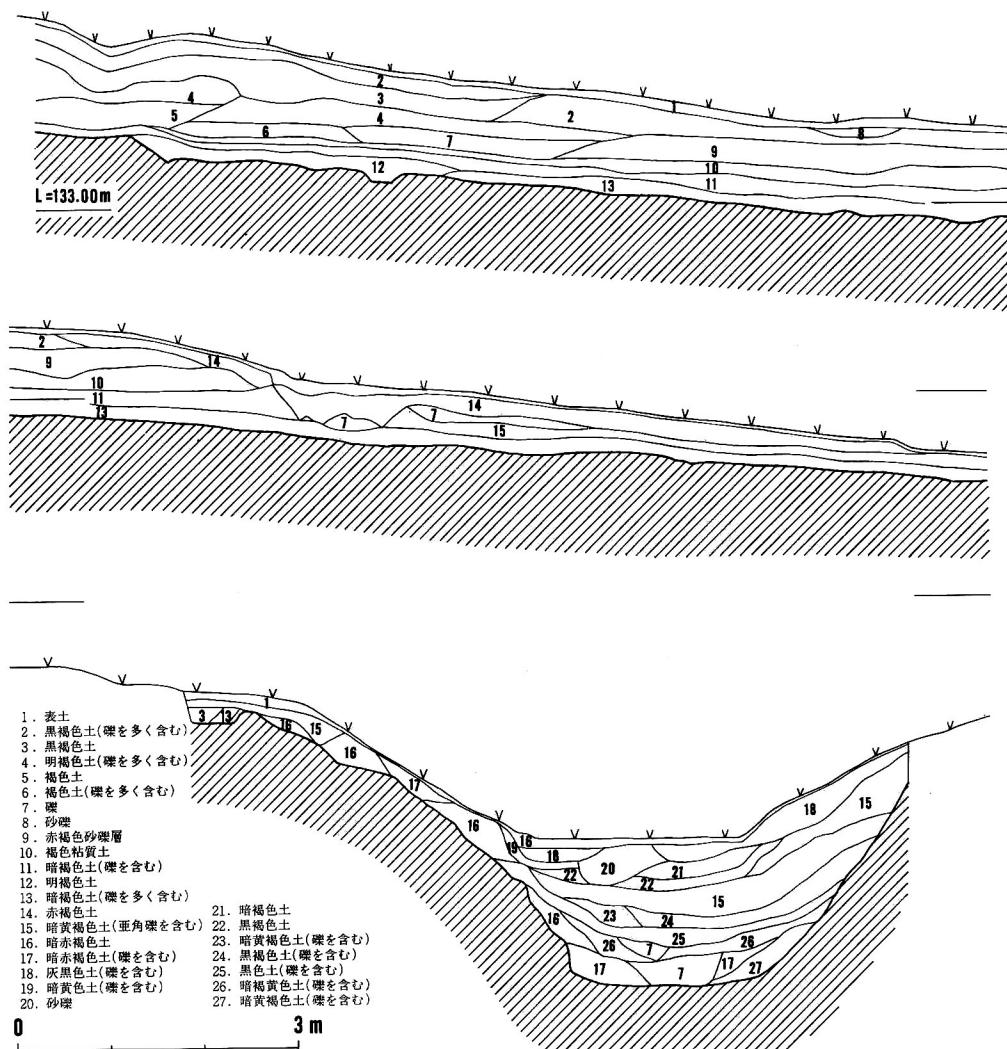
高まりも堀状の落ちも認められなかった。堀が東へ延びている可能性が考えられたため、確認する為に設定した。

3Tr

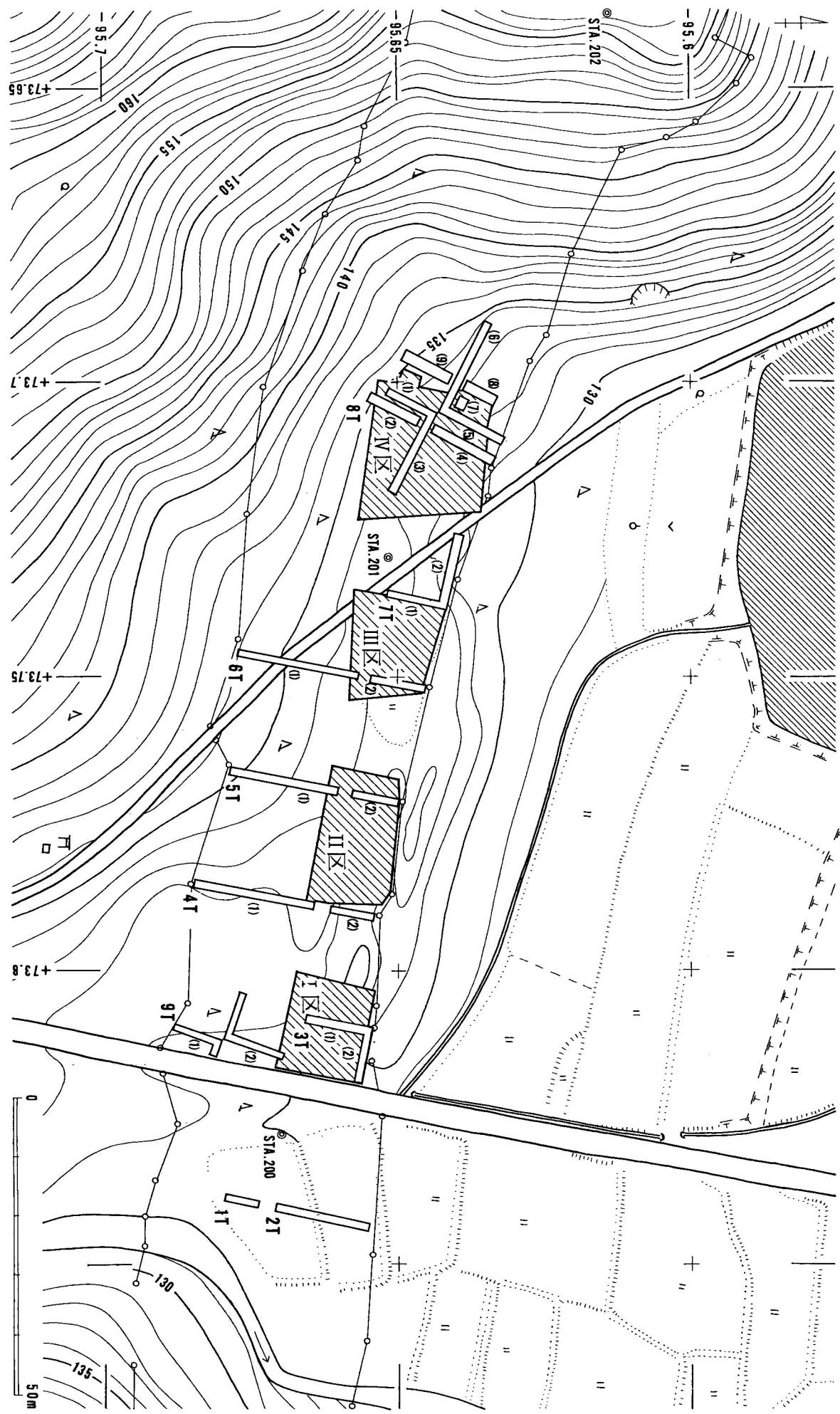
土壠状高まりの東端にL字形に設定したトレーニチで南北方向のものを1区、東西方向のものを2区とする。堀が東へ延びるのか、北へ折曲するのかを確認するためのトレーニチである。

4・5・6Tr

土壠状高まりに直交するように設定したトレーニチで、基準線の南側を1区、北を2区とす



第6図 第4トレーニチ西壁土層断面図



第7図 調査区設定図(確認・全面調査)

る。

7 Tr

土壘状高まりの西端にL字形に設定したトレーニチで、南北方向のものを1区、東西方向のものを2区とする。

8 Tr

7 Trの西側にある平坦面に設定したトレーニチである。この平坦面は、今回の調査対象範囲の西端にある、北向きの尾根の東斜面が、急に傾斜を緩めた地点に認められ、西側平坦面と呼称する事とした。当初十文字のトレーニチを設定し（1～4区）、後に5本を追加した（5～9区）。

9 Tr

3 Trの南側に認められた、緩斜面を削り出したような平坦面に十文字に設定したトレーニチである（1～4区）。

第3節 確認調査の結果

1・2 Tr

1 Trでは、耕土、床土の下に山からの流土の堆積が認められたが、遺構・遺物は検出できなかった。2 Trでは、現在の水田面が一段下った付近で、地山も急に北に向かって落ち込んでいる。この落ちよりも北側では、川の作用と思われる砂礫の堆積が認められた。旧東中川の河道と考えられる。

3 Tr

2区で、南北方向の堀（東堀）を検出した。これで、南堀は県道東中・下板井線の西側で北に向かって折曲し、東堀となる事が判明した。土壘も、遺存している東端で、北に折曲していたものと思われる。

4・5・6 Tr

各トレーニチとも1区では、南から北へ向かって緩やかに下る斜面を、現地表面下50cmで検出したにすぎない。堆積土は南側から流れて来た流土の自然堆積層で、遺物包含層は認められない。2区では、南堀の底を確認した。堀の断面は逆台形をしており、南側の肩から測定すると底まで約3mを測る。底の幅は約2mで、底から約80cm上方の埋土中で人頭大の亜角礫の層が認められた。

7 Tr

路線予定地内にしかトレーニチを設定できなかったため、西堀の断面観察はできなかったが、2区で堀の西南コーナー部分の東西断面を得た。堀内の土の堆積状況は4 Tr・5 Tr・

6 Tr の 2 区で見られた堆積と同様であった。4 Tr 2 区で見られたような人頭大の亜角礫が、堀の中央部で底から上方 85cm まで堆積しているのが注目された。この亜角礫層の中には土砂があまり流入しておらず、亜角礫が自然の作用で堆積したとは考えにくい状態であった。

8 Tr

当初 1 ~ 4 区を調査したところ、4 区で浅い擂鉢状の土坑の中から丹波焼の甕の破片が出土した。また、柱痕と思われる黒色土が認められたため、この平坦面には何らかの遺構が存在するものと予想された。そのため、5 ~ 9 区を追加して調査したところ、5 区北端の平坦面と旧道の間の段部分に、石垣状の石組みが検出された。

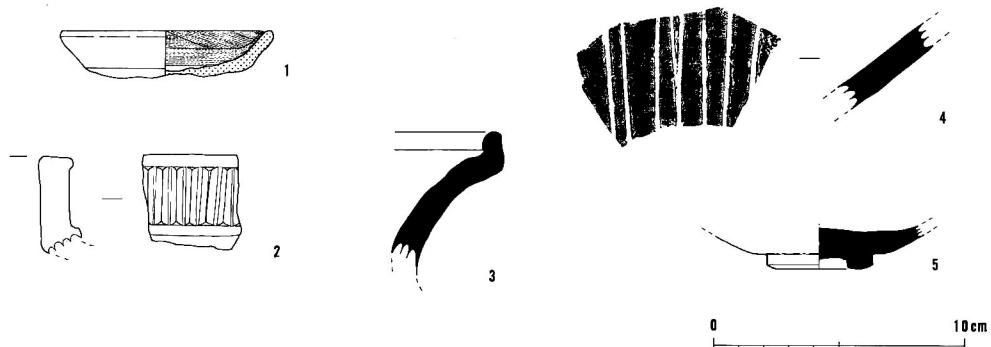
9 Tr

自然堆積の土層が観察されただけで、遺物・遺構は検出されなかった。土取り等によって新しく作られた平坦面と思われた。

以上が、確認調査の結果であるが、その成果をまとめてみると、次のようになる。

1. 南堀の東端及び東堀の一部を確認した。
2. 堀の南側には遺構が存在する可能性が小さい。
3. 西側平坦面には、石垣をつくった上に建物が存在する可能性が大きい。
4. 南堀では、砂礫の堆積のみが見られ、泥・粘土等の堆積が全く見られなかった。また調査中でも湧水がみられなかった事から、堀は空堀であったと考えられる。
5. 南堀、特に南西コーナー部分では人頭大の亜角礫の堆積が認められ、この礫は人為的に投げ込まれたものと思われる。

時期を確定できる資料を得る事はできなかったが、上記の成果をもとに、昭和59年度に本調査を行った。



第8図 確認調査出土遺物

第 4 章 調 査 の 成 果

第 1 節 調 査 の 経 過

前年度、1～3月にかけて実施された確認調査の結果、3～7トレンチで堀および土塁が、8トレンチで石垣遺構・土坑が、それぞれ確認された。3～7トレンチで検出された堀および土塁は、河津館址の南堀および土塁に相当する遺構で、とくに3トレンチ(1)・(2)では、調査前の肉眼観察では不明瞭であった河津館址の南東隅が明確にされた。3トレンチないし、7トレンチで確認された堀は、それぞれL字形に北へ折れ曲り、当館址が周囲に一重の堀を巡らした、南辺85m程度の規模をもつ、いわゆる「方形館址」の可能性が高いと判断された。

8トレンチでは、江戸時代後期以降に比定できる丹波系の甕を包蔵する土坑をはじめ、石垣遺構が確認され、新たに近世の遺構が存在することが判明した。

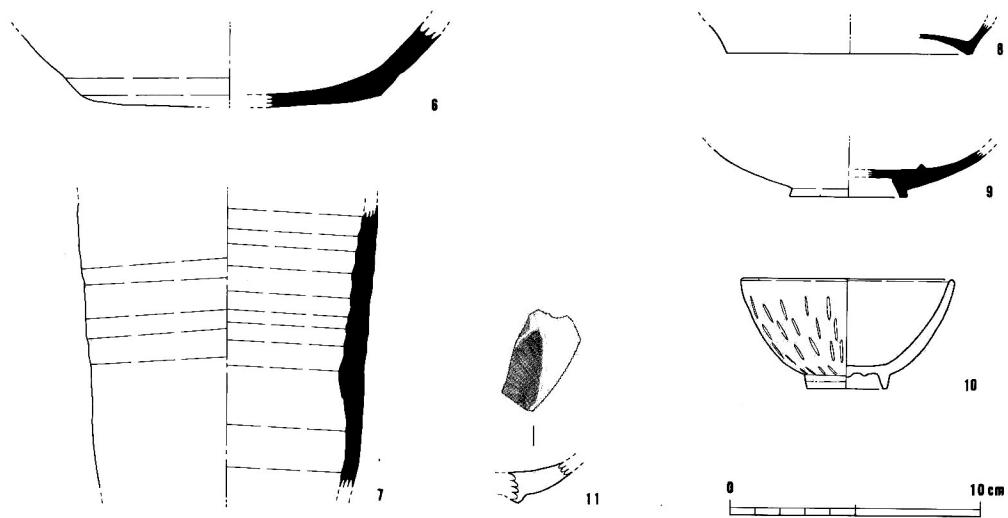
以上の確認調査の成果を踏まえ、日本道路公団福知山工事事務所と遺跡の取扱い、とくに当館址の保存について協議した結果、土塁・堀部分の保存については、現状では不可能であるとの解答を得た。その後、県教育委員会では遺構保存対策について検討を行った。その結果、橋脚基礎工事部分のうち、遺構が確認された1,222m²（I～IV区）の調査を昭和59年度に行うことになった。

内郭部については、昭和58年2月には場整備事業関連工事で当館址推定域の約2/3が工事予定内に含まれたため、県教育委員会の指導のもとに氷上郡教育委員会の手で遺跡確認調査が実施された。その結果、当館址西側で、土塁・堀の存在が確認され、また内郭部についても建物址・土坑等の遺構を検出でき、遺存状況が良好であることが判明した。その後、兵庫県教育委員会も含めて、遺跡の取扱いの協議がもたれ、内郭部および現存する堀・土塁は、現状保存することになった。同一の遺跡で、記録保存・現状保存部に分けられた状態で調査を実施せざるを得ない状況となった。この経緯は、本文第1章に記している。

第 2 節 河津館址南堀・土塁の調査(I～III区)

立地と現状

河津館址は、小谷内に発達した比較的傾斜の緩やかな扇状地の扇頂部に立地する。河津館址南側の山腹よりはじまる緩斜面は北東方向に大きく張り出し、調査区東側のI区では傾斜



第9図 I～III区表土中出土遺物

角8°を測る。館址が構築された旧地形は、この緩斜面の中でも傾斜角3°のほぼ平坦な地形であったと推定される。当館址は、現在南側が広葉樹・針葉樹で覆われ、内郭部およびそれ以北は水田化している。

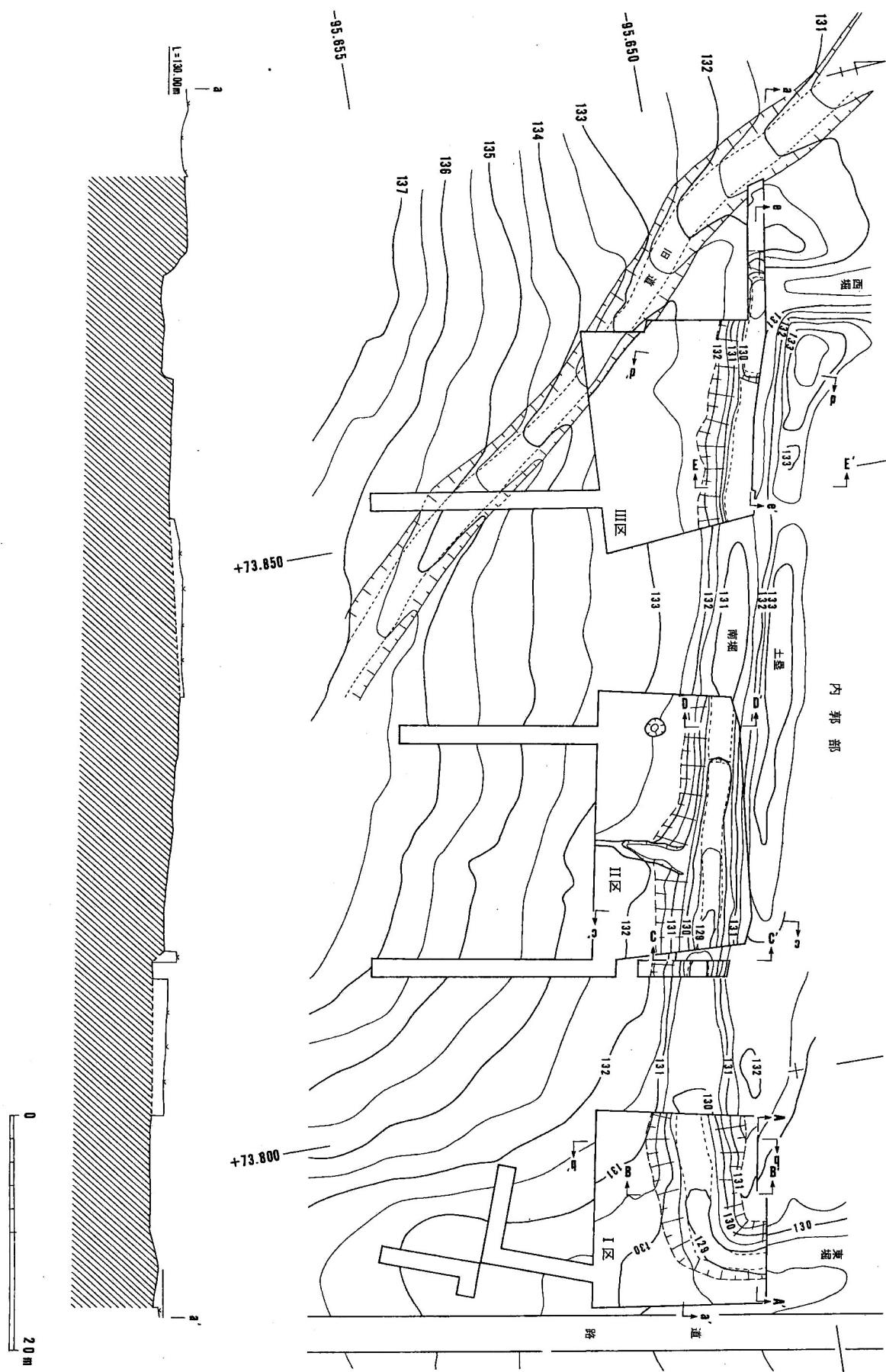
調査前の肉眼による観察では、館址の南辺は、土壘・堀とともに良好に遺存しており、明瞭に識別された。館址の西辺は、南側より続く土壘が一部残っていた。堀は確認できなかった。東辺は佐中峠に続く県道東中・下板井線、および後世の耕作により堀・土壘ともに破壊されており、土壘・堀の痕跡を見いだすことはできなかった。北辺については、東辺と同様に堀・土壘は識別できず不明瞭であった。しかし館址の北側で1.7m程度の落差で一段水田面が下り、地形的に見て、ひとつの区切りとして捉えることが可能ではないかと感じられた。県道東中・下板井線を挟んだ東側の水田は約40cmの段差しかなく、仮に後世の水田造成の際削ったとしても、このような緩斜面では、1.7mの段差をもって構築したと考えることは無理があると思われた。そこで、肉眼観察により一応の目安として、この段差をもって河津館址の北辺とした。

以上、河津館址は館址南辺の確認調査結果と肉眼観察による推測をもとに東西86m、南北75m程度の規模の方形の中世館址であろうと思われた。

南 堀 (I～III区)

南堀が検出された調査地区はI～III区で、そのうち堀の全貌がはっきりしたのは、I区のみであった。

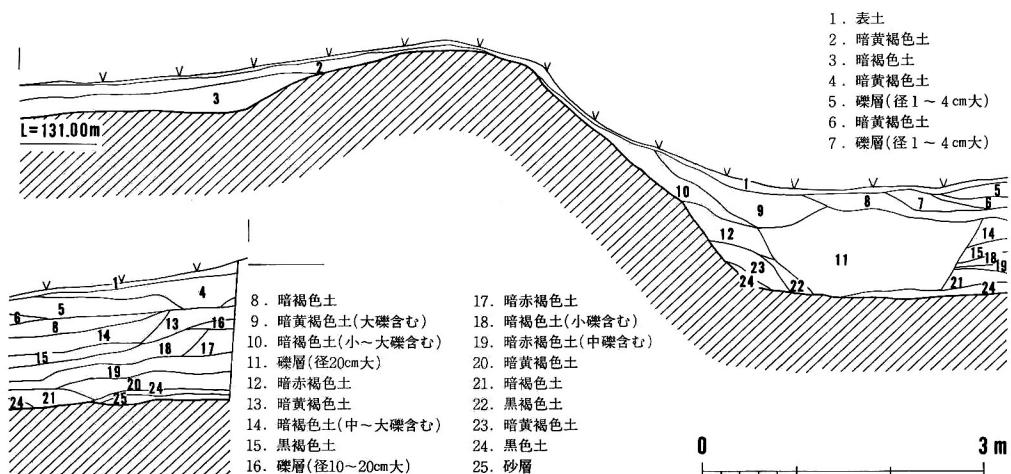
堀内の堆積土はI区を除きII・III区ともに似かよっている。全体に5mm大の花崗岩の亜角礫を含む土で、とくに上層～中層にかけては、5～20cm大の亜角礫による礫層が認められ



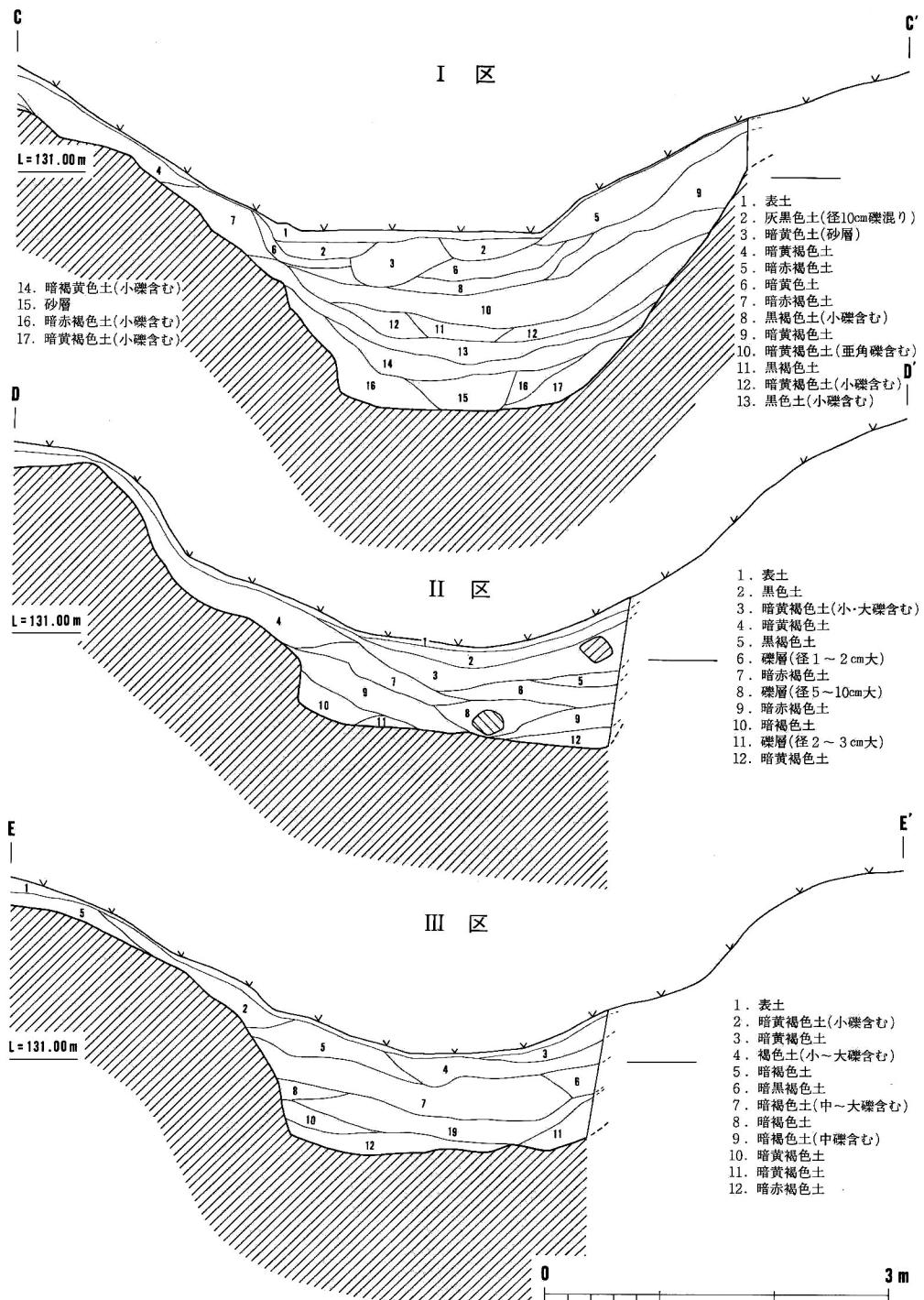
第10図 I ~ III区平面図

る。この花崗岩の亜角礫は、当館址が立地する旧地表面を構成する土に普遍的に混在している。したがって堀内に認められる礫層は館址南側の斜面からの流出によるものである。しかし、III区西北隅に東西に設定した7トレンチ(1)北壁では、径10~30cm大の花崗岩亜角礫が集中して堆積している。第11図の第11層がこの礫層で、堀内の土砂の堆積がかなり進行した後に、堆積している。また、トレンチの周辺を見渡しても、これだけの量の礫が堆積するほどの地形的変化は認められず、後世の人為的な投げ込みと推測され、当館址に直接関与するものではない。I区北東隅東堀付近では、堀内の堆積状況が他と異なる。堀内下層の細砂~粗砂を中心とした砂層が主体であからかに、堀内に水が流れていた様相を呈していた。そこで、現在館址の東側を流れる通称「東中川」より、水を堀内に引込んでいるのではないかという仮説をたて、I区内を精査したが、その痕跡は認められなかった。しかし、この調査の結果堀を掘り込んだ旧地表面は、中~粗砂を多く含む土壤で、部分的には砂層で構成されていることが判明した。これは、上記した「東中川」の氾濫ないし流路の変更などの影響を受け堆積した土壤の可能性が高い。堀内の調査中でも湧水し、その水量は一晩で30cm程度、堀内に溜った。堀は「東中川」より派生した地下水脈を断ち切って掘り込まれ、その結果、館址の東堀内にはある程度の水が常に流れていると判断される。

I~III区で検出された堀を観察すると、I~II区にかけて堀の南側立ち上り部に、幅40~50cm程度のテラス状の削平地が認められ、若干傾斜が緩くなっている。堀はI区で北方向にL字状に屈曲し、館址の南東隅となる。II区は、堀が調査区の北側にほぼ東西に走りII区に続く。II区は、調査区の関係で堀の南側半分しか調査できず、堀の土壌側（内郭部側）の立ち上りは確認できなかった。また館址の南西隅については、調査区よりも西へ数mずれていた。ただ、確認調査の7トレンチ(2)で西堀の外側（西方向）の立ち上りが確認されており、



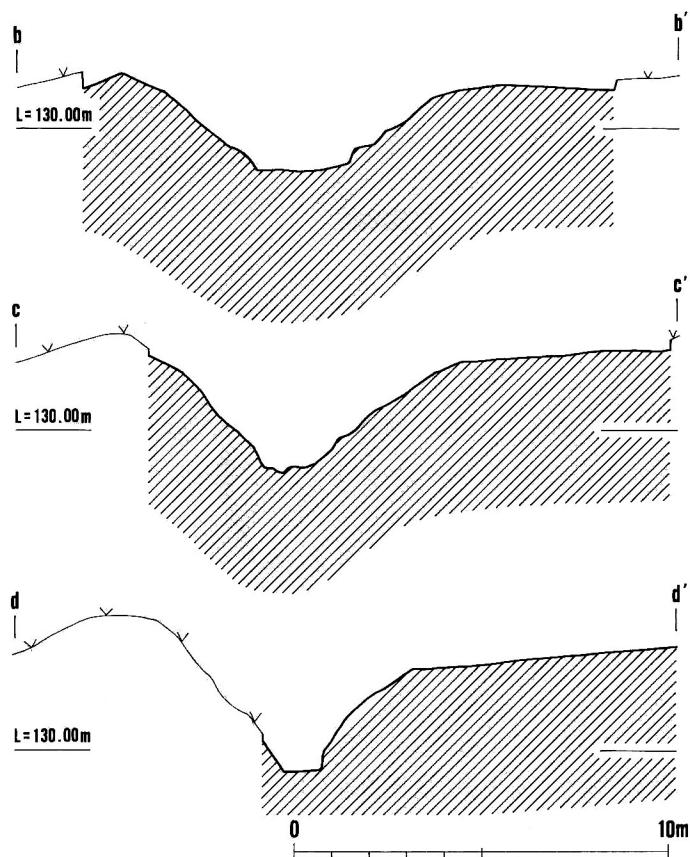
第11図 第7トレンチ1区北壁土層断面図



第12図 I ~ III区堀土層断面図

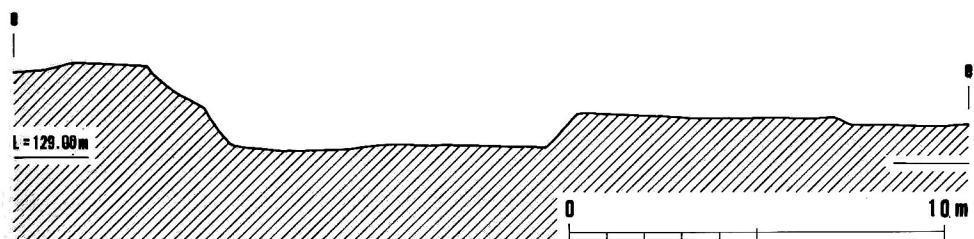
この成果をもとにすると当館址の南堀の長さは86.4mを測る。

堀幅が明確にできたのはI区のみで、堀幅は、5~8mを測り、東堀に向かって従い狭くなっている。堀の底幅はI区で1.4~2m、II区で1.2~2.2mとなる。堀の深さは、I区で40cm~2.18m、II区で2.31~2.8m、III区で1.9~2.75mとなる。堀の断面形は、I~II区では、南側立ち上りに乱れがあるが、断面形は、上底付近が垂直気味に立ち上る逆台形状(＼)を呈する、いわゆる箱堀の部類に属すると思われる。

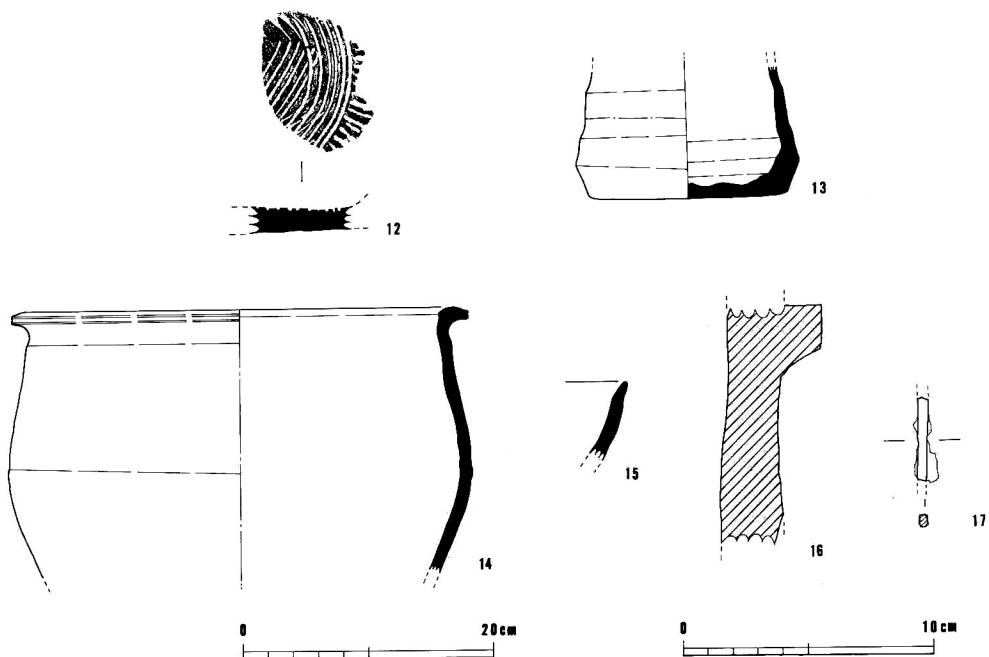


第13図 I ~ III区堀横断面図

南堀のIII区南西隅付近では、堀底を比高差86cmの段差をもって、西堀に向かって深く掘り下げている(第14図参照)。この段差より東へ7mのところにも約30cmの比高で一段東側に下っており、この段差の間は、堀底の掘削程度の差より一段高くなっている。II区でも、西寄り部分に同様の東方向に一段下る段差(比高37cm)が認められた。第10図の縦断図を見ると、これらの他に、II区とII区の東側に南北に走る4トレンチ(2)との間に比高差90cm程度の



第14図 III区堀内段状掘り込み断面



第15図 堀内出土遺物

段差が想定される。またII区西寄りの段差を考慮するとII・III区との間に、同様の規模の段差を想定することも可能である。

以上の事柄をまとめると、第10図南堀縦断図を見てもわかるとおり、II区西寄りの堀底を高く掘り残し、東へ2段の段差で階段状に深く掘り下げ館址南東隅で一番深くなっている。西方向へは、東方向の状況から判断し、II区とIII区の間に一段の下りを想定し、館址の南西隅に向かって段差をもって下っていると思われる。ただIII区南西付近では、逆に一段上り、南西隅で再び深く掘り下げられており、館址東側の堀底の情況とは異なっている。

堀内より出土した遺物は、確認調査中8トレンチ礫層中より瓦器小皿（1）、6トレンチより須恵器甕口縁部片（3）、丹波系擂鉢片（4）が出土した。本調査中では擂鉢片（12）、丹波系瓶（13）および甕（14）、瀬戸・美濃系天目茶碗（15）、石堀（16）、鉄釘（17）が出土した。他に確認調査分と合わせて、堀内より土師質土器・陶器・瓦器・須恵質土器40点あまりの遺物が採集されたが、いずれも細片で図示できたのは上記の8点のみである。

土 墓（I区）

館址南辺は、当館址のなかで唯一後為的な破壊を免れ、土塁が良好に遺存している。南辺の土塁を概観すると、土塁の西側、III区北東隅付近で幅8m・高さ1.5mの規模で土塁が造られている。土塁頂の高さは館址南西隅が最高で、土塁南東隅にゆくに従い、傾斜をもって低

くなり、土壘の南西隅と南東隅では1.5mの比高差がある。

今回の調査範囲で土壘が調査できたのは、I区のみであった。それも、土壘の南側半分の調査であった。このI区の調査の結果、土壘の規模は基底部で幅5m前後(内郭部側は測量図より推定して)、旧地表面からの高さは1.5~2.2mを測る。

土壘の構築方法

土壘の構築方法を知るため、I区で検出された土壘の断ち割り調査を実施した。この結果、大別して6段階の構築順序が判明した。

第I段階 土壘基底部・旧地表整形段階である。土壘の横断面を観察すると、土壘の南東隅付近に幅2m、深さ20~30cm程度の凹地を掘削している他は、ほぼ平坦に旧地表面を削平している。

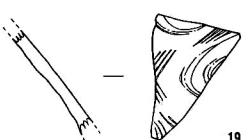
第II・III段階 土壘の基礎工事段階である。土壘断ち割り断面を観察すると第II段階で土壘南東隅付近を一旦礫・砂礫で水平に積み上げ、土壘の隅を補強している。その後第III段階で第II段階と同様に礫・砂礫を積み上げ土壘の南東隅を除く、土壘の西側部分の基礎を完成させている。

第IV・V段階 本格的盛土作業の段階である。盛土に使用される土は1~3cm大の亜角礫を含んだ褐色系の土壤で、比較的良好叩き締められている。第IV段階の盛土作業は土壘の西側から土壘南東隅方向へ向かって行われ、土壘南東隅に至る手前で盛土作業を止め、一旦土壘の形を整えている。その後、第V段階の作業で土壘南東隅の盛土作業を行い、土壘の盛土を完成させている。

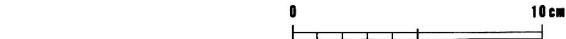
第VI段階 土壘の整形作業の段階である。土壘の頂部から土壘傾斜面にかけて、比較的礫の少ない明黄褐色系の土を貼り、土壘の形を整えている。

以上の6段階の工程を経て土壘が完成されている。土壘の検出・断ち割りが可能であったのはI区のみで、当館址を囲む土壘の全貌は明らかにできなかった。

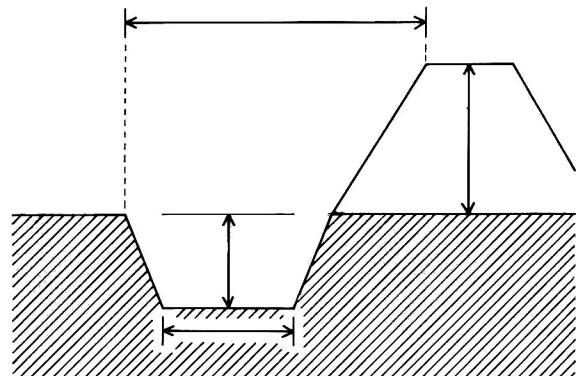
I区の土壘断ち割り調査の際、土壘内より景德鎮窯系青白磁片(19)、瓦器小皿(18)をはじめ、数点土師質小皿の細片が出土したが実測可能な土器は上記の2点である。出土地点



第16図 土壘内出土遺物



第16図 土壘内出土遺物



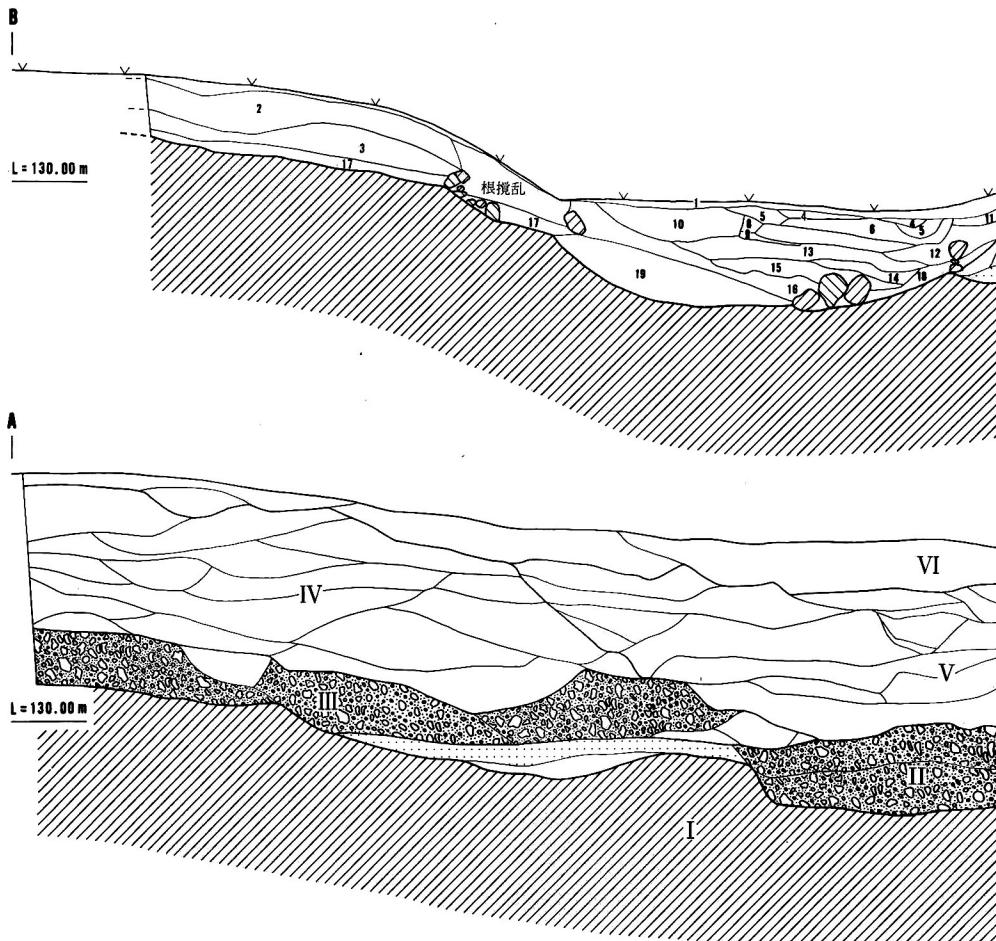
第17図 堀・土壘計測位置

は、いずれも第III段階の盛土（褐色系）中である。

第3節 近世遺構の調査(IV区)

立地と現状

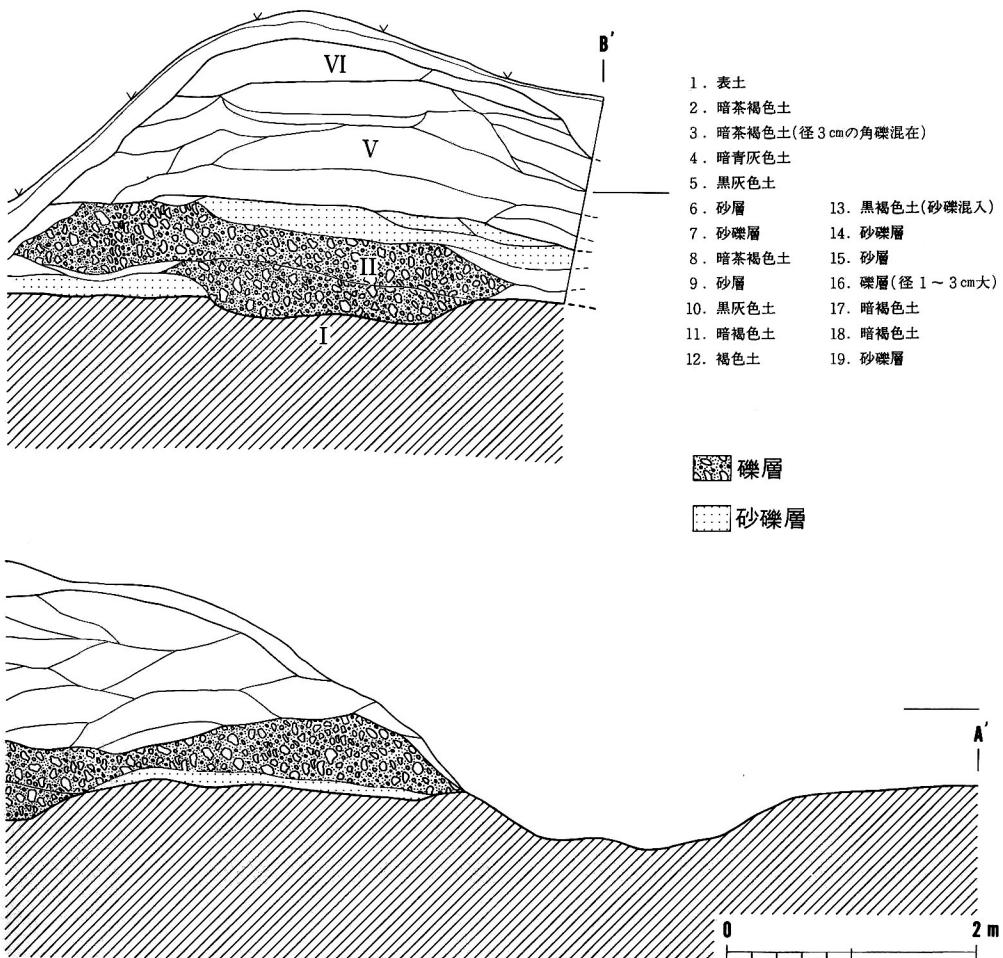
調査区の西端、館址南堀南西隅から南西方向に約20mのところで東西方向34m、南北方向15mの規模の平坦面が確認された。この平坦面は館址の南側山裾から北東方向に延びる標高132～135mを測る緩斜面上に立地している。平坦面の北側は比高差1m前後の段差で落ち、南側は弧状の削り出しとによって周囲と区画されていた。北側の段差付近には、一部花崗岩

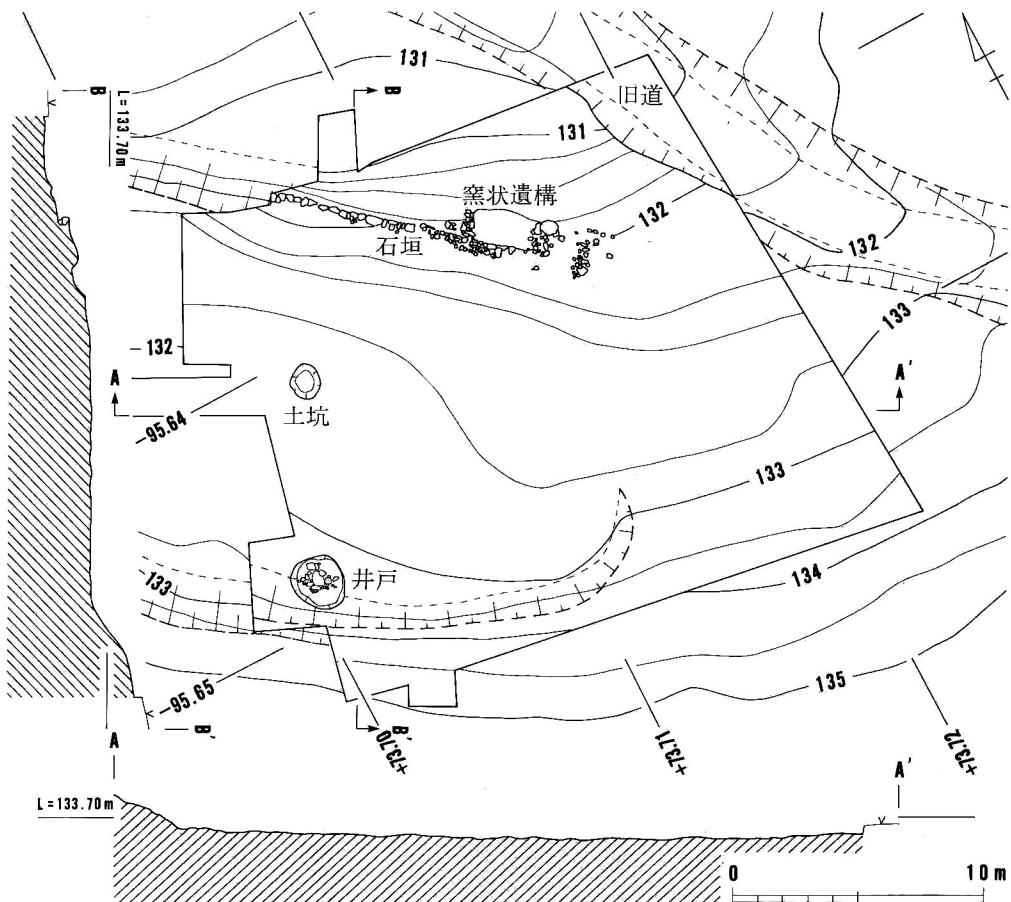


第18図 I区土壌断ち割り図

の石垣が露呈していた。また、この平坦面の北側には、国領の集落から佐中峠へ向かう旧道が通っている。この旧道は現在使用されておらず、かなり荒れている。

確認調査の際、この平坦面より丹波系の水屋甕を出土する土坑が確認されたため、今回新たに調査区を設定し、調査を行った。調査の結果、調査区南西隅の山際より、石組み井戸が1基、調査区の西側からは丹波系の水屋甕が出土した土坑を検出した。調査区の北側では石垣とこの石垣の北面を内壁として利用した窯状遺構が検出された。以下各々の遺構について記す。

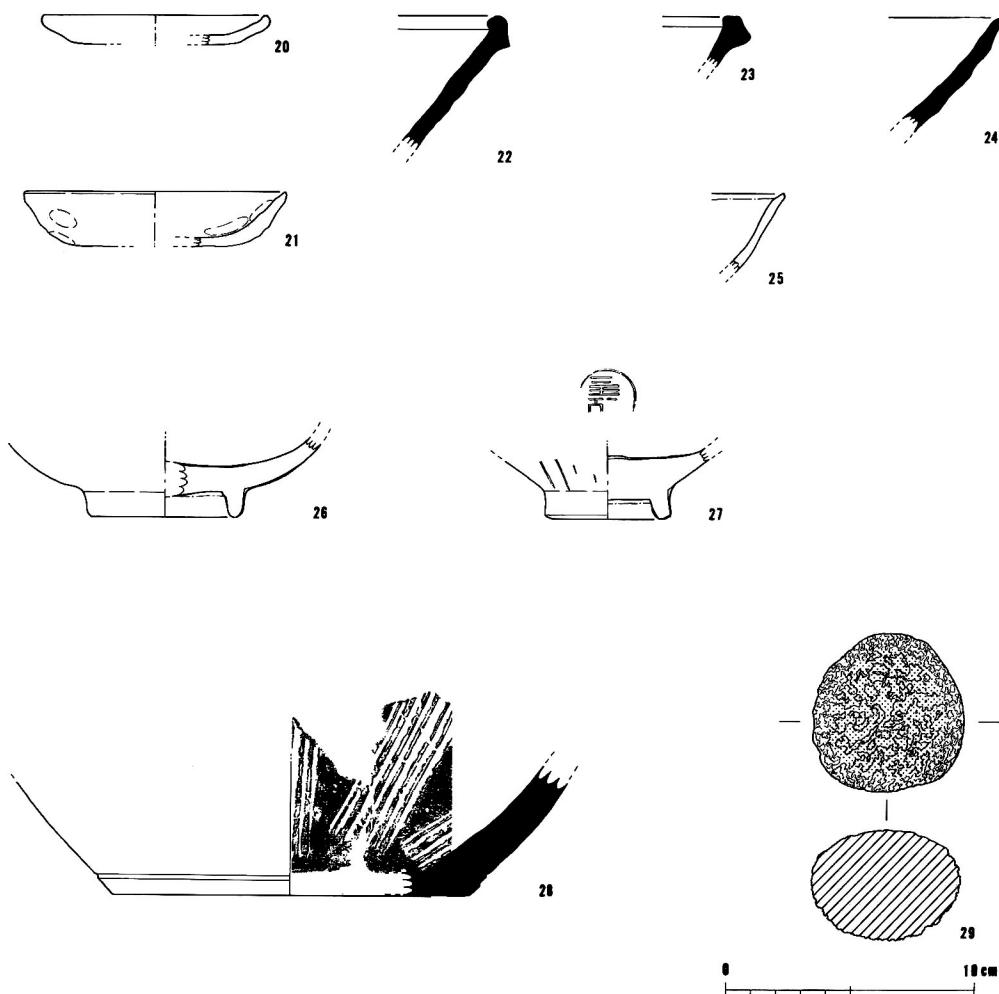




第19図 IV区遺構配置図

井 戸

調査区の南西隅に立地し、井戸の背後は、平坦面と斜面を画する削り出し部分と接している。井戸は第3層を除去した段階で検出され、平坦面の整地作業の際、削平され露呈した岩盤層を掘り込んでいる。掘り方の平面形は、南西隅が歪な隅丸方形を呈する。規模は南北方向2.2m、東西方向1.95mを測る。井戸の掘り方は、2段に掘りくぼめられ、中央より多少北西寄りのところがもっとも深くなっている。植物遺体を含むシルト層が薄く堆積していたところから、水溜と考えられる。北側の検出面からこの水溜までの深さは、35cmを測る。井戸側に使用される石は、径30cm前後の角礫の花崗岩をもちい、水溜部分を中心に8個配置している。北側部分では、石が2段に積み上げられていた。これらの石の隙には、径5~15cm大の角礫を詰め、個々の石を固定している。井戸検出時の状況では、水溜内に井戸側に使用されていた石が埋没しており、少なくとも2段以上の石積みを施した粗雑な石組みの井戸と



第20図 VI区表土中出土遺物

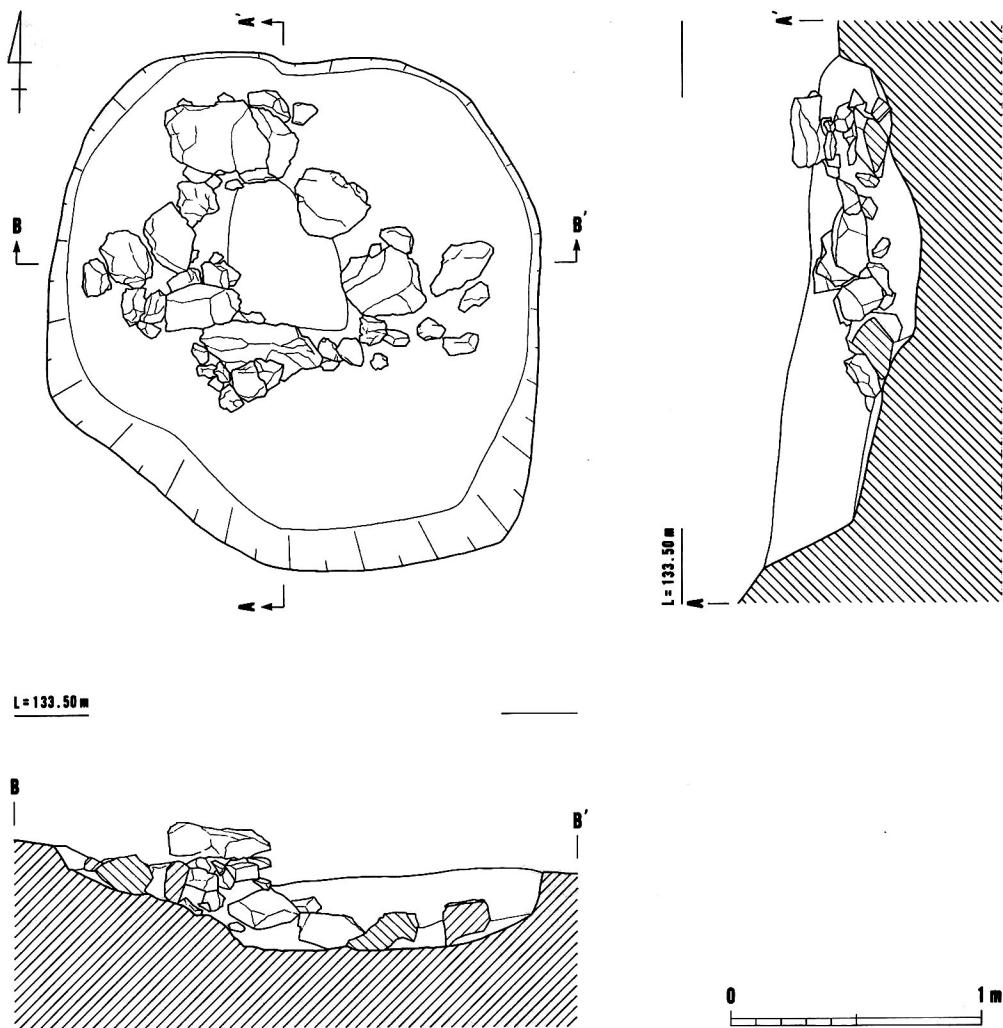
思われる。

井戸にともなう遺物は皆無である。

土 坑

調査区の西側に位置する。調査時の肉眼観察でも土坑部分は、凹地状を呈しており、一部甕の破片が露呈していた。したがって調査する段階でも、比較的新しく掘られた土坑であろうと思われた。しかし調査を進めるにしたがい、この土坑は、後に人為的な搅乱を受けていることが判明した。

土坑は、第3層を除去した段階で検出され、平坦面を構成する整地層を掘り込んでいる。



第21図 井戸実測図

規模は、南北方向1.3m・東西方向1.16m・深さ35cmを測り、平面形は北側が歪な不整円形を呈する。底面は、北西方向に傾斜している。

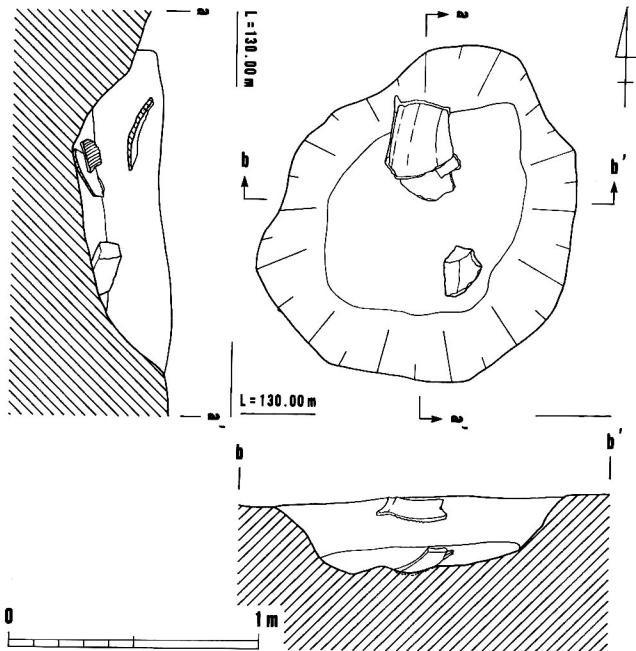
遺物は、土坑の上層と底面直上より口縁～胴部上半にかけての丹波系水屋甕の破片(30)が出土した。上層の破片は後世の人為的な攪乱により動かされているが、底面直上の破片・石はこの攪乱を受けていない。

この土坑の性格については、二次的な攪乱を受けているため不明である。

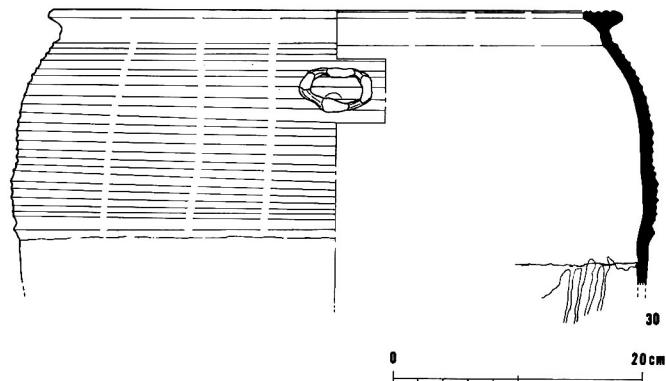
癡状遺構

調査区北側、石垣の東端に隣接して検出された性格が不明な遺構である。遺構を構築して

いる石や床面に、火を使用した痕跡があること、また平面の形態などから、ここでは窯状遺構として報告する。この名称については、その機能を限定しているわけではない。遺構の内壁は、石垣の下部に粘性のある橙色土（第1層）を貼り、さらに部分的に20cm大の扁平気味の花崗岩を貼り付けている。南壁の西側部分は石垣をそのまま壁として利用している。東側部分については、橙色土（第1層）をそのまま壁としている。北壁については、流出ないしは人為的な手が加えられ、わずかに西側で掘り方の痕跡が見いだせる程度である。遺構の西端では長径20~30cm程度の扁平的な花崗岩を、2列ないしは3列に敷いている。敷石の多くは火を受け赤化しており、石の焼け具合から見て、東方向からの火を受けていると思われる。この敷石部分の南側



第22図 土坑実測図

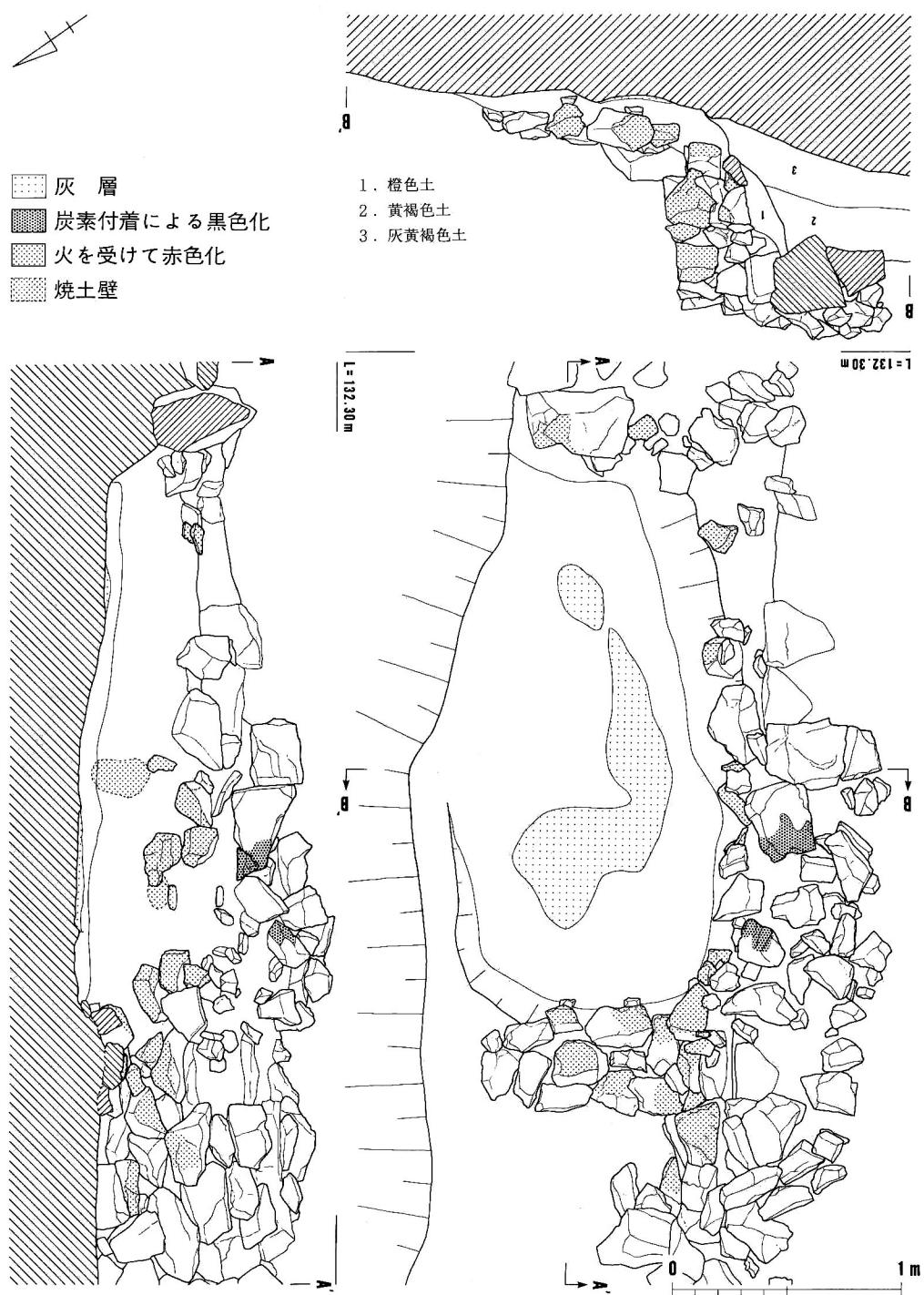


第23図 土坑内出土遺物

は、石垣の北面にさらに石を積み上げ壁としている。また調査時に敷石の南側に隣接して2本の棒状石（長径40cm大）で円状に組み立てられた石組みが認められたが、検出途中に倒壊してしまい記録をとることができなかった。おそらくは焚口であったと思われる。

窯状遺構の規模は、下端で長軸2.3m、短軸1.08m、主軸方位はN55°Wである。平面形は、北東側が後為的削平を受けているが隅丸長方形を呈していたと思われる。

床面は、西側部分が深く掘り下げられ、東壁に向かって約10°傾斜で登り、東壁際で平坦になっている。西側部分の深く掘り下げられた床面の凹みに炭を含んだ灰層が認められたほか



第24図 窯状遺構実測図

は火を受けて、赤色化、焼締っているなど肉眼で判断できる痕跡は認められなかった。

上部構造については、調査中かなりの量の石が検出されたことから考えると、天井部は石で構築されていたと思われる。

以上の検出状況から判断すると、石敷のある部分が焚口の機能を果たし、石敷の内側が燃焼室あるいは、焼成室の機能をもつと考えられる。

遺物は遺構内流土中より、茎部分に目釘孔をもつ鉄製小刀(31)が1点出土したのみである。

旧道

調査区北東隅に位置する。現在も使用されている道路である。

ここでは、比較的まとまって遺物が出土したので紹介する。道路の西側肩部付近から出土した。遺物はすべて木根による搅乱を受け、原位置を保っていない。付近を精査したが、遺構は確認できなかった。

出土した遺物は、瓦器皿(35~44)・塊(47~51)、土師質皿(45・46)・壺(52~58)、東播系のこね鉢(59・60)が出土した。

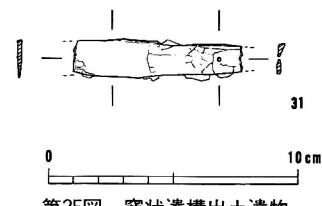
石垣

調査区の北側に位置する。調査前の肉眼観察では、南側上方からの土砂の流出によって石垣が覆われ、西側で1m前後の段差が認められたにすぎない。

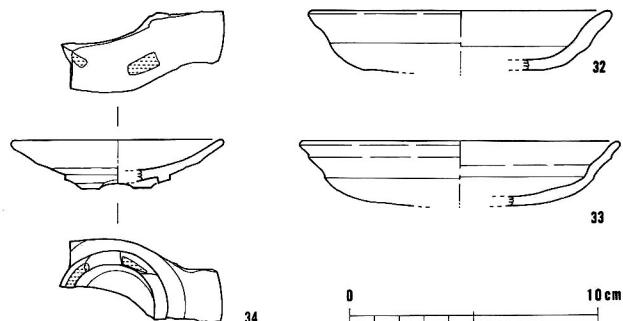
石垣は、調査区北西隅から南東方向へ直線的に延び、11mのところで北東方向に曲る。曲った部分に対して1mの間隔をあけ、平行に石垣の痕跡が認められた。

石垣はかなり崩れ、西側では大きいもので80×50cm、小さいもので50×30cm前後の根石を残すのみである。中央部は石垣を積み変えており、20×30cm前後の石を主体に粗雑に組まれている。

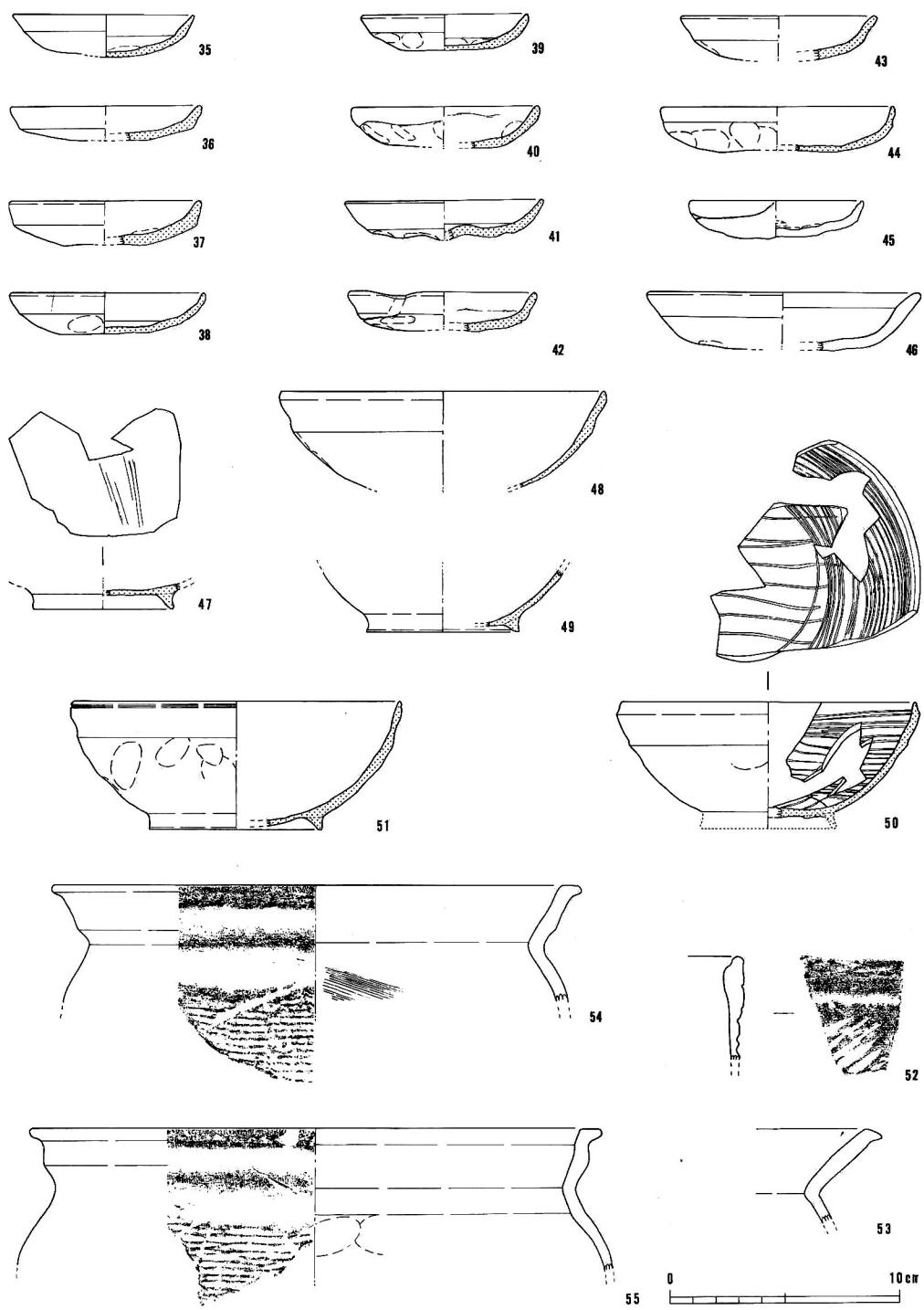
石垣の構築方法は、南側斜面を半円形に高さ1m前後削り出すことから開始され、削り出された土砂は20~30cmの厚さで北側へ平均に盛られる(第18~22層)。その後、石垣の南側約80cmのところにいったん盛土による堤防を築く(第15・16層)。堤防は、おそらく南側削平部分の高さまで積み上げられていたと推察する。その後、堤防の南側を盛土し平坦にした後(第9



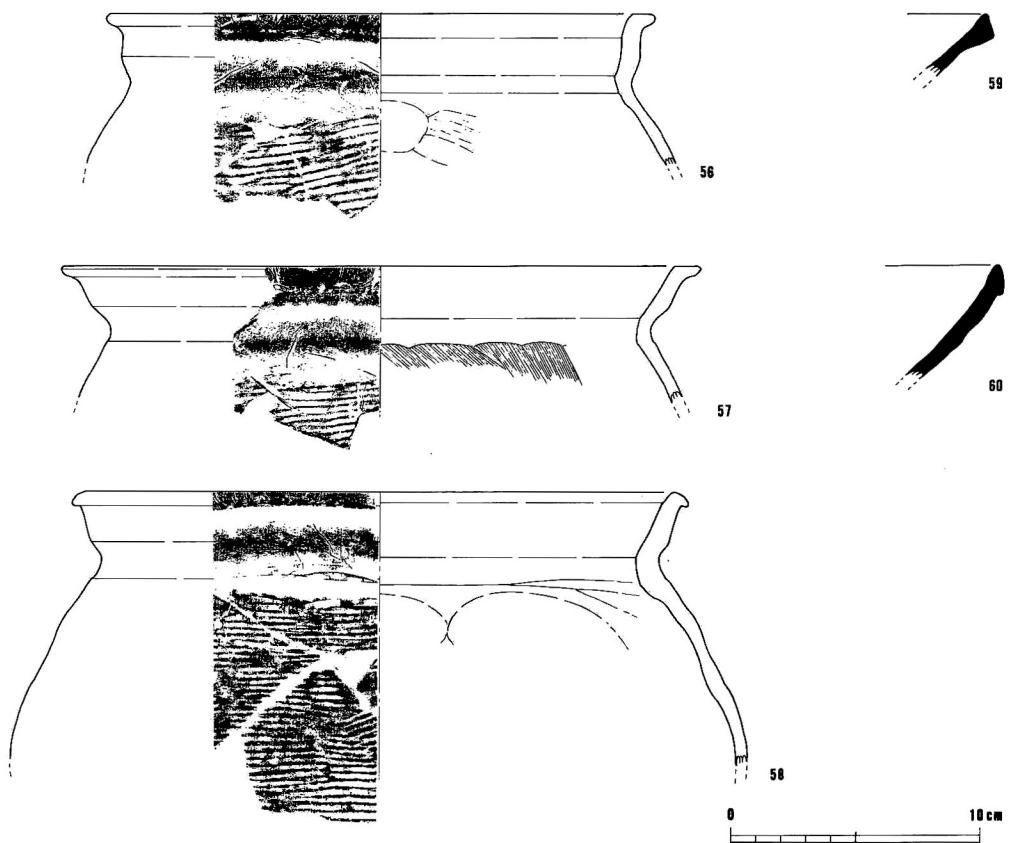
第25図 窯状遺構出土遺物



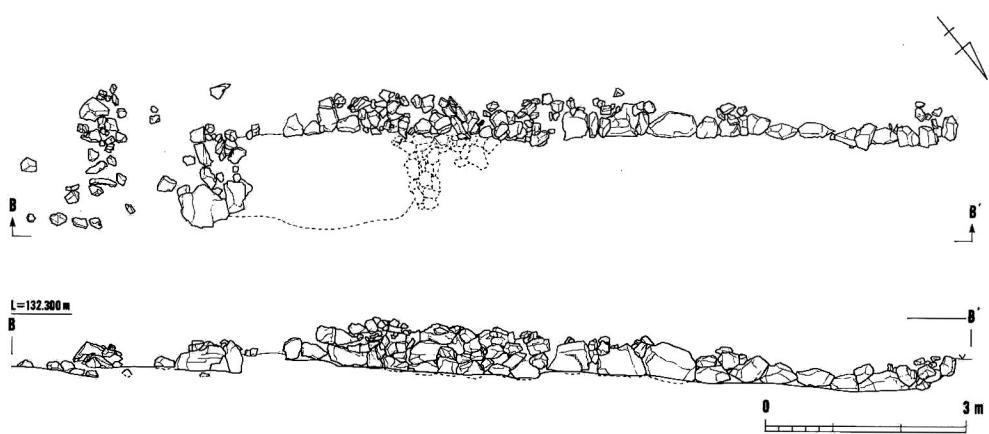
第26図 石垣出土遺物



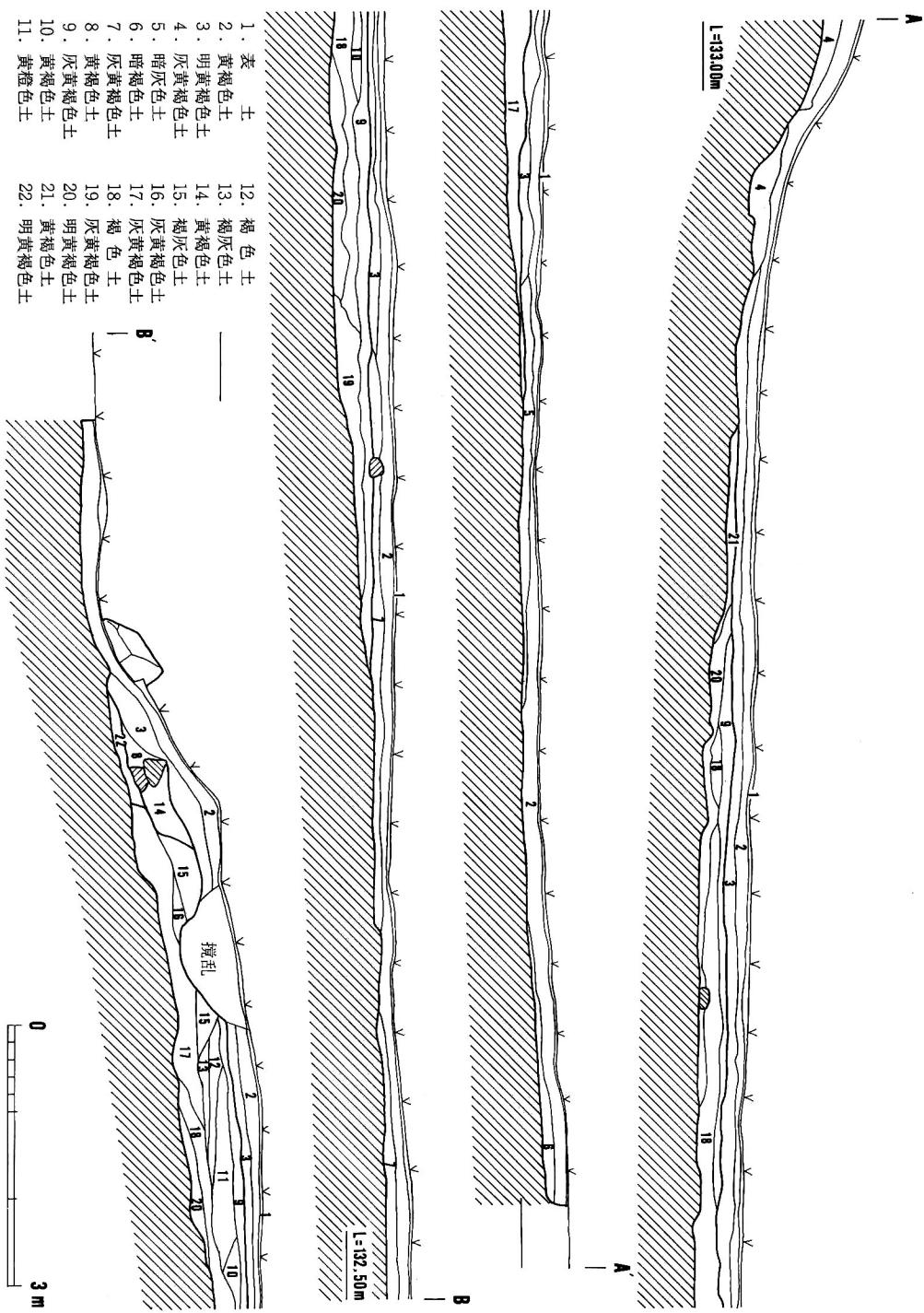
第27図 旧道肩部出土遺物(1)



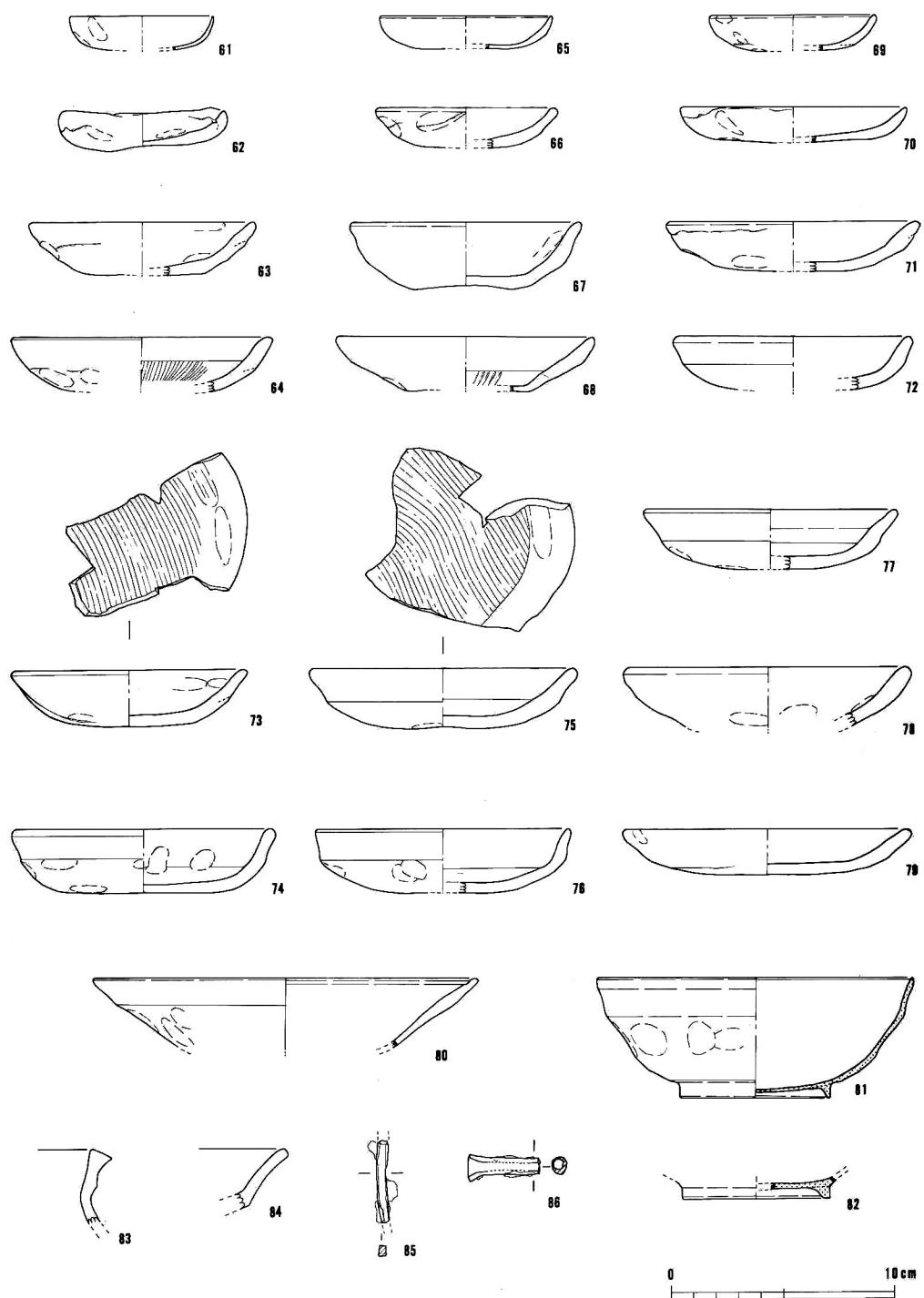
第28図 旧道肩部出土遺物(2)



第29図 石垣実測図



第30図 石垣・整地面断ち割り土層断面図

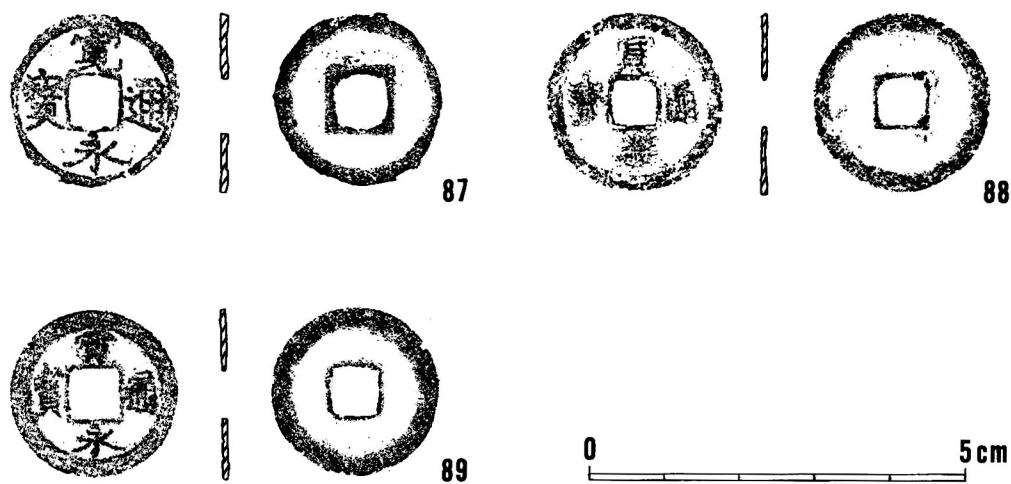


第31図 整地層出土遺物

～13層)、石の平坦面を北側に向け、第14層で補強しながら2段以上の石を積み上げ、石垣を完成させている。

遺物は石垣を断ち割った際、整地層内より出土した。とくに第9層中に遺物が集中する傾向にあり、実測が可能であった遺物はすべて第9層中より出土した。出土した遺物は土師質の皿類(61～80)、瓦器碗(81・82)、堀(83)、青磁皿(84)、鉄製品(85・86)が出土した。

最後に石垣の断ち割りトレンチを幅1mに拡張し遺構の確認に努めたが、遺構は確認されなかった。



第32図 IV区出土の銅錢

第4節 出土遺物

今回調査した地区（I～IV区）から出土した遺物は、総数3,927点を数え、その内訳は土師質土器3,481点、瓦器319点、陶磁器121点、金属器7点、石製品2点である。そのうち実測が可能で今回紹介し得た遺物は僅かに89点を数える。この数字からも判るように、出土した遺物は多くが細片で出土状況は極めて悪い。実測した遺物のなかで、堀内・土塁内・土坑・窯状遺構の遺構から出土したものは11点である。しかも、河津館址に関連する遺構（土塁・堀内）からは、館址の廃絶時期を知り得る良好な資料を得られていないのが現状である。しかし幸いなことに氷上郡教育委員会のご好意で、内郭部確認調査で出土した遺物を掲載していただき、河津館址の全容を知る手掛りを得られた。本稿ではこれらの遺物を含めて紹介する。

土師質土器

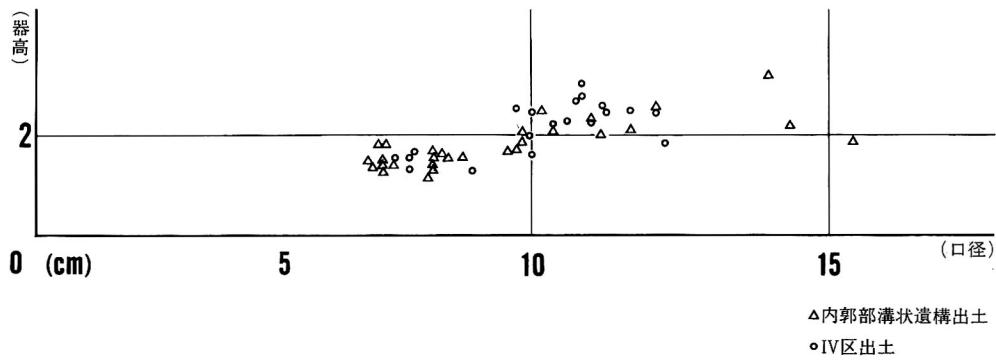
皿 (20・21・32・33・45・46・61～80)

今回の調査で出土した土師質小皿は、細片を除き実測できた土器は26点を数える。その多くがIV区近世の建物址整地層中・石垣裏込めおよびその周辺より出土し、内郭部確認調査で得られた土師質皿については、小項目を設け別に説明する。

IV区出土の土師質小皿は、口径7.5cm前後、器高1～2cmの間におさまる小型の皿と、口径10～12cm前後、器高2～3cm前後の間におさまる中型皿とに大別される。ただ1例、復元口径17.3cmを測る皿(80)もあるが、他は上記した2つの法量の範囲におさまる。以下、前者をA群、後者をB群に別けて説明する。

A群は(20)・(45)・(61・62)・(65・66)・(69)の皿で、口縁部が内彎して立ち上り、口縁端部は尖り気味のものと、丸くおさめるものとがある。調整は内外面ともに指押え調整を施し、その内面のみ不定方向のナデ調整をしている。(45)は、口縁部が短く垂直につまみ上げられた皿である。外面口縁部はヨコナデ調整、内面は底部周縁から口縁部にかけてヨコナデ調整を施す。前記した皿と調整が異なる。

B群は(21)・(32・33)・(46)・(63・64)・(67・68)・(70～80)などの皿である。調査区で出土した土師皿のなかでもっとも多い一群で器形も豊富である。口縁部が内彎する皿は、(21)・(70)・(71)・(78)が該当する。これらの皿は内外面ともに指押え調整後、内面に不定方向のナデを施す。口縁が外反する皿は、(32)・(64)・(67)・(72～77)が該当し、器高が2.5cm前後と口縁が内彎する皿に比べ高いのが特徴である。調整は、内面底部～体部に強い一定方向のナデを施すものと、(64)・(73)・(75)のように一定方向の刷毛目をもつものがある。(68)・(78)は体部が外反気味に上方へ開き、口縁部が肥厚している。とくに(68)は底部



第33図 土師質皿法量分布図

に刷毛目の痕跡を残し同じ刷毛目をもつ(64)・(73)・(75)と技術的に類似する。(33)は口縁部に2段のヨコナデが施され内面底部周縁は強いヨコナデを施している。(80)は体部～口縁にかけて外方に直線的に開き内面口唇部直下に凹線を巡らす皿である。(33)・(80)は、胎土が黄灰色を呈し、前述した皿類とは異なった胎土である。

内郭部溝状遺構出土の土師質皿 (90~128)

遺物の説明に際しては、便宜上前項で仮称したA・B群の名称をそのままもちいる。A・B各群の法量は同じで、新たに口径13~16cm前後、器高2~3cm前後の間に納まるものをC群とする。

A群は(90~106)が該当する。(90)・(92~95)・(101)・(103)は、底部が丸底気味で底部から口縁部にかけて内彎する皿である。口縁部はつまみ出すように成形されている。内外面指押え調整後、内面底部に指腹によるナデ調整を施している。(90)は胎土が精良で黄灰色に仕上っている。また(93)・(95)は硬質に焼きあがっている。(98)・(99)・(100)は調整方法は同じであるが、底部が平底気味に整えられ、口縁部が外傾する皿である。(91)・(92)・(96)・(102)はA群のなかでは器高1.5cmと高く、平底気味の底部から直線的に外傾するか(104~106)外反する皿で、とくに内面底部周縁は強い指押え調整を施しているのが特徴である。(114)は胎土が精良で硬質に仕上っている。(104)は底部から直線的に外傾し、口縁端部を外方へつまみ出している。(105)は体部が大きく外反し、体部と口縁部との境に段をもち、口縁部はさらに外反する。(106)は(105)と同様、体部が大きく外反するが口縁が肥厚し、端部が僅かに上方へ引き上げられている。(104)・(105)・(106)ともに調整の方法は同じであるが、(105)・(106)の方が体部外面の指押え調整および内面底部周縁のヨコナデが強く、内面底部中央に盛上りを見せる。

B群は(107~121)までの皿が該当する。(110)・(113)・(114)・(115)・(117)・(119)・

(120)は底部が丸底気味で、口縁部は内彎する皿である。内外面ともに指押え調整を施し器壁を整えている。(107)は、多少直線的に内彎する皿である。口縁部外面および内面底部～口縁部にかけてヨコナデを施す。(108)・(109)・(112)・(116)・(118)の皿は、径の大きい平底の底部から口縁部が外傾ないしは外反する皿である。(108)・(112)・(115)・(116)は内外面ともに指押え調整を施し、内面底部は不定方向のナデ調整を施している。(109)・(121)は黄灰色を呈する仕上りで、口縁部外面と底部周縁～口縁部にかけヨコナデを施している。(109)は口縁端部を僅かにつまみ上げている。(121)は口縁端部が尖り気味で、口縁部内面にヨコナデ調整による稜を見せる。

C群は(122～129)の皿である。平底の底部で、体部は外傾もしくは内彎気味に立ち上り、(125)を除き口縁部は外反する。口縁部内面はヨコナデ調整による稜をもち口縁端部は(123)・(125)では僅かに上方に突出する。外面体部は指押え調整。外面口縁部、内面底部～口縁部にかけてヨコナデ調整が施されている。とくに(128)の皿は内面底部周縁に逆時計回りの強いヨコナデが施され、僅かに凹んでいる。この一群の皿はすべて黄灰色に仕上っている。

IV区出土の(33)・(80)および内郭部溝状遺構から出土した(104～107)・(109)・(121～128)の皿は、いわゆる乳白色に焼きあげられたBタイプ系(白色系)^①の範疇として理解し得るが、県内でも姫路市御着城跡・伊丹市伊丹城跡・三田市釜屋城址・多紀郡西紀町上板井^②古墳群^③に出土例が見られる。摂津・播磨・丹波にかけて広範囲に分布している。編年の確立をみている平安京同志社キャンパス内出土資料と対照すれば、IV区より出土した(80)は第IV期(15世紀前半)^④の皿に類似し、また内郭部溝状遺構内より出土した一群の白色系の皿は、総じて第VI期(15世紀末～16世紀前葉頃)^⑤の特徴をもつと理解する。またIV区出土の土師質皿は、(80)を指標とすれば15世紀前半代に上限が求められる。ただ時代的に古い瓦器・堀等も出土しているところから、A群・B群の土師質小皿のなかには、瓦器・堀と時期的に併行する皿類も含まれている。その際底部内面を刷毛目調整する皿(64・68・73・75)の一群は、その際だった特徴から年代を知る良好な指標になる皿類と考えられる。

堀 (52～58・83・134)

堀は、9点出土した。内郭部溝状遺構より出土した(134)の堀を除き、他は明確な共伴遺物を伴っていない。

(53)は、口縁部が直線的に立ち上り、端部は尖り気味に外方へ突出する。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、胴部は叩きが施されている。(54～57)は、口縁部が外傾するもの(54・57)と、やや垂直気味に立ち上るもの(55・56)があり、口縁端部は外方へ水平に突出する。口縁部はヨコナデ調整で、とくに外面は2段の強いヨコナデ調整が施され、口縁部中位が膨らむ。胴部は平行叩きが施されている。胴部内面は刷毛目調整が認められるもの(54・57)と指頭による強いナデ調整を施すもの(55・56)がある。(58)は口縁部が外側に垂れ下がるもの

である。胴部外面は平行叩き、内面は同心円状の叩き目がある。(83)は口縁端部が角ばっており、口縁端部下は下方へ尖り気味に張り出している。非常に硬質に焼かれている。(52)は、口縁部が垂直に立ち上り、そのまま胴部に移行する。内外面ともに口縁部はヨコナデ調整、胴部は平行叩きが施されている。(134)は器高が低く扁平で、近世的な要素をもつ壙である。底部は平底気味で、口縁部は反り気味に内傾する。外面胴部は叩きが施され、胴部上位～口縁部はヨコナデ調整が施されている。

近年の発掘調査の増加によって、県内でも上述した壙が出土している。

口縁端部が水平に外方へ突出する(54～57)の一群は、神戸市内の八多遺跡、太山寺坊院跡、^⑦播磨では姫路市本町遺跡より出土している。^⑧本町遺跡から出土した壙は、井戸1水溜内から検出され、他の出土例と異なり遺構に伴って出土している。

口縁端部が下方へ垂れ下がる壙(58)は、上記した一群の壙と同様、姫路市本町遺跡に出土例が求められる。^⑨本町遺跡出土の壙は、土坑内より平安時代末の瓦とともに検出されている。

内郭部溝状遺構内より出土した壙(134)は、姫路市加茂遺跡より出土した壙のなかに近似^⑩したものがある。

県下の出土例を見ると、当遺跡で出土した壙を含めて、出土例こそ少ないが摂津・播磨・丹波地方の比較的広い範囲に分布している。これらの壙の時期を知る手掛りは当遺跡の調査では得られなかったが、上記したように近年の調査で良好な出土例が認められるようになってきている。壙の編年はすでに安富中学校前東遺跡で山本氏が、また加茂遺跡で秋枝氏がそれぞれ試論を述べられている。ここではこれらの業績を踏まえ、壙の時期について若干触れる。

(54～58)の一群の壙は、本町遺跡の平安時代末～鎌倉時代初頭に比定されている土坑1・井戸1内より近似した壙が出土しているところから、この時期を中心とした時期が考えられる。土坑1からは口縁端部が下方へ垂れ下がる壙(58)と、口縁部が玉縁状に肥厚する別タイプの壙が共伴している。このタイプの壙は、水上郡島町喜多中世墓群からも出土しており、その広がりは丹波地方にまで及んでいる。本町遺跡の壙は胴部が欠落し、その調整技法は不明であるが、喜多中世墓群出土の壙を見ると胴部内面に同心円状の叩き目および刷毛目調整が施されている。この調整技法は当遺跡出土の(54・57・58)の壙と共通している。ひとつの予測として口縁部のつくりが玉縁化するという前提にたてば、技術的にも近いことを考慮にいれて口縁端部が玉縁状になる壙は、口縁端部が垂れ下がる壙より後出するタイプと考える。さらに(55～57)の口縁端部が外方へ突出する壙は、垂れ下がる壙より一型式古い段階の壙と捉えることも可能である。この是非については、今後の資料の増加を待ちたい。

(54～58)の一群は、山本編年試案でいうI b～I cの間におさまると考え、現在のところ時期は12世紀中頃～後半の間におさえられる一群と考えたい。なお(134)の壙については、秋枝氏のいう加茂遺跡壙III類に近似し時期は15世紀後半～16世紀前半頃と考えておきたい。こ

れは内郭部溝状遺構より出土した土師質皿の時期と矛盾しない。

瓦 器

瓦器は、多くがIV区整地層（第9層）中および石垣流出土中、旧道肩部より出土している。その内訳は実測可能なもので塊7点、小皿12点を数える。遺構に伴って出土した例は(18)の小皿を除き皆無である。また瓦器の多くが磨滅が著しく調整が不明瞭である。

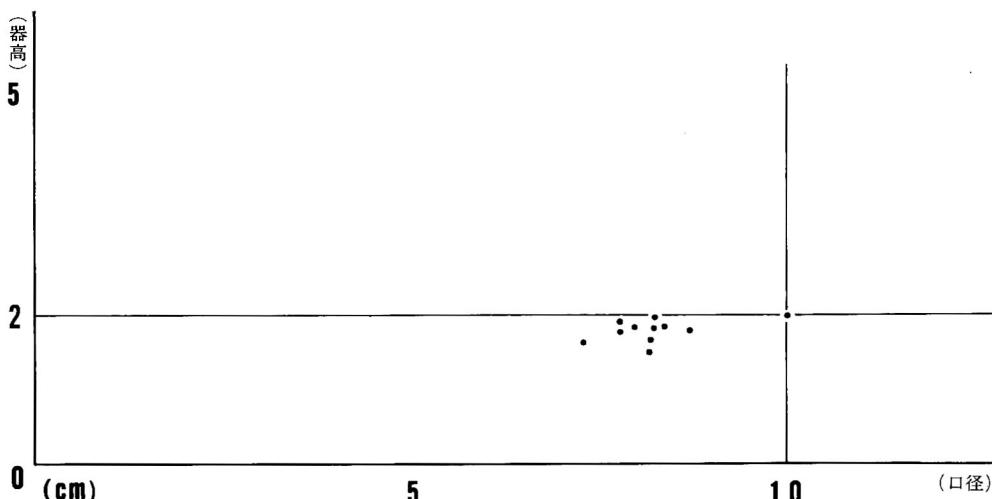
また、内郭部確認調査の際出土した遺物を実見させていただいたが、瓦器の出土例はなかった。

小 皿 (1・18・35~44)

小皿は、口径7~9cmの間におさまり、器高も2cm前後である。

(18・36・37)は口径が8cm前後、器高は1.5~2cmの間を測る。底部は平底気味でそのまま口縁部に続く。口縁部は短く直線的に立ち上る。体部は指押え調整後、口縁部をヨコナデ調整している。(18)は内面底部周縁に暗文の痕跡を認める。(38~41・44)は口径7~9cmの間でおさまるものが多いが、(44)のように10cmを測るものもある。器高は1.5~2cmの間である。底部は平底気味で体部から口縁にかけて内彎気味に立ち上る。口縁端部は尖り気味である。体部は指押え調整、口縁部はヨコナデ調整である。しかし(41)のように指押え調整のみでヨコナデを施さず、口縁部付近に粘土帶接合痕跡を残す粗雑なものもある。

(1・35・42・43)は口径7.5~8cm、器高1.7~2cmの間で納まっている。底部は丸底ないしは平底気味で、口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめている。外面体部は弱い指押え調整、口縁部は強いヨコナデが施されている。内面も同様に底部周縁~口縁部にかけて強い回転ヨコナデ調整が施され、末端を上方へ引き抜いている。内外面ともにナデ調整のみで暗



第34図 瓦器小皿法量分布図

文は施されていない。これら的小皿は出土した小皿のなかでは、比較的丁寧なつくりの一群である。

塊 (47~51・81・82)

塊は(50)を除き、遺存状況が不良である。したがって暗文等の調整については、観察不可能なものが多い。

(48・51・81)は、口径14cm前後、器高5cm前後の法量をもつ。体部は内彎し、口縁部は外反し立ち上る。調整は体部は外面指押え調整で、口縁部は強いヨコナデを施し、口縁部を外反させている。器高指数は(51)が39.4、(81)が37.8である。(51)は外面口唇部直下に弱い凹線が巡る。暗文の有無については不明。高台部は、断面三角形を呈するが、(81)の方が鋭角な断面である。(50)は出土した瓦器塊のなかでもっとも遺存状況が良好で、暗文も容易に判別できる。体部は内彎し、口縁部に続く。口唇部付近は、ヨコナデ調整が施され内傾する。暗文は内側のみに施され、体部は比較的粗い螺旋状暗文、底部は鋸歯状の暗文を施す。

(47・49・82)はいずれも断面三角形の高台部破片で磨滅が著しく、調整痕も不明である。

これらの瓦器の時期について、その指標となるのは塊である。しかし、当遺跡で出土した瓦器の遺存状況は(50)を除き不良で詳細を知ることができない。ただ(50)の瓦器塊については、外面に暗文が無く、内面は間隔のあいた螺旋状暗文を施していること、また高台部のつくりが粗雑でないことから、橋本編年でいうIII-1ないしは2段階に併行すると考え、13世紀前半頃と考えている。そして小皿について言えば、小皿(1・35・42・43)の一群は、内外面に暗文をもたず、指押え調整後ヨコナデで器壁を仕上げているところから、小皿のなかでも、時期的に新しい一群であると考えている。

須恵器・須恵質土器(3・6・22・23・59・60)

(3)は須恵器甕の口縁部破片である。

(6・22・23・59・60)は、東播系こね鉢である。(60)は体部器面に凹凸があり、粗雑な調整である。外面体部と口縁部の接点は尖り気味に下方へ僅かに張り出す。口縁端部は内側に折り曲げられ、丸く仕上げられている。(59)は外面体部と口縁部の接点が丸味を帯び大きく下方へ張り出す。口縁端部は平坦に調整されている。(22)は、外面体部と口縁部の接点が丸く仕上げられ口縁部は玉縁状を呈する。

また(6)は口縁部外側に吸炭痕をもち、重ね焼きの痕跡が認められる。(59)と同様に外面体部と口縁部の接点が下方へ僅かに張り出す。(23)はこね鉢の底部破片である。糸切りの痕跡は見出せない。

これら一群の東播系こね鉢の年代について考えてみると、(22)のように口縁部が丸味をもつタイプは魚住編年案「22号窯体」の範疇に比定できると考えられ、その時期は13世紀の初頭頃と思われる。(6)および(59・60)については、(22)に続くタイプとして、13世紀前半の

なかでおさまると考えられる。⁽¹⁵⁾(60)については口唇部を丸く仕上げているものの、上方への口唇部の拡張が認められるとすれば、森田氏の編年試案の第IX期第1段階の範疇にはいり、⁽¹⁶⁾(6・59)よりは後出する型式と思われる。

国産陶磁器(4・11~15・24・28・30・132)

(28)は7本の条線を1単位とする擂目をもつ備前系の擂鉢である。(4)は同じ擂鉢でも1本引きの擂目をもつ丹波系のもので、確認調査の際、堀内より出土している(本調査区III区出土)。一回一本引きの擂目をもつ丹波系の擂鉢は、現在知られているところで14世紀後半まで遡るが、⁽¹⁷⁾本品は擂目の状態、焼成等から室町時代後半の所産と思われる。

(14)はII区堀内より出土した丹波系の甕で、胴部最大径を上位にもつ。口縁部を外へ折り返し、端部には調整の際生じた凹線が巡っている。これらの特徴をもつ甕は、15世紀の終りから16世紀中頃に比定されている。⁽¹⁸⁾(15)・(24)・(132)は、瀬戸・美濃系の天目茶碗と平碗および卸皿である。⁽¹⁹⁾(15)の天目茶碗は、丹波系甕(14)と同じ堀内より出土しており、これを中心とした時期のなかにおさまると考えている。⁽²⁰⁾(132)は卸皿で底部は細かい糸切痕が残り、底部～体部外面は露胎となっている。内面は箒状工具による粗い卸目が施されている。釉の痕跡はない。この卸皿は内郭部溝状遺構内より出土し15世紀末～16世紀前葉頃に比定できる土師質皿を伴っている。⁽²¹⁾(30)は、IV区土坑内より出土した胴部に輪耳を貼り付けた丹波系の甕である。口縁部上面および胴部に凹線を巡らせていることが特徴である。同タイプの甕は、堺環濠都市遺跡から出土している。県内では上三草近世墓と庄境1号墳に出土例がある。⁽²²⁾上三草近世墓出土の甕は江戸時代前期に比定されている。この甕は貼り付け輪耳、胴部に凹線を巡らす点で(30)と類似するが、器形および口縁部のつくりに違いがある。庄境1号墳5号墓より出土した甕は、(30)と同型の甕で、口縁部上面に沈線をもたない。この点で(30)は、庄境1号墳5号墓より後出する甕であると考える。5号墓の時期は、18世紀前半代の時期が与えられており、(30)はこれに続く型式と捉え、18世紀中頃～後半の時期を考えたい。⁽²³⁾(12)は丹波系の擂鉢である。底部の擂目は、底部周縁に同心円状に施されている。⁽²⁴⁾(13)は丹波系の瓶、(11)は肥前系の染付小皿である。内面には草花文が描かれている。

輸入陶磁器

各調査区から出土した輸入陶磁器は6点で、その量は少ない。これは、館址の南堀およびその周辺という限られた調査範囲であることに起因している。今回ここで取り扱う輸入陶磁器は、氷上郡教育委員会の手による内郭部の調査の際、溝状遺構より出土した輸入陶磁器3点(129・130・131)を含む9点である。その内訳は白磁皿1、白磁杯1、青磁皿2、青磁碗3、青磁杯1、青白磁梅瓶1である。

白 磁(19・25・34)

(25)は口縁端部が露胎した、いわゆる口禿の皿である。体部はやや内彎し、口縁端部は外

反する。(34)は、IV区石垣遺構裏込め土内より出土した高台をもつ小皿である。高台部は無釉で高台疊付はアーチ状に抉り込まれている。釉は白色を呈し見込み部では、細い貫入がはいる。見込み周縁部分には、2つ以上の目跡が残る。(19)はIV区土塁内より出土した青白磁梅瓶の肩部破片で、外面には籠彫による唐草文や櫛目文が施されている。

青 磁(26・27・129~131)

(26)は、内外ともに無文の碗である。釉は比較的厚く施釉された後、高台内底面の釉を鋭く削り取っている。釉色は、多少黄味を帯びたオリーブ色を呈する。(27)は、細蓮弁文碗である。底部の器壁は厚くまた高台部の断面形は四角形を呈し、堅固な作りである。内面見込みには「寿」の字が印文され、外面体部には線描きされた細蓮弁文の痕跡がある。高台内には酸化鉄が塗付され中央に釉が残る。釉面には粗い貫入がはいる。(131)は内郭部溝状遺構内より出土した鎬のない蓮弁文碗である。外面体部には鎬のない蓮弁文が片彫されて、外面口縁下に簡略化された雷文が施されている。内面見込み周縁には1条の沈線が巡り、その中心に印花文が施されている。高台内は露胎である。釉は透明度が高く多少青味を帯びるオリーブ色を呈し、貫入は細かい。(129)は内郭部より出土した鎬蓮弁文杯である。体部は丸味を帶び内彎し、口縁端部は僅かに直上に引き出している。釉は青味の強いオリーブ色をしている。(130)は内郭部溝状遺構より出土した稜花皿である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は輪花状に縁取られている。内面には割画文が刻まれている。釉は厚く灰味を帶びてくすんだオリーブ色を呈する。貫入がはいる。

白磁口禿の皿(25)は横田、森田氏の型式分類では、白磁皿IX類に比定され、13世紀後半から14世紀中葉にかけて出現すると考えられていたがその後、森田氏は他地域の資料に検討を加え、この「口禿タイプの白磁」の下限を14世紀前半とされている。^③したがってこのタイプの皿は13世紀後半から14世紀前半に比定されている。白磁小皿(123)は、青森県尻八館址等をはじめ出土例が多くなってきていている。とくに尻八館址出土のものについては、なおも課題を残すと言う断りの上で、15世紀を中心とする時期が考えられている。また前記した森田氏の分類および編年では、D群のひとつとして分類され、この一群の時期は14世紀後半~15世紀前半代に比定されている。どちらの時期も大差ないと考えられる。青磁碗(26)は、体部上半が欠損し、形態を明確に把握できない。しかし無文であることや高台のつくり、および施釉の点で上田氏の分類、D類に相当すると考えている。しかも釉が厚く、全体に鋭さを欠くところ、および高台内底面の釉が削りとられ、露胎である点からD-II-a類に分類されるのではないか。上田氏の編年案に従えば15世紀を中心とした時期が与えられる。(27)の青磁蓮弁文碗は、亀井、上田、小野の三氏がそれぞれ分類と編年を試みられている。亀井氏の分類では、線描の細蓮弁文をもつ点でB-2類に比定され、その使用時期の中心は16世紀前半から中葉とされている。また上田氏は、片切彫の鎬蓮弁文から細蓮弁文へと文様が変遷して行

くことを認識された上で蓮弁文をもつものをB類とし、さらに線描の細蓮弁文碗で高台内底部の釉を輪状に削りとるものをB-IV-b類としている。(27)の青磁細蓮弁文碗はこれに比定される。その年代幅については「……15世紀後半に出現し、蓮弁の退化を進めながら、残存形態として16世紀を通す、という程度に考えておきたい」と言う表現で、下限については断定を避けている。小野氏の分類では線描の細蓮弁文をもつものをC群に比定し、その時期を一条朝倉谷の調査成果をもとに、おおまかに15世紀中葉頃～16世紀末期頃と考えられている。口縁付近に雷文をもつ蓮弁文青磁碗(131)は、小野氏分類ではB類の範疇に属しB類のなかでも雷文をもつ蓮弁文碗が後出することを指摘している。亀井氏の分類ではAタイプに比定でき、14世紀中葉ないし15世紀前半の時期が与えられている。上田氏分類ではC-II-a類に相当し、15世紀前後を中心とした時期を考えられている。

鎬蓮弁文青磁杯(129)は、横田・森田氏の型式分類の龍泉窯系青磁杯III-4類にあたり、その盛行する時期は13世紀中葉～14世紀前半に比定されている。^②(130)の青磁稜花皿について亀井氏は、15世紀初め～16世紀中葉にかけての非常に長期にわたる製作・使用時期を相定されている。^{②③}

遺跡から出土した輸入陶磁器は9点と量的にも少なく、多くを語れない。ここでは、個々の輸入陶磁器を諸氏の編年案に照し合せ紹介するにとどめた。ただ内郭部溝状遺構から出土した(130)の青磁稜花皿は、土師器・堀などの比較的良好な共伴遺物をもち、このタイプの輸入陶磁器が当地方へ搬入された時期を知る手掛りを与えてくれる。

小 結

これまで個々の遺物について、その特徴と時期について述べてきた。ここでは各々の遺構から出土した土器を取り上げ、遺構の時期を考えたい。

河津館址の廃絶時期 今回の調査で我々が確認した館址の遺構は、館址南側の土壘と堀である。堀内からは、丹波系擂鉢(4)・甕(14)、瀬戸・美濃系天目茶碗(15)、石鍋(16)の4点のみで、いずれも細片で時期を判別する資料としては決め手に欠ける。したがって、氷上郡教育委員会の手で実施された内郭部確認調査の資料を中心に、館址の廃絶時期を考えてみる。内郭部の調査によって得られた遺物のなかで、溝状遺構出土の遺物が比較的まとまっている。溝内からは、土師質皿(90～128)を中心に輸入陶磁器(129～131)、瀬戸・美濃系卸皿(132)、土師質小壺(133)・堀(134)が出土している。

土師質皿の一群は、15世紀末～16世紀前葉の時間幅におさまると考えられ、堀は15世紀後半～16世紀前半の時期を想定している。輸入陶磁器からは、鎬蓮弁文青磁杯(129)が13世紀中葉～14世紀前半、青磁稜花皿(130)が15世紀初めから16世紀中葉にかけて、雷文をもつ青磁蓮弁文碗(131)は、15世紀を中心とした時期が考えられている。輸入陶磁器が示す時期の下限は、青磁稜花皿の16世紀中葉である。以上が、溝状遺構から出土した遺物に与えられた

時期である。溝状遺構の廃棄時期は、日常雑器として使用頻度の高い土師質皿および壙の下限年代を考慮にいれて、16世紀前半代のなかに求められると考えたい。ただ溝状遺構の廃棄年代が、すなわち館址の廃絶年代と判断し得るかという点については、調査者が異なるのでここで断定することは避け、内郭部の調査報告書に結論を委ねたい。

土壘内より出土した遺物は、瓦器小皿(18)・青白磁梅瓶(19)をはじめとして、数点の土師質小皿片である。

瓦器小皿と青白磁片の時期は、明確な根拠をもたないが、おおよそ平安時代末から鎌倉時代の所産であろう。土壘内より出土した遺物はわずか2点で、土壘の構築時期、すなわち館址の成立時期を知る積極的な証拠は得られなかった。

近世遺構群の時期 IV区で検出された近世遺構は、井戸・土坑・石垣・窯状遺構である。遺構の性格が不明な窯状遺構を除いた井戸・土坑・石垣は、建物址に伴う付属施設と認識し得る。したがって、これらの遺構の時期は、ほぼ同時期と考えられる。

遺構から出土した遺物は、土坑内より丹波系甕(30)が出土したほか、窯状遺構内より小刀(31)が出土している。土坑内より出土した甕は、18世紀中葉から後半の時期と考えられるため土坑・井戸・石垣の上限はこの時期幅のなかに求められる。窯状遺構は、これらの遺構群より新しいことが調査で判明している。これらの遺構は、江戸時代中期後葉から江戸時代後期にかけて存続したと考えられる。

- ① 横田洋三 「出土土師皿編年試案」 『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』 勤古代学協会 1981.7
- ② 秋枝 芳・山本博利 「御着城跡発掘調査概報」 姫路市教育委員会 1981
- ③ 浅岡俊夫他 『伊丹城跡発掘調査報告書IV』 伊丹市教育委員会 1978
- ④ 井守徳男・岡田章一 「釜屋城の調査」 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』 兵庫県教育委員会 1983.3
- ⑤ 池田正男・市橋重喜 『上板井古墳群』 兵庫県教育委員会 1986.3
- ⑥ 鈴木重治・松藤和人 「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」 『同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編II』 同志社大学校地学術調査委員会 1978.5
- ⑦ 阿久津 久・小川良太 「神戸市八多遺跡発掘調査報告」 神戸市教育委員会 1972.3
- ⑧ 下條信行・植山 茂・齋谷 寿・水口 薫 『太山寺坊院発掘調査報告』 勤古代学協会・平安博物館 1984.10
- ⑨ 山本博利・秋枝 芳 『本町遺跡』 姫路市教育委員会 1984.11
本町遺跡より類例を求めた遺物については詳細な記載がないため、実測図から判断した。したがって、遺物に対する認識の誤り、本文中の見解については、本稿執筆者にその全責任がある。
- ⑩ 山本博利・秋枝 芳 「加茂遺跡—姫路市飾磨区加茂字小寺・太ノ前」 『姫路市文化財調査報告V』 姫路市教育委員会 1975.3

- ⑪ 山本三郎他 「安富中学校前東遺跡」 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(佐用郡編)』 1976.3
- ⑫ 輔老拓治・村上賢治 「喜多中世墓群」 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会 1986.3
- ⑬ 橋本久和 『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1980.2
- ⑭ 大村敬通・水口富夫 『魚住古窯跡群』 兵庫県教育委員会 1983.3
- ⑮ 東播系こね鉢の時期については、兵庫県教育委員会の大村敬通氏のご教授を得た。とくに、こね鉢の年代観については、大村氏の意見に従うところが大きい。大村氏によると、これら一群の東播系こね鉢は、神出古窯址群の製品で、窯址群のなかでも、神出中学校南周辺で焼かれたものではないかと言うことである。
- ⑯ 森田 稔 「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—」 『神戸市立博物館研究紀要第3号』 1986.3
- ⑰ 大槻 伸 「丹波」 『世界陶磁全集3 日本中世』 1977
- ⑯ 井上喜久男 「16世紀の瀬戸・美濃窯」 『中近世土器の基礎研究』 1985.10
- ⑯ 嶋谷和彦 「堺環濠都市遺跡発掘調査報告—宿院町東丁 SKT14地点・調御寺跡」 『堺市文化財調査報告第20集』 堺市教育委員会 1984.3
- ⑯ 森下大輔・山田将人 「社／上三草近世墓—加東郡社町所在一」 『加東郡埋蔵文化財ニュース1』 加東郡教育委員会 1981.10
- ⑯ 岡田章一・渡辺 昇 『庄境1号墳』 兵庫県教育委員会 1987.3
- ⑯ 横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」 『九州歴史資料館研究論集4』 1978
- ⑯ 森田 勉 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」 『貿易陶磁研究No.2』 1982.8
森田氏は、この「口禿げの白磁」をA群に分類し、その終焉を「あまり明確ではないが……」と断りながら、沖縄県勝連城跡の資料等から14世紀前半代と考えている。
- ⑯ 『尻八館調査報告書』 尻八館調査委員会 1981
- ⑯ 三上次男・岩本義雄・佐々木達夫 「青森・北海道の中国陶磁—青森・尻八館出土の中国陶磁」 『貿易陶磁研究No.1』 1981.8
- ⑯ 上田秀夫 「14~16世紀の青磁碗の分類」 『貿易陶磁研究No.2』 1982.8
- ⑯ 亀井明徳 「日本出土の明代青磁碗の変遷」 『鏡山猛先生古稀記念・古文化論攷』 1980.10
- ⑯ 小野正敏 「山梨県八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」 『貿易陶磁研究No.1』 1981.8
- ⑯ 亀井明徳 「熊本県城南町出土の青磁資料」 『貿易陶磁研究No.1』 1981.8

出土遺物観察表

確認調査出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			胎土	色調	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径				
1	8 Tr 礫層	瓦器皿	8.2	1.8	—	精良	内外面・胎土 黒灰色	外面底部～体部、指押え調整後、口縁部強いナデ。内面底部～体部、指押え調整後、体部～口縁部方向の連続したヨコナデ。末端は上方へ引き抜いている。口縁下はとくに強いナデ。 底部、やや丸味をもつ。体部、外上方へ直線的に開き、口縁端部、丸くおさめる。	完形
2	2 Tr 第2層	土師質火舎	—	—	—	粗砂粒を微量含む	内外面・胎土 赤橙色	外面口縁下、連子窓状の刻み。 内面、磨滅し調整不明。	口縁部破片
3	6 Tr	須恵器甕	—	—	—	密砂粒を微量含む	内外面・胎土 淡灰色	粘土紐巻き上げ成形。ロクロナデ調整。 口縁端部、内側に折り曲げ丸くおさめる。	口縁部のみ残
4	6 Tr(2) 堀内砂礫層	無釉陶器擂鉢	—	—	—	密砂粒を含む	外面、黄橙色 内面、赤橙色	粘土紐巻き上げ成形？。外面、横方向のナデ調整後、指押え調整。内面、斜方向のナデ調整後1本描き擂目を施す。	体部破片 丹波系
5	8 Tr(5) 第2層	施釉陶器	—	—	(4.2)	密	内外面・胎土 淡黄色 釉色 乳白色	ロクロ水挽き成形？。高台部削り出し。 高台部を除く内外面に施釉。 細かな貫入。	底部のみ残 産地不明

I～III区 表土中出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			胎土	色調	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径				
6	III区 第1層(表土)	須恵器 こね鉢	—	—	(1.2)	密 1～3mm 大の繩を含む	内外面・胎土 暗灰色	粘土紐巻き上げ成形。外面底部、糸切り後、不定方向のナデ調整。 体部指頭によるナデ調整。 内面、使用時の磨滅激しく調整不明。	磨滅体部のみ残 東播系
7	I区 第1層(表土)	施釉陶器 徳利？	—	—	—	密	内外面・胎土 暗褐色 外面釉色、黒褐色	ロクロ水挽き成形。	胴部のみ残 外面、鉄釉 内面、露胎
8	III区 第1層(表土)	施釉陶器 壺？	—	—	(9.8)	密	内外面・胎土 黄灰色	ロクロ水挽き成形。内外面黄白色の化粧土塗付。 内面のみ透明釉を施す。	底部のみ残 産地不明
9	III区 第1層(表土)	施釉陶器 皿	—	—	(4.8)	密	内外面・胎土 黄灰色 釉色、淡緑灰色	ロクロ成形。高台部、削り出し。 外面体部、内面施釉。高台部は施釉せず。 内面見込周縁に目跡を認める。内面には、いわゆる草花文の赤絵が施された痕跡あり。	底部～体部のみ残 産地不明
10	III区 第1層(表土)	青磁碗	8.3	4.4	3.2	緻密	内外面・胎土 白色 釉色、緑灰色	成形不明瞭。高台は削り出している。 外面体部には、ヘラ状工具による刻が4段、文様風に施されている。 釉は内面および外面口縁部から高台部中位にかけて施され、高台部下位は釉が削り取られている。釉かけは全体的に粗で、斑がある。	口縁体部のみ欠 産地不明(国内産)
11	III区 第1層(表土)	磁器(染付) 皿	—	—	—	緻密	内外面・胎土 黄灰色 釉色、白色・ 呉須発色良好	成形不明。釉は内面見込部分、外面体部～高台部・器底部分にまで及び、墨付は釉を搔き取っている。 内面見込部分は、呉須による草花文が描かれている。	底部細片

I ~ III区 堀内出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
12	II区 堀埋土上層 第 2 層	無釉陶器 擂 鉢	—	—	—	密 2 mm大の 砂粒を含む	内外面・胎土 赤褐色	内面見込み部、擂目 6 条 1 単位で同心円状。 中央 6 条 1 単位。	底部少残
13	II区 堀埋土上層 第 2 層	施釉陶器 仏花瓶?	—	—	7.8	密 0.7 mm大 の砂粒を 含む	内外面・暗褐色。 底部外面、 黄褐色。胎土、 暗灰色。釉色、 暗オリーブ色	底部周縁、接合痕。粘土紐巻き上げ後ロクロ 水焼き成形。底部周縁へラ削り後ナデ調整。 外面体部、中位まで施釉。 内面無釉。	胴部~底部残 丹波系?
14	II区 堀埋土上層 第 2 層	無釉陶器 甕	(36.8)	—	—	密 1 mm大の 礫を含む	内外面、赤褐色 胎土、灰白色	粘土紐巻き上げ成形。外面口縁部、横ナデ 調整。胴部、横向方向のナデ。 内面口縁部、横ナデ調整。胴部、横向方向の ナデ調整。口縁端部、凹線が巡る。	口縁~胴部少 残 丹波系
15	II区 堀 下 層 第 16 層	施釉陶器 壺	—	—	—	密	内外面・胎土 黄灰色 釉色、黒色	水焼きロクロ成形? 口縁端部、外上方に尖り気味につまみ上げ る。	口縁~体部少 残 瀬戸・美濃系 天目茶碗
16	II区 堀 下 層 第 16 層	石 製 品 壺	—	—	—				胴部破片残 内面使用時の 磨滅
遺物番号	出土地区	器種・器形	残長(cm)	径(cm)	重量(g)			形 态	備 考
17	II区 堀埋土上層 第 2 層	釘	3.1	0.3×0.3	2.5			頭部および釘先を欠き、全様は不明。断面 の形状は正方形を呈し、表面は錆が著しい。	

土壘内出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
18	I区 土 塘 内	瓦 器 小 盆	(8.2)	1.7	—	精良	内外面・胎土 黒色	外面底部、押え調整後、口縁部ヨコナデ。 内面、暗文の痕跡を認む。 底部、平坦。体部、上方に直線的に短くつ まみ上げる。口縁端部、丸くおさめる。	口縁~底部少 残
19	I区 土 塘 内	青白磁 梅 瓶	—	—	—	緻密	釉色 外面、青白色 内面、灰白色	ロクロ成形。外面、跑形による唐草文、柳目 文が施されている。器厚は5 mm前後と薄い。 釉、内外面ともに施釉され、とくに外面は 透明度が高い。	肩部?破片 景德鎮窯系

IV区 表土中出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
20	IV区 第 2 層	土 師 質 皿	(8.8)	1.3	—	粗 砂粒を多 量に含む	内外面・胎土 橙色	内外面磨滅著しく調整痕不明。 口縁端部は丸くおさめている。	口縁部少残
21	IV区 第 2 層	土 師 質 皿	(10.4)	2.2	—	やや密 砂粒を多 量に含む	内外面・胎土 橙灰色	内外面磨滅著しく調整不明。 内外面体部に指押え調整痕あり。 口縁端部、上方に尖り気味につまみ上げる。	
22	IV区 第 1 層 (表 土)	須恵質 こね鉢	—	—	—	密 砂粒を若 干含む	内外面・胎土 暗灰色	体部内外面ヨコナデ調整。 外面口縁下、外方へ尖り気味につまみ出す。 口縁端部は内側へ折り返し丸くおさめてい る。	口縁~体部破 片 東播系
23	IV区 第 2 層	須恵質 こね鉢	—	—	—	密 砂粒を若 干含む	内外面・胎土 暗灰色	外面口縁下、丸味をもち外方につまみ出す。 口縁端部は平坦。ナデ調整。	口縁部細片 東播系
24	IV区 第 1 層 (表 土)	施釉陶器 塊	—	—	—	密	内外面・胎土 黄白色 釉色、淡黄綠 色	ロクロ成形。 内外面、体部、ロクロ目顯著。 釉は口縁~体部に施され細かな貫入が認め られる。	口縁~体部細 片 瀬戸系灰釉平 底

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			胎土	色調	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径				
25	IV区 第4層	白磁 杯	—	—	—	緻密	内外面・胎土 灰白色 釉色・白色	体部、やや内彎し、口縁端部・外反。 口縁端部は露胎のいわゆる口禿。	口縁～体部細 片
26	IV区 第1層(表 土)	青磁 碗	—	—	(5.7)	やや密	内外面・胎土 黄灰色 釉色、暗オリ ーブ色	ロクロ成形。 釉は内面および外面体部～高台部にかけて 施されている。器底部分は露胎で、釉を搔 き取った痕跡が認められる。	体部～底部½ 残
27	IV区 第1層(表 土)	青磁 碗	—	—	5.0	緻密 黒色微粒 子を含む	内外面・胎土 灰白色 釉色、淡オリ ーブ色	ロクロ成形。 内面見込には「寿」の字の印文が施されて いる。 体部下位には、細蓮弁文の痕跡がある。 釉は、内面および器底部分を除く全面に 厚く施釉され、粗い貫入が認められる。 器底部分は、酸化鉄が塗布され赤化し、中 心に釉が残る。また、目跡が認められる。	体部下位～高 台部残
28	IV区	無釉陶器 擂鉢	—	—	(14.4)	密 粗砂を含 む	内外面・胎土 暗灰色	外面底部、指押え様の凹凸。体部ヨコナデ。 内面体部は無い回転ナデ調整。 7本を1単位とした櫛状工具による擂目が 放射状に施されている。	体部～底部½ 残 備前系
揮函番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			重量 (g)		技法の特徴	備考
29	IV区 井戸埋土上 層	石製品 スリ石	6.3	6.1	4.4	236		片面使用による磨滅痕あり。	完存 石材不明

土坑内出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			胎土	色調	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径				
30	IV区 土坑1	無釉陶器 甕	(46.6)	—	—	密 1～5mm 大的礫を 含む	内外面・胎土 暗赤褐色	輪積み成形。口縁部外面および胴部上半に 沈線を有する。胴部上部に輪耳を貼り付ける (3個所か)。内面胴部上半、赤ドベ釉 流しがかけの後ナデ調整。	丹波系水屋甕

窯状遺構出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			目釘孔径		技法の特徴	備考
			身巾	茎幅	厚さ				
31	IV区 窯状遺構	鐵製品 小刀	1.5～1.3	1～1.2	0.2～0.3	0.1		茎部に目釘孔あり。	

石垣出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			胎土	色調	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径				
32	IV区 石垣裏込め 土内	土師質 皿	(12.0)	2.5	—	粗 極少量の 砂粒を含 む	内外面・胎土 暗褐色	外面底部～体部、指押え調整後、口縁部強 いヨコナデ。 内面底部、指押え調整後、底部周縁～口縁 部に2段のヨコナデ。 底部、丸味をもつ。体部下半、内彎気味に 立ち上り、上半、外反する。口縁端部、丸 くおさめる。	口縁～底部½ 残 外面底部～口 縁にかけて吸 炭
33	IV区 石垣裏込め 土内	土師質 皿	(12.7)	1.85	—	精良	内外面・胎土 黄白色	外面底部～体部、指押え調整後、口縁部2 段のヨコナデ。 内面底部～体部、指押え調整後、底部周縁、 口縁部ヨコナデ。とくに底部周縁強いヨコ ナデ。底部、丸味をもつ。体部下半、内彎 して立ち上り、上半、外上方へ直線的に開く。 口縁端部、丸くおさめる。	口縁～底部½ 残 白色系

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
34	IV区 石垣付近流土	白 磁 盆	(8.2)	1.85	(4.2)	緻密 黒色微粒子を含む	内外面・胎土 黄灰色 釉色、白色	外面、ロクロケズリ。 高台削り出し。(左ロクロ) 内面全面施釉。高台際以下、施釉せず。 体部下半、外方へ直線的に開き、中央で内側へ屈曲する。 高台疊付、アーチ状に抉る(4ヶ所)。 底部見込、高台疊付凸部分に目跡あり。	口縁～底部½ 残 釉、同心円状に貫入

旧道肩部出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
35	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	7.8	1.8	—	やや密 精良	内外面・黒灰色 胎土・灰白色	外面底部、指押え調整後、口縁部ヨコナデ。 内面は磨耗し調整痕不明瞭。底部に指押え 調整痕あり。 底部、丸味をもつ。体部、直線的に外上方 へ立ち上り、口縁端部、尖り気味。	口縁～底部½ 残 歪んでいる
36	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	(8.2)	1.5	—	やや密 砂粒を含む	内外面・黒灰色 胎土・灰白色	内面ともに磨滅著しく調整痕不明瞭。底 部に指押え調整痕あり。 底部、やや丸味をもつ。体部、直線的に外 上方へ短く立ち上る。	口縁～底部½ 残
37	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	(8.2)	1.95	—	やや密 精良	内外面・黒灰色 胎土・灰白色	内面、磨滅のため調整痕観察不可能。 内外面底部に指押え調整の痕跡。 底部、丸みをもつ。体部、器壁厚く直線的 に外上方に立ち上る。 口縁部は上方につまみ上げ尖り気味であ る。	口縁～底部½ 残
38	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	8.4	1.8	—	やや密 精良	内外面・黒灰色 胎土・灰白色	外面底部、指押え調整後、口縁部は強いヨ コナデ。内面底部、一方方向の丁寧なナデ の後、底部周縁および口縁部に丁寧なヨコ ナデ。末端は右上方に引き抜いている。 底部、丸みをもつ。体部、内彎気味に立ち 上り口縁端部、上方につまみ上げている。	完存
39	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	7.3	1.6	—	やや密 精良	内外面・黒色 胎土・灰白色	内外面底部、指押え調整。口縁部ヨコナデ。 口縁下に粘土帯接合痕跡あり。 底部、やや丸味をもつ。体部、内彎気味に立 ち上り、口縁部は肥厚し、端部は尖って いる。	ほぼ完存
40	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	7.8	1.85	—	やや密	内外面・黒色 胎土・灰白色	外面底部、指押え調整。 底部、やや直線的。体部、内彎して立ち上 り上半肥厚する。口縁端部、丸くおさめる。	口縁～底部½ 残
41	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	8.7	1.8	—	やや密 精良	内外面・黒灰色 胎土・灰白色	内外面ともに、剥落激しく調整痕不明瞭。 内外面ともに指押え調整痕が残る。 底部、平底気味。体部、内彎気味に立ち上 り、口縁端部は尖り気味である。	口縁～底部½ 残
42	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	(8.0)	1.8	—	やや密 精良	内外面・黒色 胎土・灰白色	内外面ともに底部指押え調整後、口縁部ヨ コナデ調整。 底部周縁、粘土帯接合痕。 底部、平底気味。体部、やや外反気味に立 ち上り、口縁端部、丸くおさめる。	口縁～底部½ 残
43	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	(8.4)	—	—	密 若干砂粒 を含む	内外面・黒色 胎土・灰白色	外面底部、不定方向のナデ調整後、口縁部 ヨコナデ調整。 内面底部周縁に強いナデ調整。 底部、丸みをもつ。体部、やや外反気味に 開き口縁端部、丸くおさめる。	口縁～底部½ 残
44	IV区 旧 道 木根搅乱土	瓦 器 盆	(10.0)	2.0	—	やや密 精良	内外面・黒色 胎土・灰白色	内外面ともに指押え調整後、口縁部ヨコナ デ調整。底部、平底気味。体部、上方へ内 彎して短く立ち上り、口縁部、上方へ尖り 気味につまみ上げる。	口縁～底部½ 残
45	IV区 旧 道 木根搅乱土	土 師 質 盆	7.6	1.5	—	精良	内外面・胎土 淡橙色	底部周縁、粘土帯接合痕。 内外面底部、指押え後、体部、ヨコナデ。 底部、丸みをもつ。体部、外上方へ短く立 ち上り、口縁端部、尖り気味につまみ上げ る。	

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
46	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 皿	(11.5)	2.5	—	やや密 精良	内外面・胎土 淡橙色	外面底部、指押え調整後、不定方向のナデ。 口縁部ヨコナデ。 内面底部、指頭によるナデ。口縁部ヨコナデ。 底部、やや丸みをもつ。体部下半、内鬱氣味に立ち上り、上半、外反する。口縁端部、丸くおさめる。	口縁～体部% 残
47	IV区 旧 道 木根攪乱土	瓦 器 碗	—	—	6.1	やや密 精良	内外面・黑色 胎土・灰白色	外面底部、貼付高台。高台周縁をナデ調整し接合を補強している。 内面、底部見込み、鋸歯状の暗文。 高台、外反する。高台高、7mm。	底部% 残
48	IV区 旧 道 木根攪乱土	瓦 器 碗	(14.0)	—	—	やや密	内外面・黑色 胎土・灰白色	外面体部、指押え調整後、口縁部強いヨコナデ。 内面剥落が激しく調整痕不明瞭。口縁部に暗文の痕跡あり。 口縁端部 尖り気味につまみ上げる。	口縁～体部% 残
49	IV区 旧道 木根攪乱土	瓦 器 碗	—	—	(6.8)	やや密 精良	内外面・黑色 胎土・灰白色	全面磨減著しく、調整痕観察不能。 高台、外反し、端部、尖り気味。	
50	IV区 旧 道 木根攪乱土	瓦 器 碗	(13.2)	5.6	(7.6)	やや密 精良	内外面・黑色 胎土・灰白色	外面底部、貼付高台。高台周縁ナデ調整し、高台部の接合を補強している。体部、指押え調整後、口縁部に強いヨコナデ。 内面底部見込には鋸歯状の暗文を施し、体部は螺旋状の暗文が施されている。 体部、ふくらみに乏しい。口縁端部、内上方に尖り気味につまみ上げる。高台、やや外反気味、端部、丸くおさめる。	口縁～底部% 残
51	IV区 旧 道 木根攪乱土	瓦 器 碗	13.2	5.6	(7.6)	やや密 精良	内外面・黑色 胎土・灰白色	外面磨減著しく調整痕不明瞭。貼付高台で高台の周縁は強いナデ調整。 体部は指押え調整痕を残す。 内面は剥落して詳細は不明。底部見込みには密な平行状暗文の痕跡と体部上位に密な圈線状暗文の痕跡。 外面口縁端部直下に一条の沈線が巡る。 高台、直立気味で端部、丸くおさめる。	口縁～体部% 残 器高指数 42.4
52	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	—	—	—	粗 長石粒を若干含む	内外面・胎土 淡橙色	外面、口縁部ヨコナデ調整後、胴部に叩き目が施されている。 口縁下に一条の沈線が巡る。 内面、口縁部、粗い刷毛目痕跡あり。 口縁端部、外上方につまみ上げる。	口縁部細片 内面、薄く吸炭
53	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	—	—	—	密 細かな長 石粒を若干含む	内外面・胎土 橙灰色	外面頸部、叩き目の痕跡。口縁～頸部、ヨコナデ調整。 内面、体部および頸部、ヨコナデ。 頸部、直線的に外上方に開き、口縁端部上面、平坦。口縁端部、外方へ尖り気味につまみ出す。	口縁～頸部破 片 非常に硬質
54	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	(23.3)	—	—	粗 砂粒を多 量含む	内外面・胎土 淡橙色	外面胴部、平行叩き。口縁～頸部、2段のヨコナデ調整。 内面胴部、細かな刷毛調整。口縁～頸部、ヨコナデ調整。 口縁端部上面、平坦。口縁端部、外方へ水平につまみ出す。	口縁～胴部% 残 内面口縁部お よび頸部、吸炭（使用時）
55	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	(25.0)	—	—	粗 砂粒を多 量含む	内面・胎土、 外面・淡黄色	外面胴部、平行叩きの後、口縁～頸部に2段のヨコナデ調整。 内面胴部、指押え調整痕跡あり。 口縁～頸部、ヨコナデ調整。 口縁端部上面、平坦。口縁端部、外方へ水平につまみ出す。	口縁～胴部 外面吸炭（使 用時）
56	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	(21.9)	—	—	粗 砂粒を多 量含む	内外面・胎土 橙灰色	外面胴部、平行叩きの後、口縁～頸部に2段のナデ調整。 内面胴部、指押え調整。口縁～頸部ヨコナデ調整。 口縁端部上面、平坦。口縁端部、外方へ水平につまみ出す。	口縁～胴部% 残 内外面口縁～ 胴部吸炭（使 用時）

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
57	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	(25.5)	—	—	粗 砂粒を多 く含む	内外面・胎土 橙灰色	外面胴部、平行叩きの後、口縁～頸部にかけ て2段のヨコナデ調整。 内面胴部、刷毛目の痕跡あり。口縁～頸部 ヨコナデ。 口縁端部上面、平坦。口縁端部、外方へ水 平に尖り気味につまみ出す。	口縁～頸部少 残 外面頸部、吸 炭(使用時)
58	IV区 旧 道 木根攪乱土	土 師 質 堀(甕)	(23.1)	—	—	粗	内外面・胎土 橙灰色	外面胴部、平行叩き。口縁～頸部に2段の ヨコナデ。 内面胴部、同心円状の当木痕を不完全にナ デ消す。頸部ヨコナデ。口縁直下、凹線様 の強いヨコナデ。 口縁端部上面、やや丸みをもち、外傾。口 縁端部、外下方へつまみおろす。	内外面口縁付 近、吸炭(使 用時)
59	IV区 旧 道 木根攪乱土	須 惠 質 こね鉢	—	—	—	密 砂粒を含 む	内外面・胎土 暗灰色	内外面体部および口縁部、ヨコナデ調整。 外面口縁部吸炭痕跡(使用時)あり。	口縁部細片 東播系
60	IV区 旧 道 木根攪乱土	須 惠 質 こね鉢	—	—	—	密 砂粒を含 む	内外面・胎土 暗灰色	外面体部ヨコナデ調整。 外面口縁下は丸味をもち下方へつまみ出 す。 口縁端部は上方へつまみ上げ、若干尖り氣 味である。 外面口縁部、自然釉付着。	口縁～体部破 片 東播系

整地層出土遺物

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
61	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(6.2)	—	—	やや密 若干砂粒 を含む	内外面・胎土 明橙色	内外面とも磨滅著しく調整痕不明。 体部下半、外上方に開き、口縁端部、尖り 氣味に内鬱する。	口縁部少 残
62	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(7.0)	1.8	—	粗 砂粒を含 む	内外面・胎土 橙色	手づくね成形。 内外面ともに強い指押え調整。 口縁端部、尖り氣味につまみ上げる。	口縁～底部少 残
63	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(9.65)	2.5	—	粗 砂粒を含 む	内外面・胎土 橙色	体部、粘土帯接合痕あり。 外面、指押え調整。 内面、指押え調整後、指頭による不定方向 のナデ。 体部、外上方に直線的に開き、口縁端部、 丸くおさめる。全般的に器厚が厚く、口縁 端部は若干丸味を帯びている。	口縁～底部少 残
64	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(11.1)	—	—	やや密 精良	内外面・胎土 橙灰色	体部、粘土帯接合痕あり。 外面体部下半、指押え調整後、不定方向の ナデ。 口縁部、ヨコナデ。 内面体部、粗い刷毛目。口縁部、ヨコナデ。 体部下半、内鬱氣味に立ち上り、上半、外 反氣味に開く。口縁端部、丸くおさめる。	口縁～体部少 残
65	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(7.5)	1.4	—	やや密	内外面・胎土 淡橙色	外面、磨滅著しく調整不明。内面底部の周 縁～口縁部にかけて指頭による左上方向の 連続ナデ。器壁薄い、底部、平底氣味。体 部、内鬱して立ち上り口縁端部は尖り氣味 につまみ上げている。	口縁～底部少 残
66	IV区 第 10 層	土 師 質 皿	(7.6)	1.7	—	粗 砂粒を多 量含む	内外面・胎土 橙色	口縁下、粘土帯接合痕あり。 内外面ともに磨滅し調整痕不明。 口縁端部、丸くおさめる。	口縁～底部少 残
67	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(9.9)	2.0	—	やや密 若干砂粒を含む	内外面・胎土 橙色	内外面ともに磨滅著しく調整痕不明。 口縁端部、多少尖り氣味。	口縁～底部少 残
68	IV区 第 9 層上層	土 師 質 皿	(11.2)	2.4	—	やや密 若干砂粒を含む 植物纖維 混入	内外面・胎土 橙色	内外面ともに剥落し、調整痕不明瞭。外面 体部に指押え調整痕あり。内面底部周縁 に粗い刷毛目。口縁下は肥厚し、口縁端部、 外上方へ尖り氣味につまみ上げる。	口縁～体部少 残

遺物番号	出土地区	器種 器形	法 量(cm)			胎 土	色 調	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高	底 径				
69	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(7.2)	1.6	—	やや密 砂粒を若 干含む	内外面・胎土 橙色	外面底部周縁、粘土帶接合痕あり。 外面、口縁～底部、指押え調整。 内面、口縁～底部、指頭による幅広いナデ。 体部、内縫気味に立ち上り口縁端部、上方 に尖り気味につまみ上げる。	口縁～底部△ 残
70	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(10.0)	1.6	—	やや密 砂粒を若 干含む	内外面・胎土 橙色	口縁下、粘土帶接合痕有り。 外面底部～口縁部、指押え調整。 内面底部～口縁部、指押え調整後、不定方 向のナデ。口縁端部、やや尖り気味。	口縁～底部△ 残 外面底部 吸炭痕（焼成 時）
71	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(10.7)	2.3	—	やや密 砂粒を含 む	内外面・胎土 橙色	口縁下、粘土帶接合痕あり。 外面、底部～体部、指押え調整。口縁部、 ヨコナデの痕跡。	口縁～底部△ 残
72	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(10.1)	—	—	やや密 砂粒を含 む	内外面・胎土 橙色	内外面底部～体部、指押え調整後、口縁部 ヨコナデ。 体部下半、内縫気味に立ち上り、上半、外 反気味。口縁端部、丸くおさめる。	
73	IV区 第 9 层	土 師 質 皿	(10.0)	2.5	—	やや密 砂粒を微 量含む	内外面・胎土 橙色	外面底部から口縁部にかけ弱い指押え調 整。 内面底部および底部周縁に粗い刷毛目（単 位不明）が施され、口縁下はヨコナデ調整 か？。 体部、やや内縫気味に立ち上り、口縁下、 やや外反気味。口縁端部、外方につまみ出 し気味。	口縁～底部△ 残
74	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(11.0)	2.8	—	やや密 若干砂粒 を含む	内外面・胎土 暗灰色	外面底部および体部、弱い指押え調整後、 口縁部強いヨコナデ。 内面底部および底部周縁、強い指押え調整 後、底部一方向のナデ。口縁下ヨコナデ。 底部、扁平気味。体部、やや外反し、口縁 端部は丸く納めている。	口縁～底部△ 残
75	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(11.4)	2.6	—	粗 砂粒を微 量含む	内外面・胎土 暗灰色	外面底部および体部下半、弱い指押え調整 後、口縁部、強いヨコナデ。 内面底部および底部周縁、指押え調整後、 一方向の粗い刷毛目。口縁部、ヨコナデ。 底部、扁平気味。体部下半、内縫気味に立 ち上り、上半、外反気味。口縁端部、丸く おさめる。	口縁～底部△ 残 刷毛目幅 6本/cm
76	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	11.0	3.0	—	やや密 砂粒を微 量含む	内外面・胎土 橙色	外面底部～体部、弱い指押え調整。口縁下、 強いヨコナデ。 内面底部、指押え調整後、口縁下ヨコナデ。 底部周縁は強いナデ調整。 底部、扁平気味。体部下半、内縫気味に立 ち上り、上半、やや外反する。口縁端部、 外上方にやや尖り気味につまみ上げる。	口縁～底部△ 残
77	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(10.8)	2.7	—	密 砂粒を微 量含む	内外面・胎土 黄白色	外面体部、指押え調整後、口縁下、強いヨ コナデ。内面底部周縁および体部にヨコナ デ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁～体部△ 残
78	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(12.0)	—	—	やや密 精良	内外面・胎土 橙色	外面口縁～体部、指押え調整。 内面体部、指押え調整後、指頭による不定 方向のナデ。 体部、内縫気味に立ち上り、口縁下は肥厚、 口縁端部は丸くおさめている。	口縁～底部△ 残
79	IV区 第 9 層	土 師 質 皿	(12.5)	2.5	—	密	内外面・胎土 橙色	体部に粘土帶接合痕跡あり。 外面底部および体部、指押え調整痕跡あり。 内面、底部周縁、指頭による強いヨコナデ。 体部、直線的に外上方に開き、口縁端部、 丸くおさめる。	口縁～底部△ 残
80	IV区 第 9 层	土 師 質 皿	(17.3)	—	—	やや密 若干砂粒 を含む	内外面・胎土 乳白色	体部外面、指押え調整後、口縁下をヨコナ デ。 内面体部は磨滅激しく調整痕不明瞭である が、口縁下にヨコナデ痕跡は認められる。	口縁～体部△ 残

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)			胎土	色調	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径				
81	IV区 第9層	瓦器 碗	(14.0)	5.3	(6.6)	やや密 精良	内外面・胎土 灰白色	内面磨滅著しく、調整痕観察不可能。外面 体部は指押え調整痕残る。貼付高台で高台 部周縁を強く回転ナデ調整を行い接着を強 めている。体部、下半、ふくらみをもち内 彎して立ち上る。口縁端部、上方に尖り気 味につまみ上げる。高台、直立し安定する。	口縁～底部½ 残
82	IV区 第10層	瓦器 碗	—	—	(6.6)	やや密 砂粒を含 む	内外面・黒色 胎土・灰白色	内外面磨滅著しく、調整痕観察不可能。 高台、断面形台形を呈し安定する。	高台部½残
83	IV区 第9層	土師質 壺(表)	—	—	—	密(硬質)	内面・橙褐色 外面・赤褐色 胎土・橙褐色	外面頸部、2段のヨコナデ。 内面頸部、ヨコナデ。 口縁端部上面、外傾し、口縁端部、外方に 尖り気味。	口縁～頸部細 片
84	IV区 第9層	青磁 杯	—	—	—	緻密 砂粒・黑 色微粒子 を含む	胎土・黄灰色 釉色・青灰色	外面、回転ロクロケズリ。 底部周縁で屈曲し、体部、外反する。口縁 端部、やや角ばる。 釉は比較的透明度が高く粗い貫入が認められ る。	口縁～体部½ 残
遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)					形 態	備考
			残長	径	重量(g)				
85	IV区 第10層	釘	3.3	0.3×0.4	2.0			頭部および釘先を欠き、全様は不明。断面 の形状は長方形を呈し、表面は銹が著しい が、鉄質は良好。	
86	IV区 第10層	管状鉄製 品	3.1	内径・ 0.35~0.9 外径・ 0.8~1.2	5.2			用途不明。全体の形状はラッパ状を呈する。 断面の厚みは、一方へ片寄り、全体的に粗 雑なつくり。	

IV区 出土の銅錢

遺物番号	出土地区	器種 器形	法量(cm)					形 態	備考
			径	厚み	重量(g)				
87	IV区 第1層(表 土)	寛永通宝	2.3	0.8	1.8			表面の文字、凹凸著しい。周囲及び中央の 透し穴は凹凸著しく、鑄上り不良。	
88	IV区	寛永通宝	2.4	0.8	1.9			表面の文字、細く凹凸乏しい。鑄上り良好。	
89	IV区 第2層	寛永通宝	2.3	1.0	2			表面の文字、凹凸乏しい。裏面に「元」字。 鑄上り良好。	

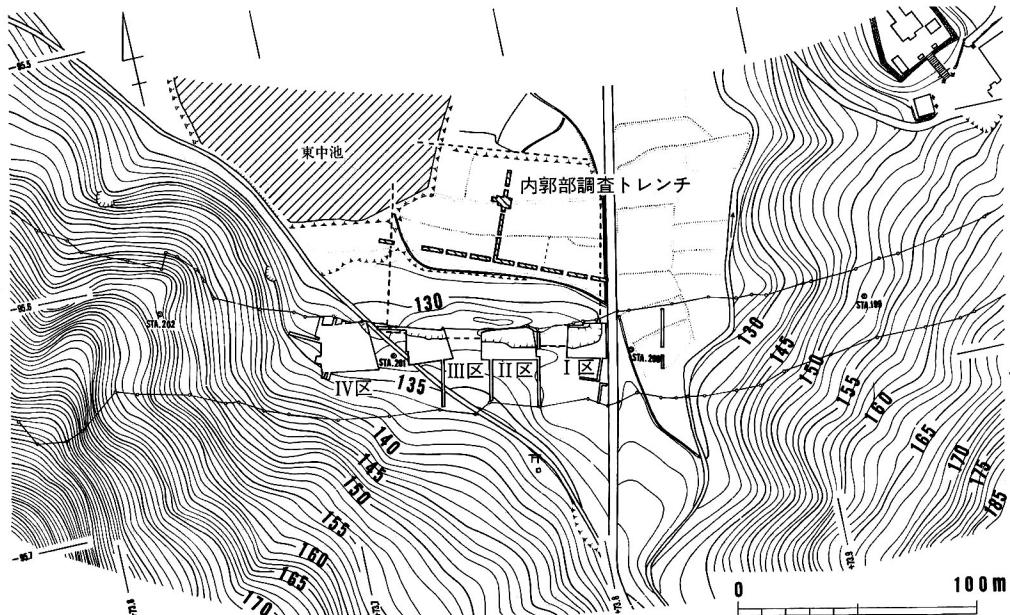
第5章 東中池改修事業に伴う伝「河津氏館址」の調査について

安田 裕司

調査に至る経過

昭和58年度、伝「河津氏館址」に隣接して所在する東中池の改修工事が兵庫県・篠山土地改良事務所によって計画された。このため氷上郡教育委員会が当該地域を事前踏査したところ、伝承地は平坦な水田になっており、館址伝承地の西端にあたる部分で、長さ30mにわたる土壙状の構築物と南側で空堀状遺構が現存しているのを確認した。

『丹波志』巻之三古城部に「佐中峰ノ麓ニ在リ山ヲ登レバ左ニ堀口ノ屋敷跡有三ツ尾河津氏ノ旧跡ナリ落城天正年中ナリソノ後此所ヨリ北ニアタル田中ニ屋敷有云々」。同書巻之四姓氏部にひく河津館址の条には、「中山村三ツ尾城主赤井刑部ノ客分ニテ在屋敷跡ハ中村佐中峰ニ上ル左ニ堀形有リ云々」の記述があり、ほぼこの地域に『丹波志』にいふ「河津氏旧跡」が存在しているものと考えられるため、土地改良事務所等と館址の取り扱いについて協議した結果、遺構の確認及び範囲究明を主目的とした発掘調査を実施するに至ったのである。



第35図 河津館址調査区位置図

調査期間

自) 昭和58年11月24日
至) 昭和59年1月31日

調査方法

館址の範囲については、前述のとおり土壘跡・空堀跡の遺存状況などから推測し得るため、館域推定地内に幅2mのT字形トレーニングを設定して調査を実施した。

調査の概要

今回実施した確認調査の結果、館域推定地の東端及び西端の部分で堀跡、主郭内で掘立柱の柱穴群・溝状遺構等の存在を確認した。

西側の堀跡は、上端幅4m・底面2m・深さ1.6mを測る逆台形状を呈している。堀跡の延長線上には前段で述べた土壘状構築物が存在しており、この構築物が搔きあげの土壘の痕跡であると考えられるが、工事対象地域外に位置しているため断面精査等の調査を実施していない。

東側の堀跡については土壘跡を含めて遺構面全体が削平を受けているようで深さ80cmを残すのみである。

両堀は80mを隔てて並列し、この空間が館址の内郭部に相当するものと考えられる。

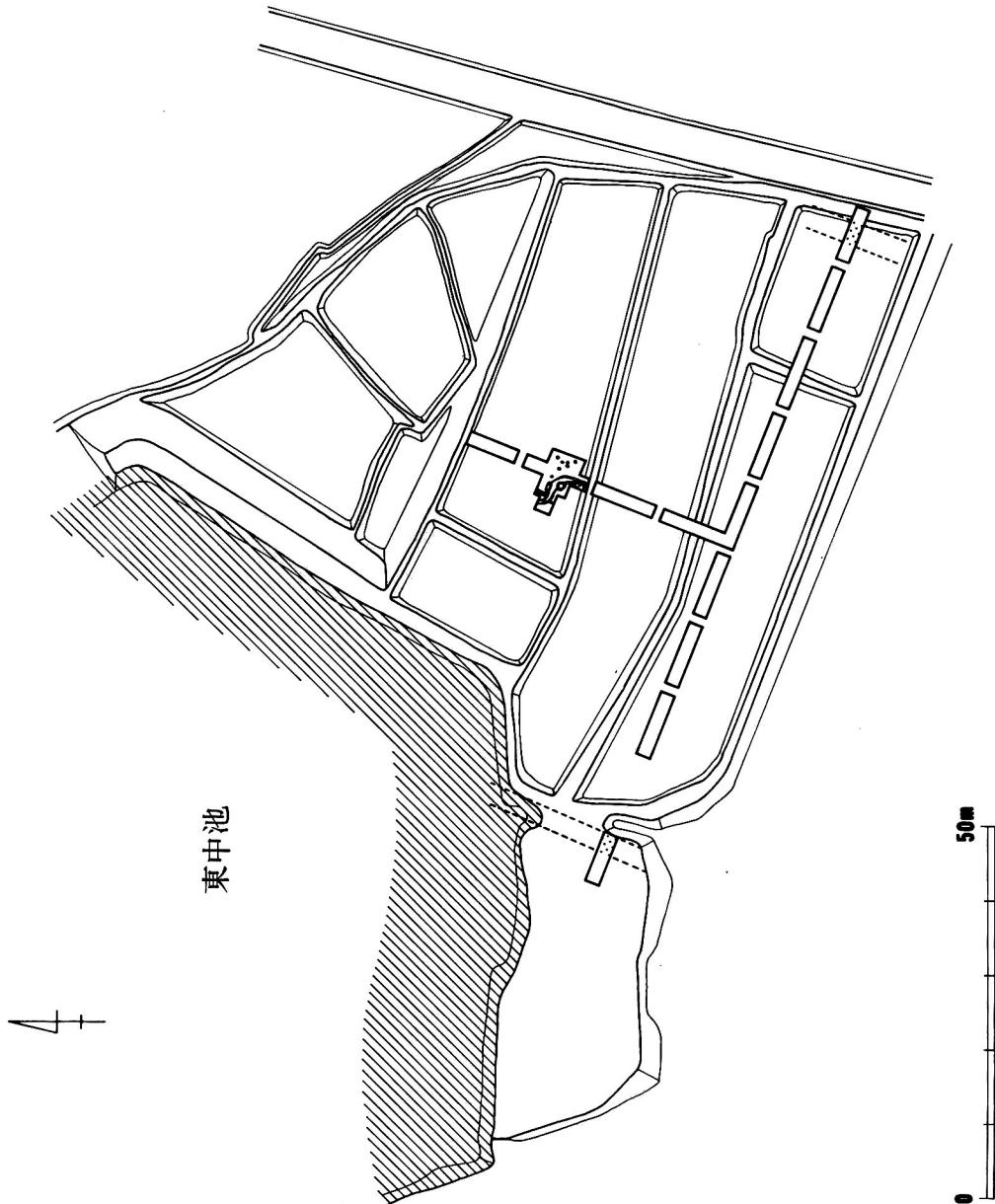
今回の発掘調査では、北側の堀跡を検出することができなかつたが、南側の空堀から80mの距離を隔てて比高2mの段差が東西に走っており、このラインが北堀の痕跡若しくは館址の北限と推定される。

内郭部の遺構については、遺構面がかなりの削平を受けていることと、調査の主眼を堀跡を中心とした館址の範囲究明に置き、調査範囲の拡張を積極的に実施していないため明確にすることができなかつたが、館址の中央部で北行あるいは西行しながら貫流する幅1mあまりの溝状遺構や、掘立柱建物の柱穴群を検出した。

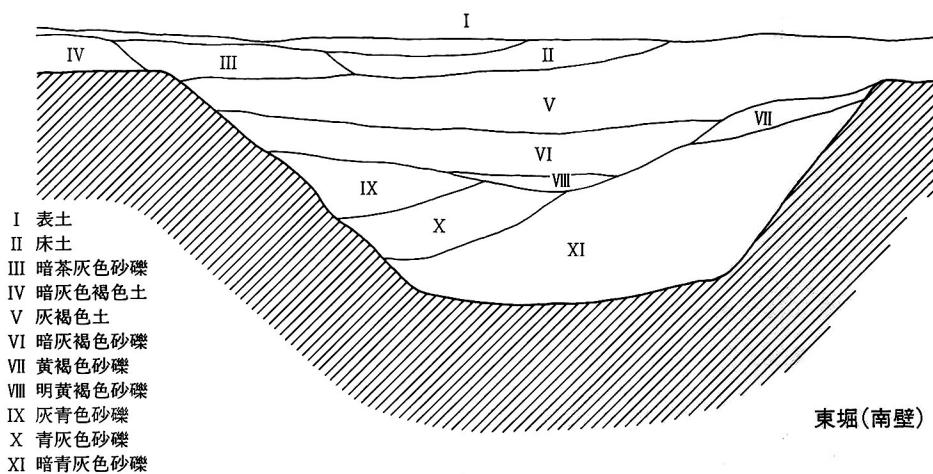
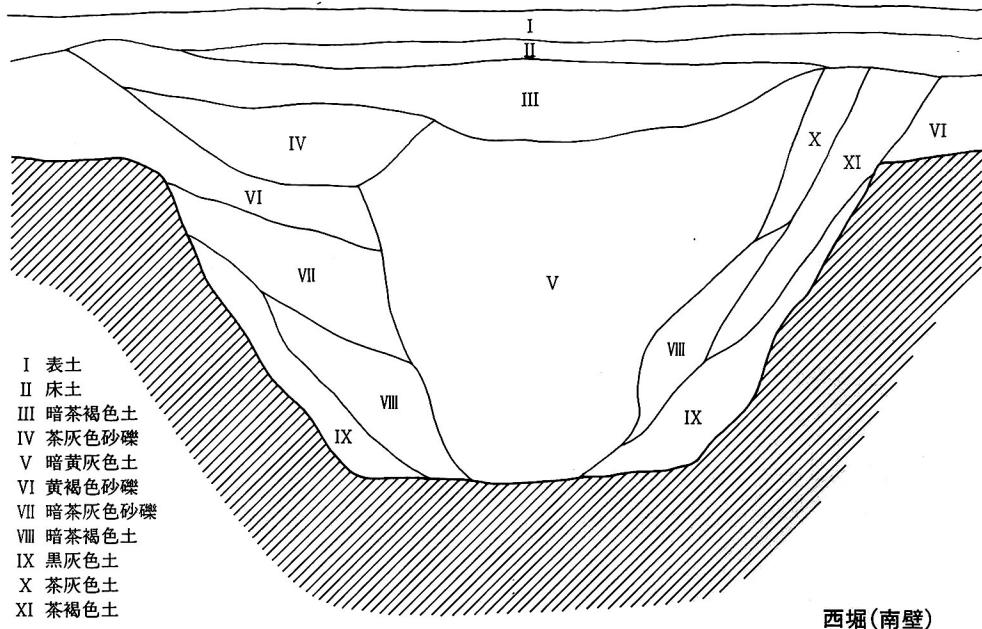
小 結

以上のとおり、中世後半の方形城館の存在は、『丹波志』等の伝承どおり実証されたわけであるが、その館の廃絶年代については『丹波志』の記述よりも一世紀前後遡るものと考えられる。

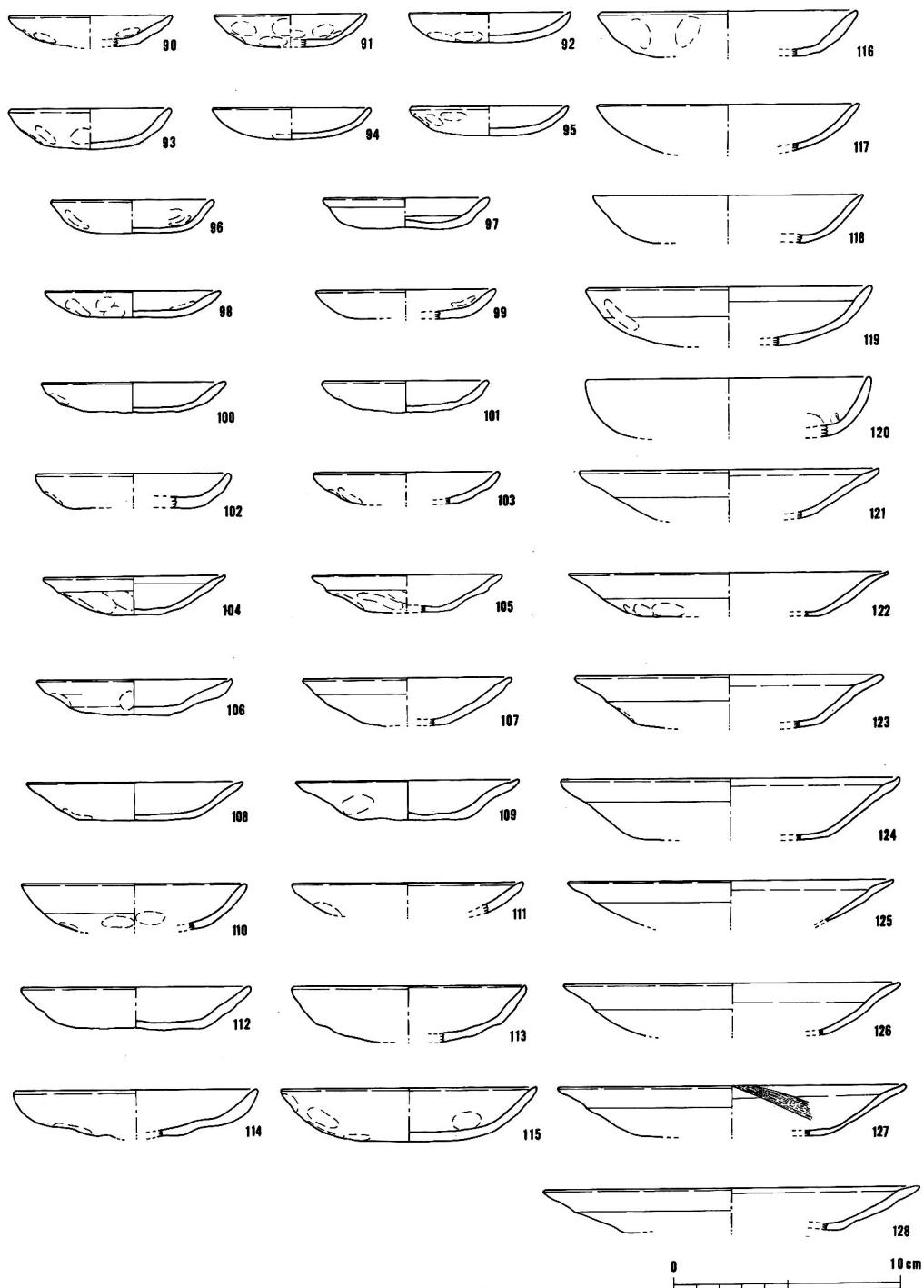
なお、調査成果をもとに発掘調査の原因者である兵庫県・篠山土地改良事務所と協議の結果、東中池改修事業については当初の事業計画を変更し、伝「河津氏館址」は包蔵保存されるに至った。



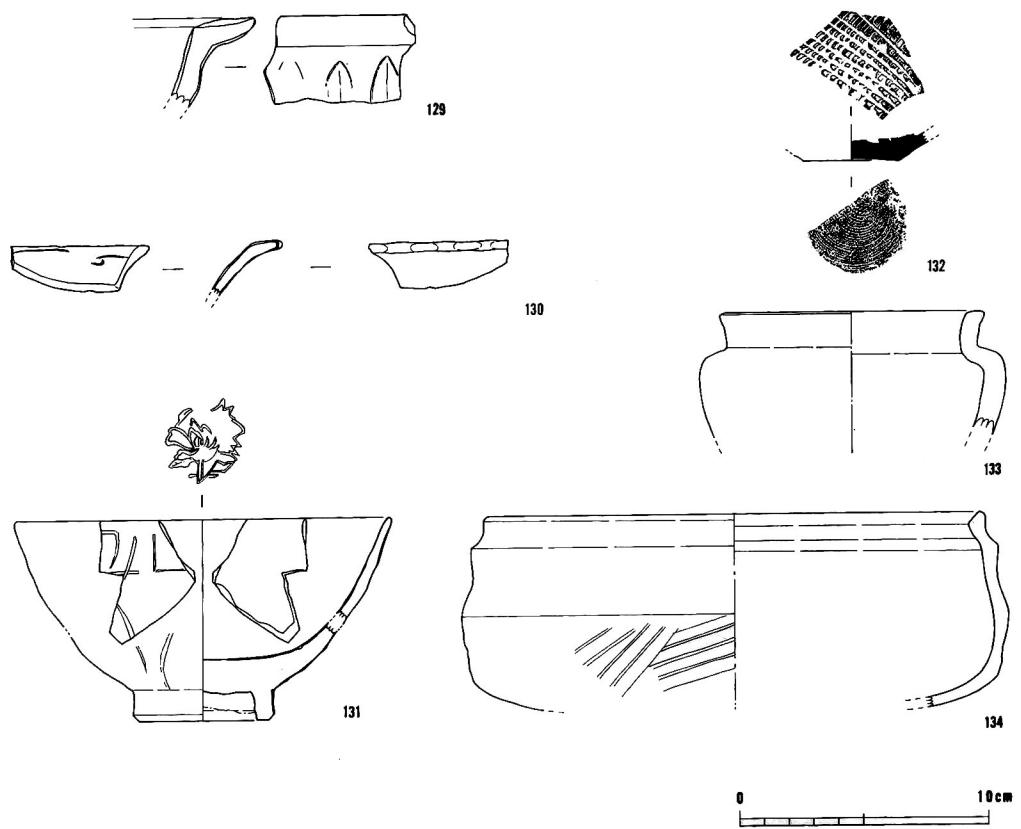
第36図 河津館址遺構平面図



第37図 堀土層断面図



第38図 内郭部溝状遺構出土遺物(1)



第39図 内郭部溝状遺構出土遺物(2)

第 6 章 結 語

氷上郡春日町は周囲峻険たる山峯に囲まれた盆地であり、黒井城（保月・保筑城）を中心とした戦国領国制の地域であった。盟主赤井家の居城黒井城（築城建武2年〈1335〉？）を中心に城・館が囲繞している。ここに言う河津館址と呼称する遺跡は春日町の中心黒井城から東南東約5km、多紀連峯三尾山麓に存する。この三尾山には赤井刑部幸家の城と伝えられる三尾城（築城永祿年間1558～70）がある。本城は東に鏡峠、西に佐中峠を越えて京街道に通する要地にあり、戦略的にみても多紀郡境の抑えとしての存在価値は極めて大きかったと推察される。河津館址は三尾城の搦手口・佐中峠の入口に存在する要衝である。『丹波志』・『氷上郡志』・『丹波戦国史』等によると、河津館の主は赤井氏の客分河津氏としている。

この河津館址に関する古文書類は極めて少なく江戸時代後期の地誌である『丹波志』（寛政6年〈1794〉）に記述されているのみである。『丹波志』から関係部分を抜粋すると下記のとおりである。

氷上郡 姓氏部

一、河津吉右エ門 子孫 棚原村

「中山村三ツ尾城主赤井刑部ニ客分ニテ在屋敷跡ハ中村佐中峠ニ上ル左ニ掘形有所是也同田中ト云所古木一本有今地神ト云此所同人後ニ居住ス棚原村普蔵寺ノ側先祖ノ墓有院号大居士ノ石碑有近年建之山根ト云所ニ子孫本家新七分家醫師玄宥安兵^ハ吉右^イ門庄九郎新左^イ門惣四郎七軒玄宥ニ具足有先祖ヨリ傳ル鎗刀脇指有吉右^イ門ニ系圖ノ写シ有定紋庵ニ木甲二代前ニ分家佐竹君ノ家中ニ忠助ト云者勤ス在千今…」

氷上郡 古城部 春部郷

一、古城 春部 中村

「佐中ノ嶺ノ麓ニ在山ヲ登レバ在堀構ノ屋敷跡有三ツ尾河津氏ノ旧跡ナリ落城天正年中ナリ其後此所ヨリ北ニ當ル田中ニ屋敷有居之テ今民家ヲ不造古墳有子孫」

今回実施した調査は館址の南堀と後背地区を対象とした。

遺構 氷上郡教育委員会及び兵庫県教育委員会の調査結果から東西約86m、南北約75mの「方形館址」と推察される。堀は内郭部を囲繞しているのではなく北側は欠する。地形上の制約か戦略的なものは示すことはできないが、館址の北側では比高1.7mの段差をもつことから北側には堀を構築しなかったと推定する。戦略面からすると堀を代行する池及び田地の存在が考えられ、当該地の田地は湛水の状態を呈し、いわゆる深田であることより泥田堀に該当する可能性を考えている。館址内郭部では柱穴・溝状遺構・土坑などが検出されている。

堀の規模は上端幅5～8m、下端幅1.4～2mを測り、断面形は逆台形を呈する。堀の深

さは最深部で約2.8mである。南堀の構造は特異であり、堀中央部から東あるいは西へ、1段ないしは2段の階段状に掘り下げられ、南堀東端および西端さらに深く掘り下げられている。南堀西端の館址南西隅付近はテラス状の盛り上がりが認められ東端の様相とは異なる。このように堀底を段状もしくはテラス状に削り込む例は詳細な点では異なるが、伊丹市有岡城跡・姫路市書写坂本城跡などで認められる。堀の特異な構造が館址の防禦的施設として機能していたか、地形的な制約による土木技術上の問題なのか検出例が少ない現時点では明言は避けたい。本書ではたんに形態のみを捉え「段状掘り込み」として報告する。今後出土例の増加を待って検討すべき問題と考える。

土壘は内郭部と堀に接する地点に構築され、犬走り等の施設はない。土壘は断ち割り土層断面から6工程を経ており、用土は堀の掘削土（礫を除去した）と搬入土をもって構築したと考えられる。土壘の規模は基底部で幅5m前後、旧地表面からの高さは1.5~2.2mを測る。

遺物 今回の調査時に出土した遺物は調査地域が限られたこともあるが遺構に伴わず遊離した状態で出土している。南堀内から丹波系甕、瀬戸・美濃系天目茶碗が出土した。また土壘断ち割り調査時に瓦器小皿・青白磁梅瓶の破片が出土している。

時期 前述した出土遺物、および氷上郡教育委員会が実施した内郭部確認調査で出土した遺物から判断して、館址の廃絶時期は16世紀前半まで遡れる。しかしこの時期が館址の廃絶時期と決めてしまうには問題が残る。河津館址は三尾城の掲手口付近に位置し、館が三尾城の施設に組み入れられていた可能性は充分に考えられ、「丹波志」の記載どおり廃絶時期を天正6年（1578）の明智光秀による三尾城落城時に求められる可能性がある。この可能性について今回の調査では明確な解答を得られなかった。また同様に「丹波志」に記載されている「河津氏ノ旧跡」ないしは「河津吉衛門 屋敷跡」の記載を裏付ける積極的な根拠も得られなかつたが、今回の報告ではあえて「河津館址」の名称をもちいた。

最後に、本章を書くにあたり、北垣聰一郎、有岡城跡調査委員会・藤井直正・川口宏海の各氏には有益な御教示を賜わり深く感謝の意を表するしだいである。

註) ① 有岡城跡調査委員会・藤井直正（大手前女子大学 教授）・川口宏海氏（大手前栄養文化学院 講師）の御教示による。

② 井垣聰一郎氏（榎原考古学研究所 研究員）の御教示による。

参考文献

- 兵庫県教育委員会「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」1982
- 丹波史談会「丹波氷上郡志 上巻」（臨川書店）1985
- 芦田確次・村上完二他「丹波戦国史」（歴史図書社）1973
- 田代克己・渡辺武・石田善人編「日本城郭大系 第12巻」（新人物往来社）
- 永戸貞著・吉川茂正共撰「丹波志」（名著出版）1973
- 井上宗和「日本の城の基礎知識」（雄山閣）1978



a) 調査区全景(西から)



b) I～III区 土壘・堀遺存状況(東から)



a) I区 館址北東隅土塁・堀遺存状況(南から)



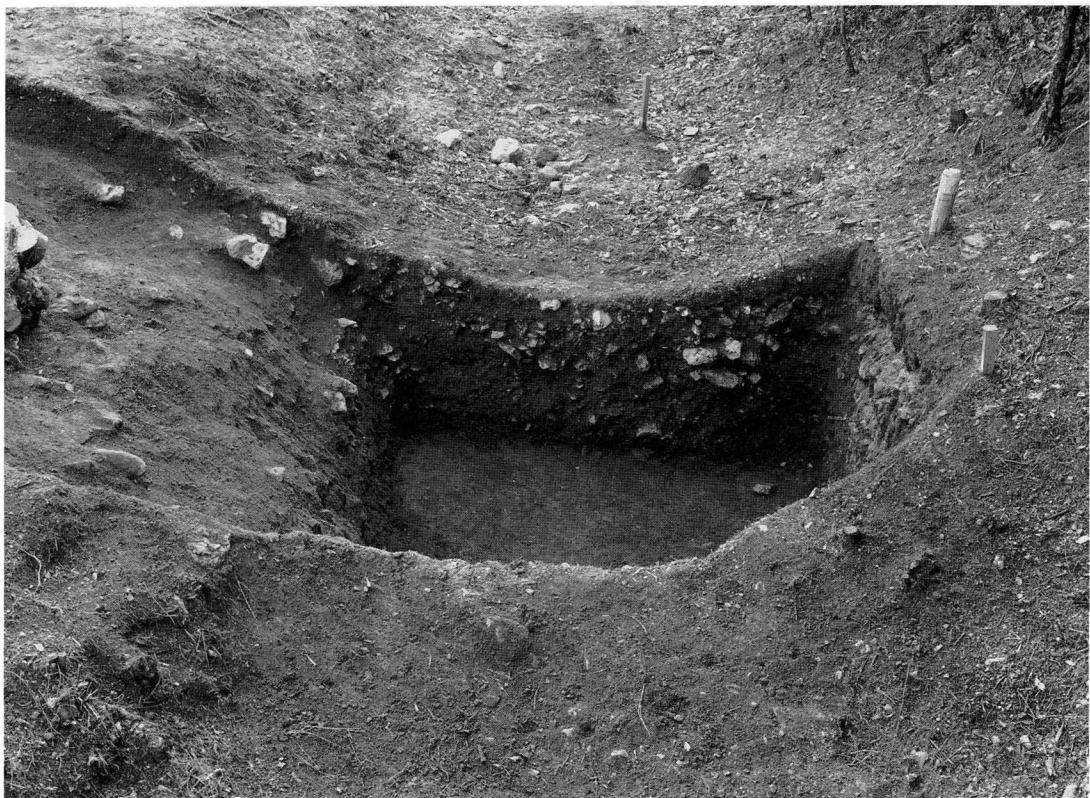
b) IV区 全景(東から)



a) 2 Tr 西壁土層(北東から)



b) 4 Tr (2) 堀内西壁土層(南東から)



a) 5 Tr (2) 堀内西壁土層(東から)



b) 6 Tr (1) 西壁土層(北東から)



a) 6 Tr(2)堀内西壁土層(南東から)



b) 7 Tr(2)堀内北壁土層(南東から)



a) 8 Tr (5) 東壁土層(西から)



b) 8 Tr (5) 石垣検出状況(北西から)



a) I 区 堀・土壘検出状況(東から)



b) I 区 堀・土壘検出状況(南から)



a) I 区 土壠断ち割り A-A'土層(南から)



b) I 区西側 土壠断ち割り土層(東から)



a) II区 堀・土墨検出状況(南西から)



b) II区 堀・土墨検出状況(西から)



a) II区 西側段状掘り込み検出状況(南から)



b) III区 堀検出状況(東から)



a) III区 西側段状掘り込み検出状況(南西から)



b) IV区 全景(南東から)

図版一二 遺構



a) IV区 全景(西から)



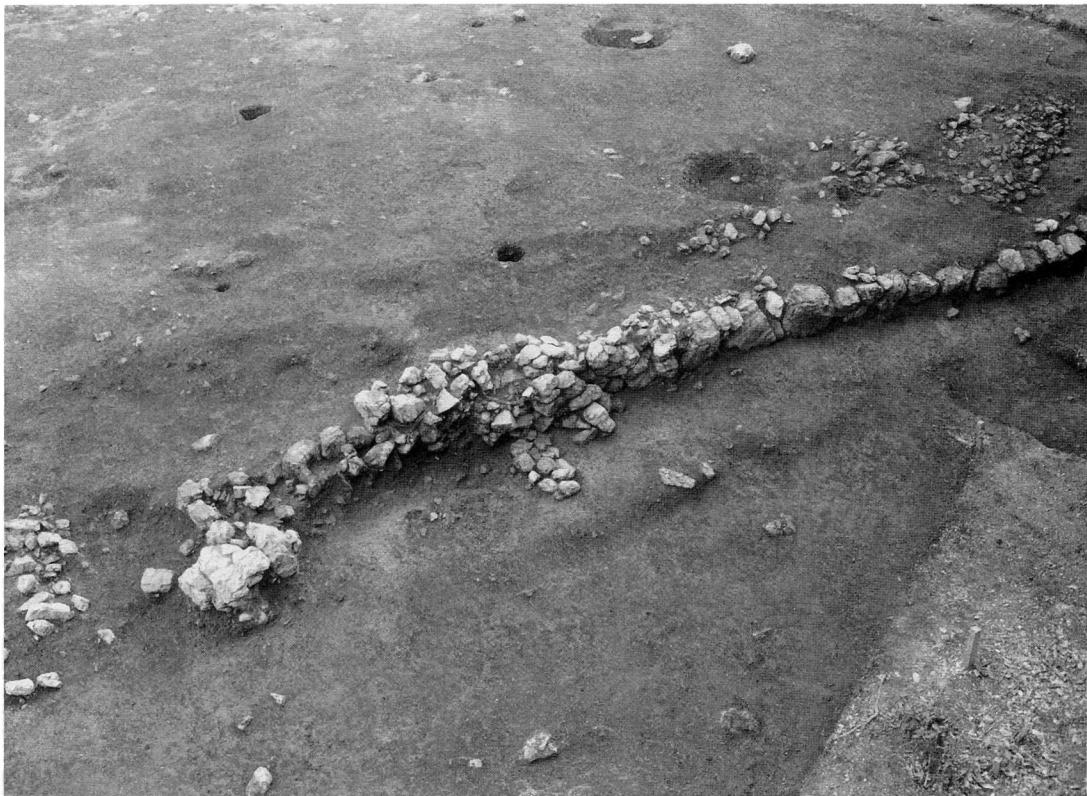
b) IV区 井戸検出状況



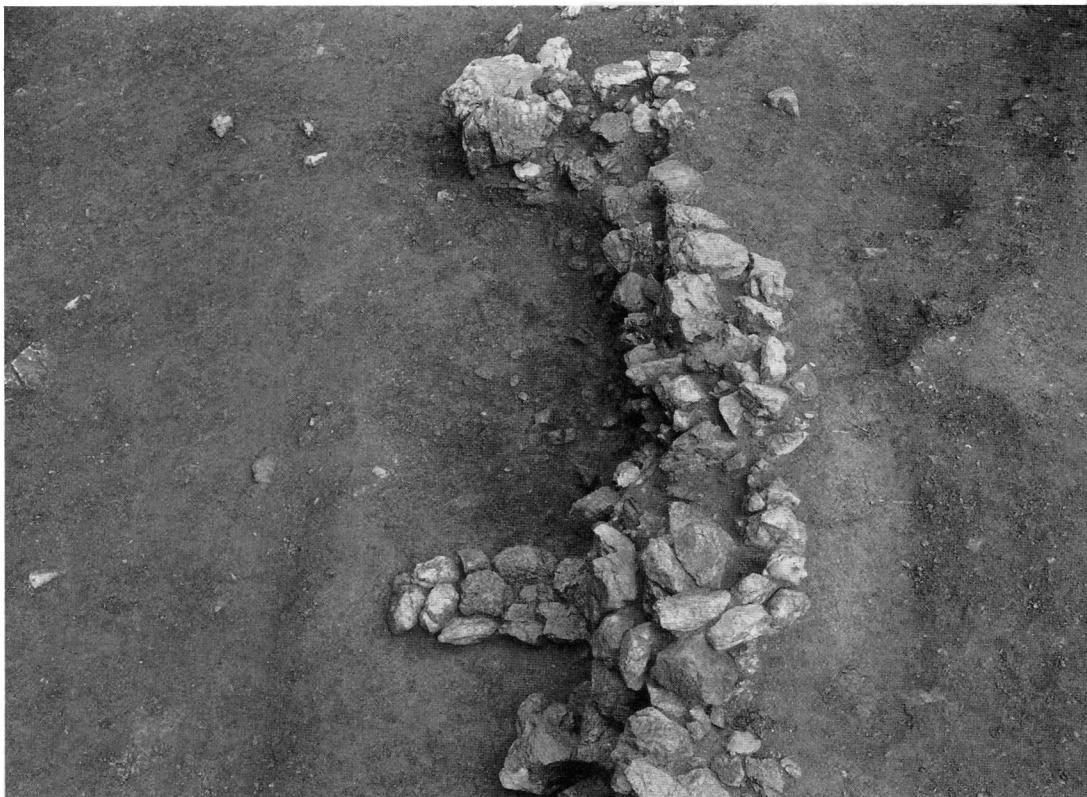
a) IV区 井戸検出状況(西から)



b) IV区 土坑検出状況(東から)



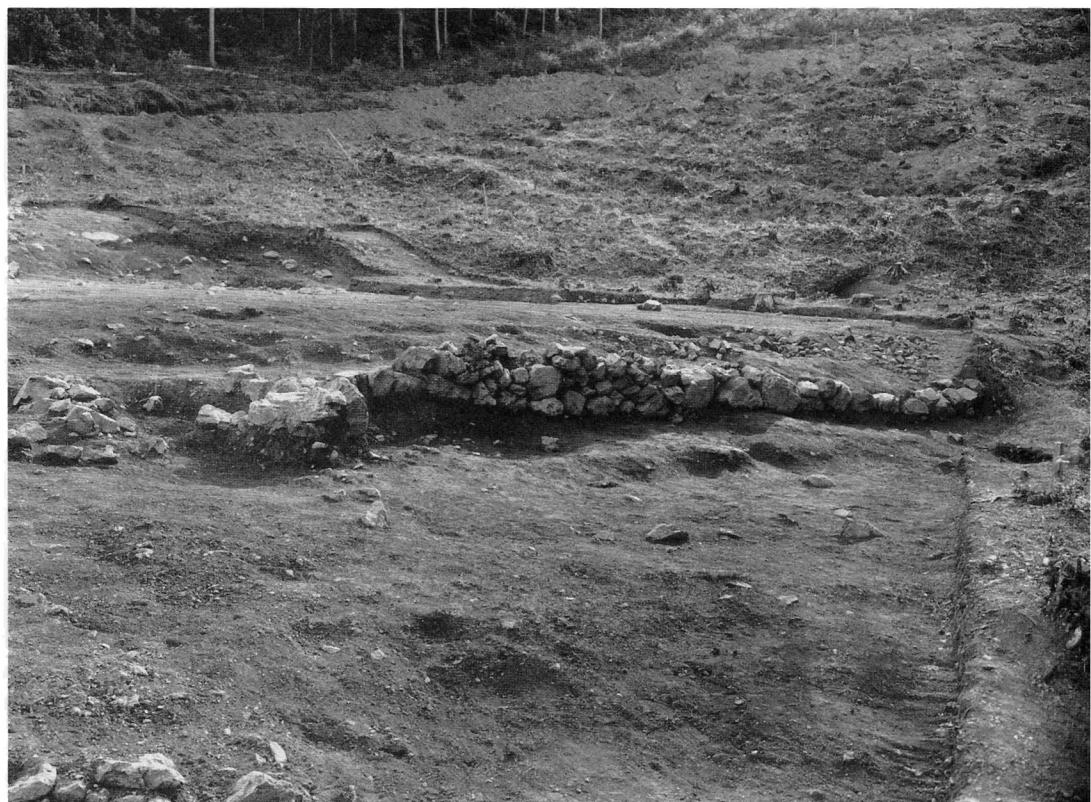
a) IV区 窯状遺構と石垣検出状況(北東から)



b) IV区 窯状遺構検出状況(西から)



a) IV区 石垣検出状況(東から)



b) IV区 石垣検出状況(北東から)



a) IV区 旧道検出状況(北から)



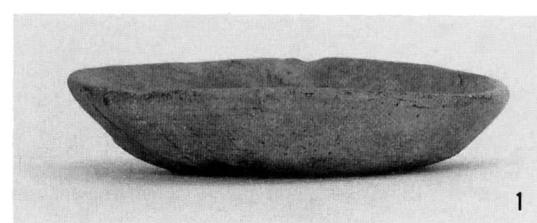
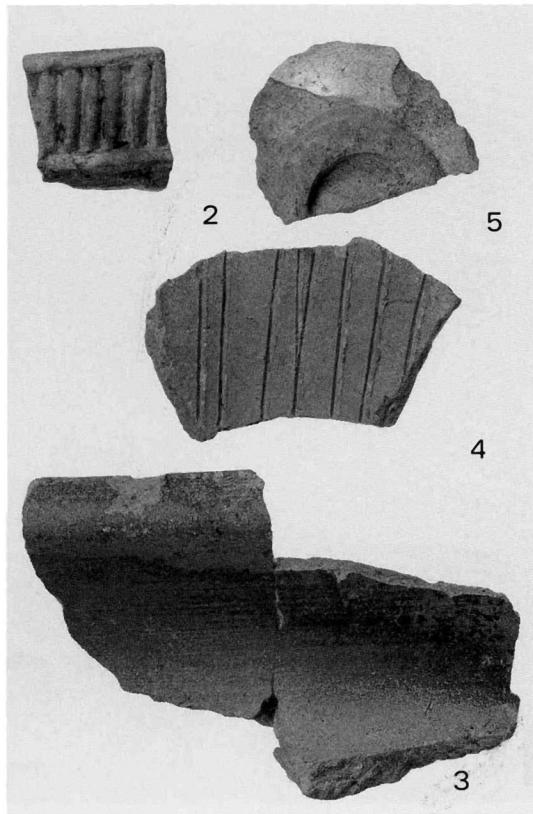
b) IV区 断ち割り状況(西から)



a) 調査終了後全景(西から)



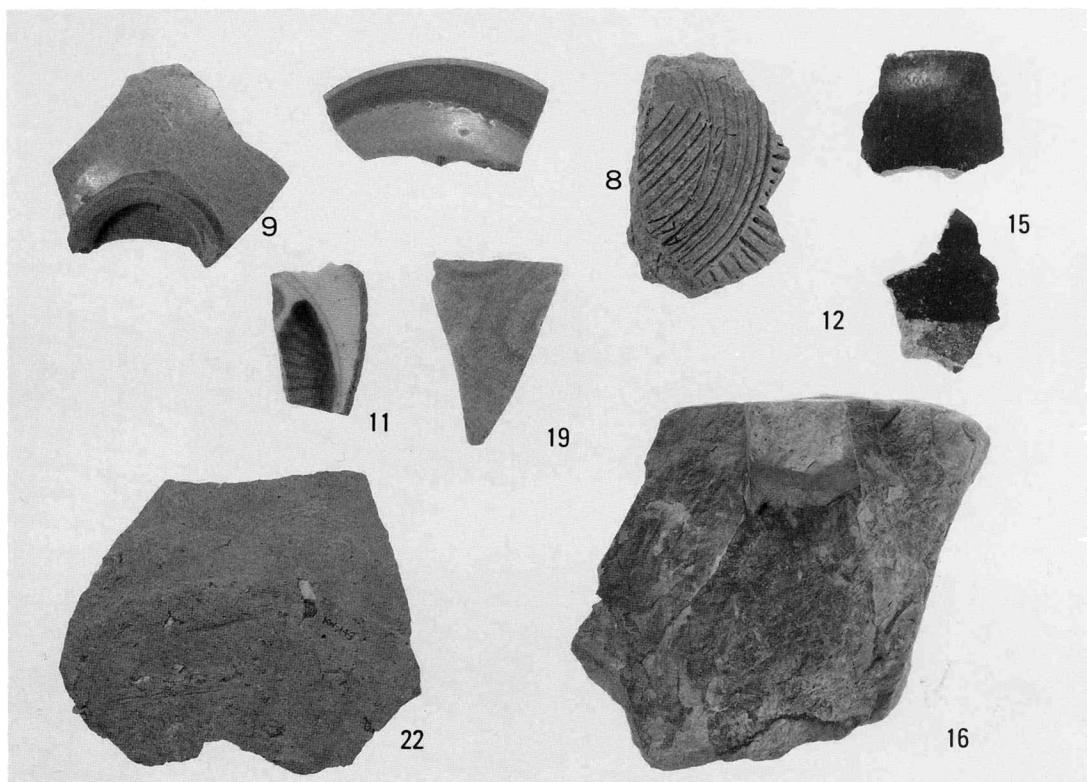
b) 調査後航空写真(北西から)



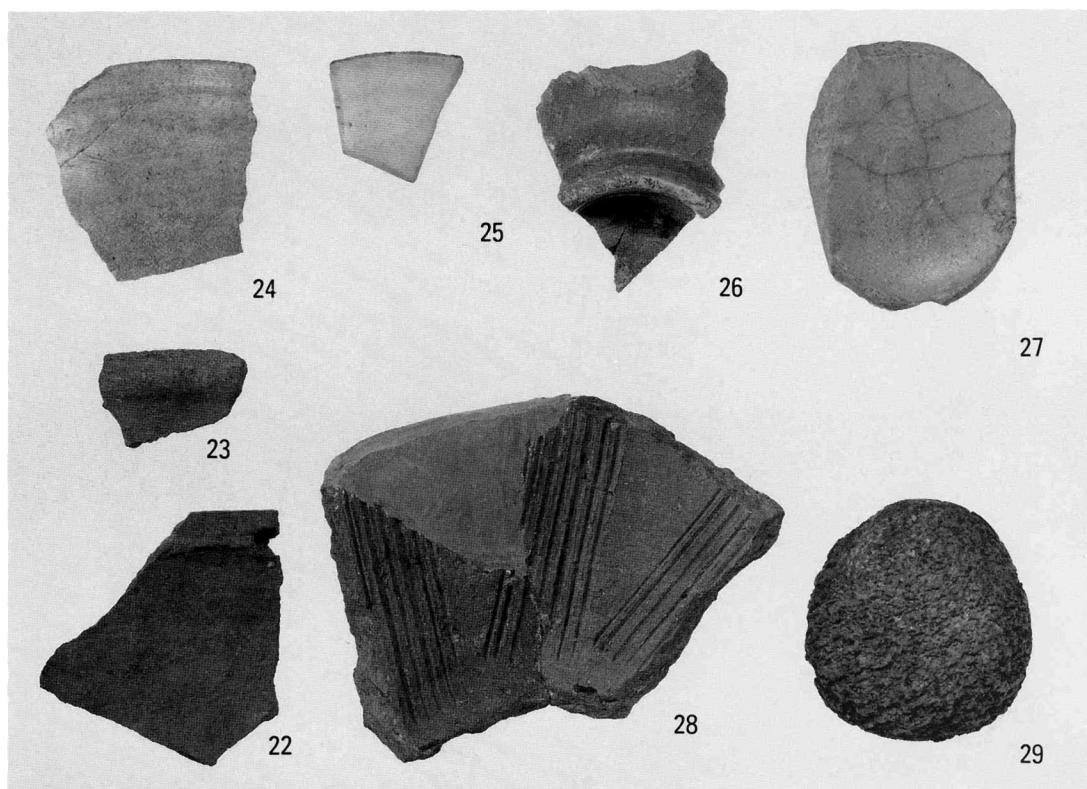
確認調査
2Tr(2) 6Tr(3・4) 8Tr(1・5)



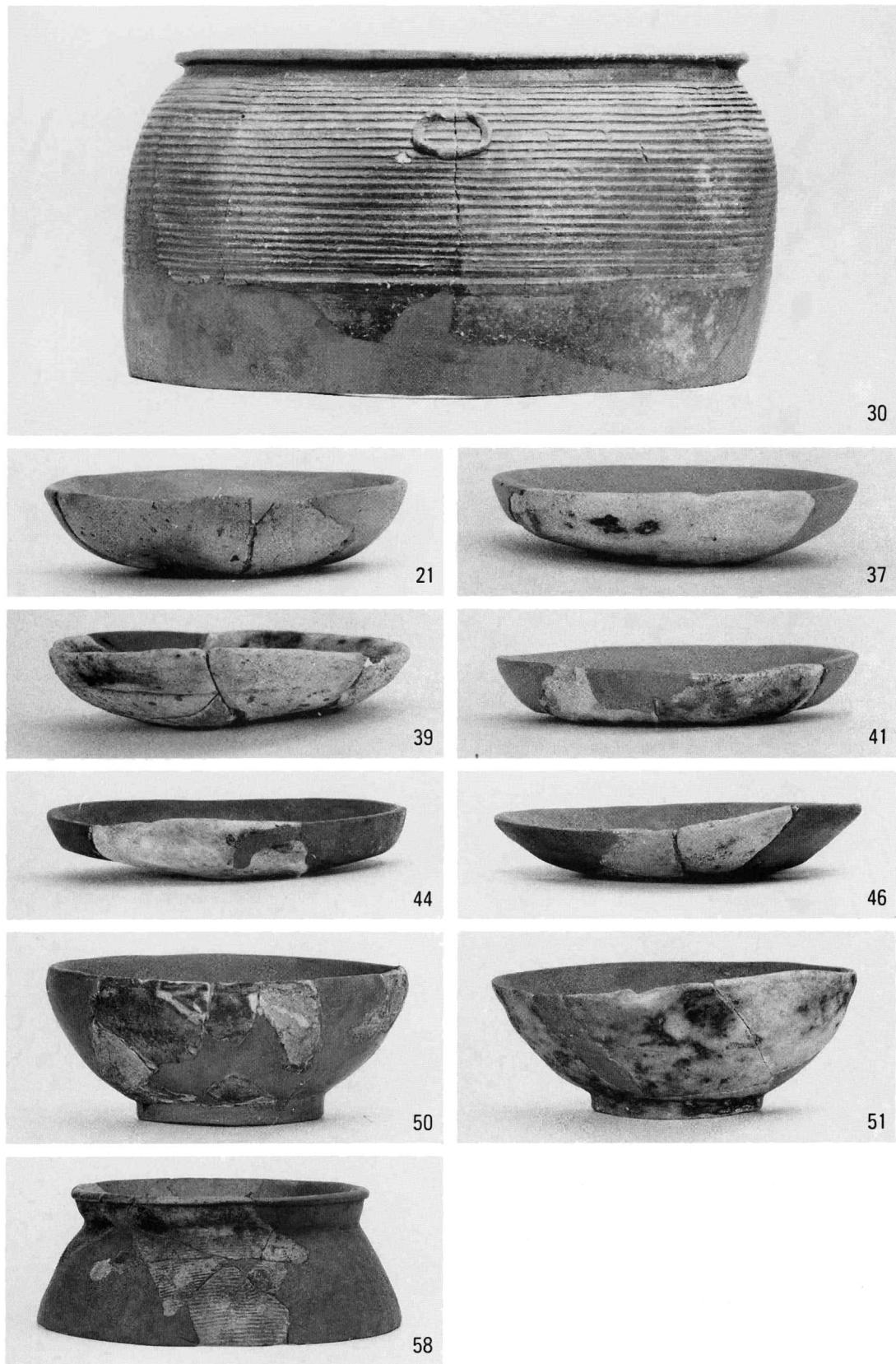
I区 表土中(10) 堀埋土中(13・14) 土壘内(18)



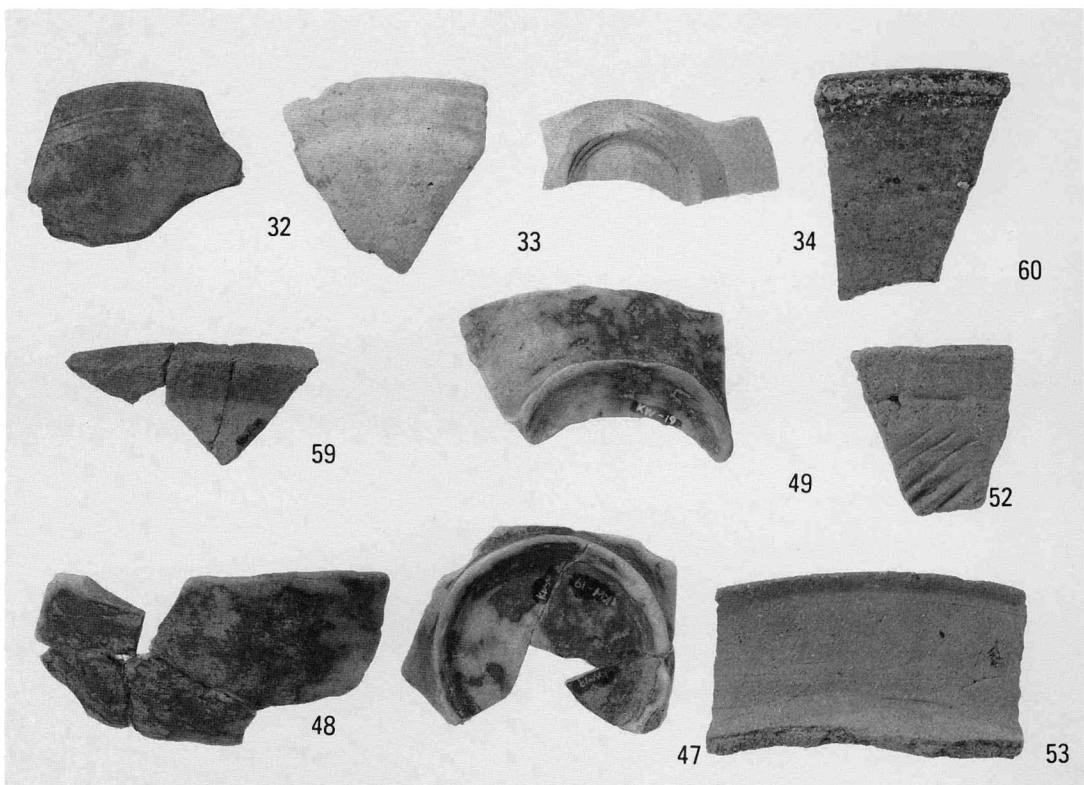
IV区 表土中(8・9・11・12) 堀埋土上層(12) 堀下層(15・16) 土壘内(19)



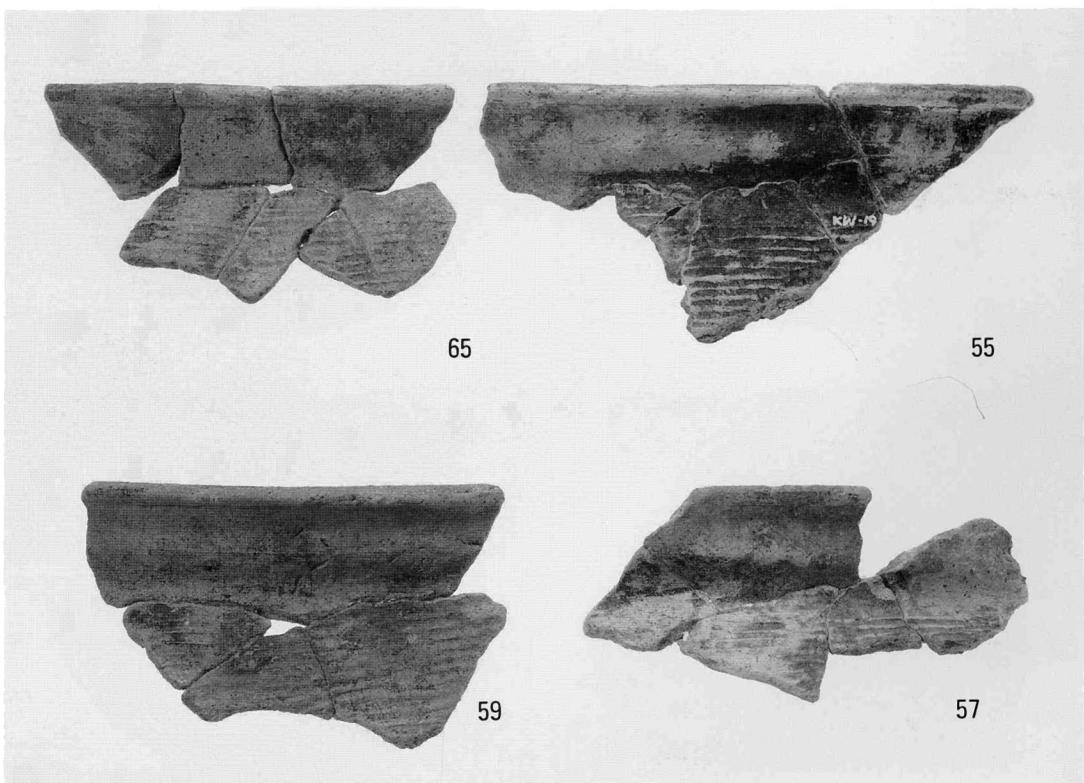
IV区 表土中(22~29)



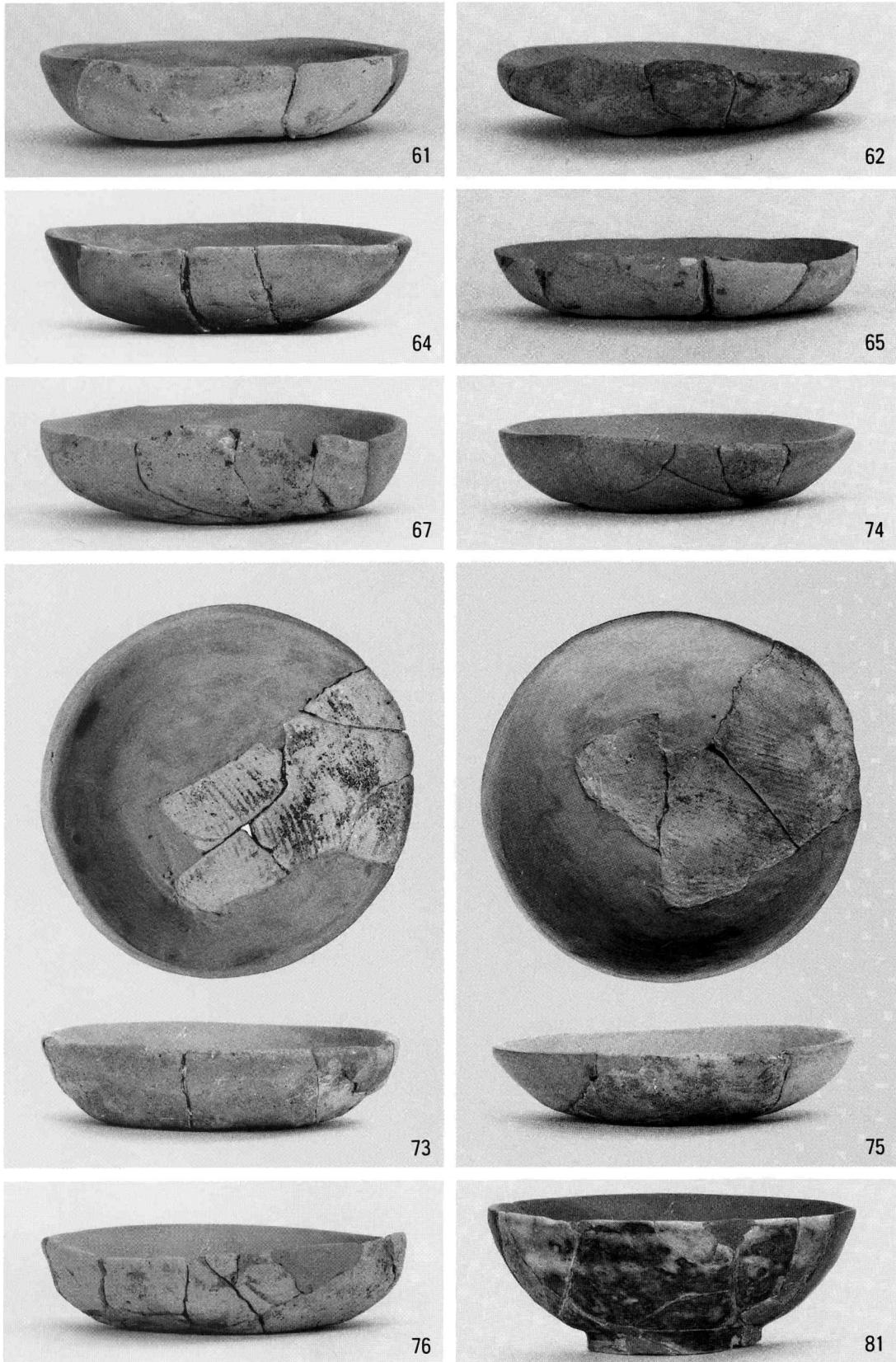
IV区 土坑(30) 旧道肩部(21・37・39・41・44・46・50・51・58)



IV区 石垣裏込め土内(32・33) 石垣付近流土中(34) 旧道肩部(47・48・49・52・53・59・60)

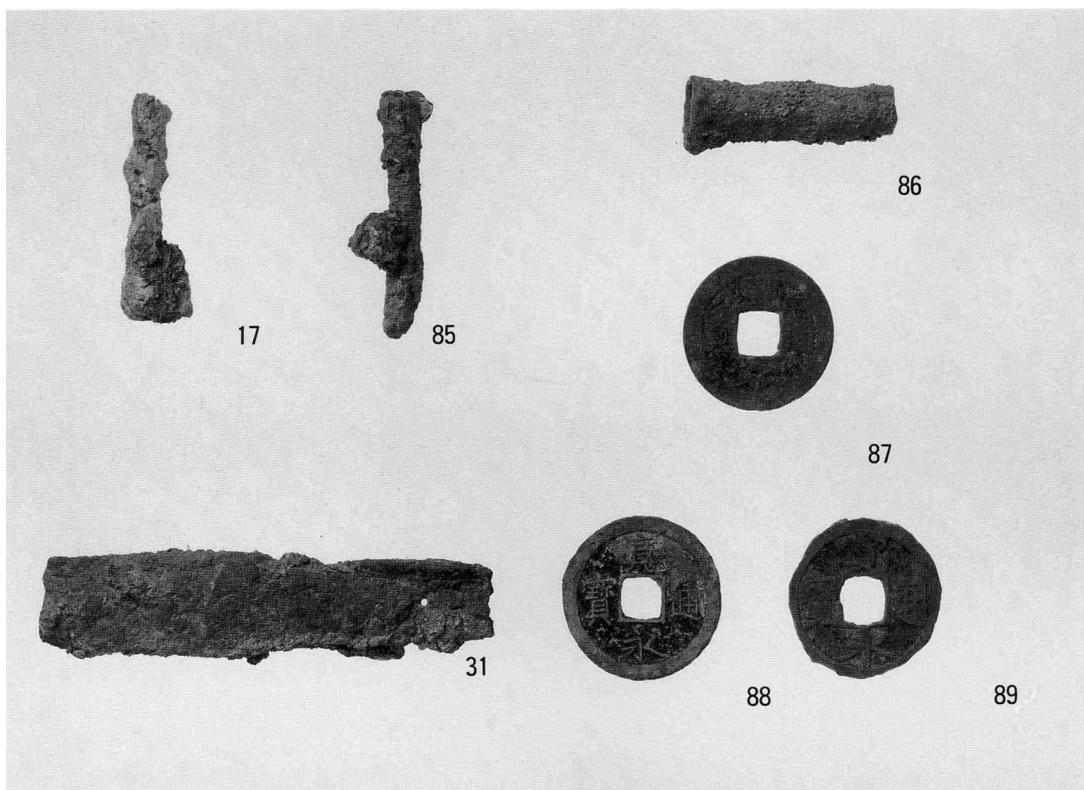


IV区 旧道肩部(55・57・59) 整地層(第9層)(65)



IV区 整地層(第9層)(61・62・64・65・67・73・74・75・76・81)

図版二三 遺物 鉄製品・銅錢



IV区 窯状遺構(31) 整地層(85・86) 表土中(87・88・89)

「河津古宮丸上」 正誤表

ページ	行	誤	正
図版 目次	図版七	b) I区土器検出	b) I区 <u>器</u> ・土器検出
	図版一〇	b) .. (唐から)	b) .. (唐から)
	図版一四	a) 墓状遺構 ..	a) IV区墓状遺構 ..
		b) 墓状遺構 ..	b) IV区墓状遺構 ..
	図版一五	a) 石垣 ..	a) IV区石垣 ..
	図版一六	b) VI区 ..	b) IV区 ..
3	25, 26	.. 保盒 保盒 ..
6	16	.. 破片 砕片 ..
57	IV区出土 の 構 成	(法量) 厚み0.8	(法量) 厚み0.08
		(遺物番号) 88	(遺物番号) 89
		(法量) 厚み0.8	(法量) 厚み0.08
		(遺物番号) 89	(遺物番号) 88
		(法量) 厚み1.0	(法量) 厚み0.1

兵庫県埋蔵文化財調査報告書 第43冊

河津館址

—近畿自動車道舞鶴線に伴う
埋蔵文化財調査報告書(VI) —

1987年4月1日 発行

発行 財団法人 兵庫県文化協会

〒650 神戸市中央区下山手通4丁目16-3

TEL(078)321-2131

編集 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL(078)341-7711

印刷 船場印刷株式会社

〒670 姫路市定元町4の2

TEL(0792)96-3535
